
緋弾のアーサー霊刀の侍

海人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリーア―霊刀の侍

【Nコード】

N 8 1 9 5 W

【作者名】

海人

【あらすじ】

空から女の子が降ってくると思うか？いいや！思わない！というか思いたくない！！けど、人生つてのはうまくいかねえーな！天は、そんな俺をあざ笑うかのように、災いのプレゼントをくれやがった。タイトル変えました。毎週火曜更新予定。土日は、二話更新予定。できたら、三、四話更新。

一 本 目 災いのプレゼント（前書き）

変な点がありましたら、教えてください。

一本目 災いのプレゼント

いきなりで悪いが、空から女の子が降ってくると思うか？少なくとも俺、東城一真は思わない。というか、思いたくない。しかし、そんな俺をあざ笑うかの如く天は、俺に災いの種を撒き散らしやがった。

武偵。それは、悪化する凶悪犯罪に立ち向かうべく創られた武装探偵を指す。そして、それを育成する場所が俺、東城一真の通う、武偵高だ。そんな武偵高行きのバスに、俺は乗り遅れ、仕方なくチャリンコをこいで行った。それが、災いの始まりだった。

「ソノチャリ二八、バクダンガシカケテヤガリマス」
人の声ではない。機械の声。

「チャリヲオリヤガツタリ、ゲンソクシタラバクハツシヤガリマス」

「なんでだあああああああ！！！！！！！！」

俺は、その機械声に盛大につっこみを入れながら、チャリの速度を上げる。俺の後ろには、短機関銃をつけたセグウェイがついてきている。今俺は、世にも珍しいチャリジャックに遭っているのだ。

「くそつたれ！！こっとなったら携帯で！」

俺は、そう言いながら携帯の入った、ポケットに左手を動かそうとしたそのとき。

「ケイタイデタスケヲヨブト、バクハツシヤガリマス」

おいイイイイイイイ！！！！！！！！！そんなのありかあああああ！
！？俺は、すかさず左手をハンドルに戻した。今日はなんて厄日だ。俺がそんなことを思いながらこいでいると、俺と同じくチャリをこいでいる奴がいた。そして、後ろには俺のと同じ、セグウェイが付いていた。っつーかあれ！

「キンジ！？」

「一真！？お前もか！？」

俺の親友、遠山キンジもまた、俺と同じ目に遭っていたのだった。

俺は、チャリをキンジの横にもっていった

「キンジ。どうするよこれ？」

俺は、苦笑いしながら、キンジに尋ねた。

「俺は、人気のないところで助けが来るのを待つ」

そうか………ということは、キンジに付いていけば俺も助かる。そこで、俺の知恵が働いた。

「じゃあ、キンジ。俺、足疲れたから、お前のチャリにこれから移るわ」

「はあ！！！？お前何考えてんだよ！！」

つべこべ言つな。俺は、キンジにそう言い、自分の乗っているチャリからキンジのチャリの後ろに飛び移った。操縦者を失った俺のチャリは、その場に倒れ、「ドッガン！！」と、音を立て、大爆発

を起こした。

「ひゅー。すげえな、おい」

俺は、口笛を吹きながら、爆発した俺のチャリを後ろから見ていた。

「「すげえな、おい」じゃねえよ!! お前!! なにやってんだよ!」?

あん？何って、お前のチャリに飛び移っただけだろ？

「なんでそんなに軽いんだよ!？」

キンジがそんな俺につっこみを入れてきた。

「そんなことするより、減速しないようにこげ。キンジ」

俺は、こんな状況になっているのに俺たちを見上げる青空を、憎憎しく見上げていた。そのとき

「あれ？」

なんか、屋上に緋色のツインテール娘がいただけで

「どうした？一真」

[illegible]

俺は、キンジに説明しようと口を開けたとき、緋色のツインテール娘が飛び降りた。キンジもそれに気づいたらしく、驚愕の表情を浮かべた。そのツインテール娘は、パラグライダーを展開し、俺たちの方へ、近づいてきた。

「く、来るな！このチャリには、爆弾が仕掛けられてるんだぞ！」

キンジが、近づいてくるツインテール娘に叫んだ。というか、そのままその娘に助けてもらった方が良くないかねえか？俺がそんなこ

とを思っていると、その娘は、太もものホルスターから、白と黒のガバメントを取り出した。

「ほら！そこのバカ二人！頭下げなさい！」

バカって、まあそうだけど。俺は、その娘の言うとおりに、頭を下げた。その娘は、俺たちの頭が下がるのを確認すると、ガバメントをセグウェイに構え、発射した。

ダダダダダダダダダダダ！！！！！！！！！！！！！！！！！！

と、音を立てながら、セグウェイは、大破していった。すっげえ

「武偵憲章一条！仲間を信じ仲間を助けよ！」

そう言う、ツインテール娘は、パラグライダーの手をかける部分に足をかけ、宙吊り状態になった。てことは、あれか？それに捕まわってか？おもしれえじゃねえか！キンジは、一瞬迷ったが、そうするしか助けがないと踏んだんだろう。両手をハンドルから離し、上に上げた。

「行くわよ！」

ツインテール娘は、そのまま俺たちに近づき、キンジはその娘を掴み、俺はその娘を掴んだ、キンジにしがみついた。その数秒後、キンジのチャリが、「ドッカーン！！」と、音を立てながら、大破した。それと同時に、爆風が俺たちを襲ってきた。いたたたっ！！ちよっ！！小石痛ッ！！俺は、その言葉を最後に、意識を失った。

二日目 ツインテール娘は転校生

「う・・・ん？」

俺は、意識を取り戻し、目を開けた。上には、茶色い天井が広がる。つーことは、体育倉庫か。俺は、体を起こし、キンジたちを探した。そのとき

「この変態！！」

と、先ほどのツインテール娘の声が聞こえた。なんだ？俺は、その方を向いて、絶句した。なぜなら

「何やってんのキンジ？」

俺の親友キンジが、跳び箱の中で、先ほどのツインテール娘の服を、脱がそうとしていたのだ。

「違う！！誤解だ一真！！」

キンジは俺に向かって、そう叫ぶ。

「何が誤解だ。お前、この状況見たら誰だってお前がやったように見えるだろ」

俺は、キンジを軽蔑した目で見ながら言う。そのとき

ズガガガガガガガガガ！！！！

と、体育倉庫の外でマシンガンの音がした。これってまさか！？俺は、体育倉庫の外を見た。そこには、7台のセグウェイがこちらに銃口を向けていた。げっ！！？俺はとっさにキンジたちの近くに逃げ込んだ。

「おいおい、なんだよありゃ？」

俺は、緋色のツインテール娘に尋ねた。

「武偵殺しのおもちゃよ！」

ツインテール娘はそう言いながら、二丁のガバメントをセグウェイに構え、発砲していく。その単語を聞いたキンジが、驚愕の表情になっっていく。

「あんたちも応戦しなさいよ！！あたしの銃だけじゃ火力負けする！」

んなこと言われてもなあ。俺銃持つてねえし。というか、キンジやばくねえか？その状態じゃ、ヒスルぞ？ツインテール娘が、撃ち終えたと同時に、セグウェイたちも引いていくのが見えた。

「やったのか？」

お！キンジの口調が変わった。つーことは！

「一時的に追い払っただけ。またすぐ来るわ！」

「強い子だ。それだけでも十分だよ」

プッ！あいかわらずキザな言葉だな。そんなことを言いながらキンジは、ツインテール娘をお姫様抱っこし、近くのマットに運び、座らせた。

「姫はその席でごゆっくり、銃なんて物は、俺だけが持てば良い」
おいおいキンジ。その娘、分けが分からないって顔してるぞ？

「な、何言ってるのよ！あんた！急にキャラ変えて！なにするつもり！？」

そのとき、外が騒がしくなってきた。来たな

「アリアを守る」

へえー。アリアって言うんだ。俺は、そんなことを思いながら、腰に下げていたポーチから、巻物を取り出し、キンジのところへ向かう。

「キンジ。おもしろそうなことは俺にもやらせろ。俺はノルマ三台だ。お前は一つ増やして、四台にしてやるよ」

俺はそう言いながら、懷から刀身が薄い緑色の刀を取り出した。

「来るぞ」

キンジのその言葉と共に、先ほどのセグウェイが俺たちに発砲してきた。俺は、右手に持った刀を弾に向けて、横に振った。すると、その刀から風が吹き、飛んでくる弾を切り刻んだ。

「さて！次は俺たちの番だぜえ！カマイタチ鎌鼬！」

俺はそう言うと、右手に持った刀、鎌鼬を俺のノルマである三台の刀に向けて、振るった。鎌鼬から、強烈な風が吹き、三台のセグウェイを

スパッスパッスパッスパッスパッスパッスパッスパッスパッ
と、音を立てながら、切り刻んだ。切り刻まれたセグウェイは、その場に粉々になった。さーてと。キンジは終わったかな？俺はそう言いながら、キンジの方を向いた。キンジは、発砲してきたセグウェイの弾を避けつつ、銃口に向かって、自分のベレッタキンジモデル（笑）から、弾を発砲した。その弾は、セグウェイの銃口に入り、四台のセグウェイは、大破していった。ひゅー。ヒステリアモードはすげえな。発動条件意外。

「おーお。かつこよく決めちゃって」

俺は、鎌鼬を巻物に戻しながら、キンジに皮肉っぽく言う。

「褒め言葉としてもらっておくよ」

「………なんか腹立つ。俺が、キンジに少し怒りを覚えたときマツトの方から、声が聞こえた。」

「か、感謝なんかしないんだからね！本当は私一人だって出来たんだから！本当の本当よ！」

緋色のツインテール娘が、スカートのフックを上げながら、俺たちに向かって言いわけをしてきた。というか、別に疑っては無いんだが？

「それに！あんた、私の！む……胸見たじゃない！」
おいおいキンジ。こんな奴の胸のどこがいいんだ

「誤解だアリア。あれは不可抗力だ」
不可抗力ねえ。キンジは、そう言いながら、アリアに自分のベルトを投げつける。

「何が不可抗力よ！この強猥魔！！」
プッ！いかん。ちよつと笑ってしまった。

「アリア。冷静に考えよう。俺は高校生だ。いくらなんでも、中学生のアリアを脱がすようなことはしない」
そう言やそうだな。俺がそんなことを思っていると

「あたしは！中学生なんかじゃない！」
キンジに向けて、怒鳴りだした。そりやそうだろキンジ。歳を間違えられたら誰だって怒るさ。本当は

「小学生だろ？」

俺がそう言ったとたん、アリアは目つきを変え

「あたしは！！高2だあああ！！」
と、怒鳴りだした。

「ええええええええ！！？お前はどつ見ても小学生だろ！！？」
ありえんだろ。こんな小さな高校生。俺がそう言ったとき、アリアはホルスターからガバメントを取り出して来た。まさか・・・

「こんな奴ら。助けるんじやなかった！！」

アリアが俺たちに銃を向けてきやがった！キンジ！まかせたぞ！キンジは、アリアが発砲しようと同時に、アリアの両腕を脇ではさみ、ガバメントをはずした。ナイスキンジ！だが、アリアはその後ガバメントをしまい、キンジの腰を掴み、そのまま、体育倉庫の外へ投げつけた。おいおい、徒手格闘も出来んのかよ

「逃がさないわよ！あたしは犯人を逃がしたことが一度もな・・・」

ん？アリアの台詞が止まったぞ？

「あれっ！！？あれれ！！？」

アリアは、ポッケの中を手探りながら、声を上げる。まあ、あいつの仕業だろ。

「探し物はこれかい？」

キンジが、手のひらにあるマガジンを見せ付けていた。やっぱりな。たぶん、さっき投げられた時に取ったんだろ。アリアは、それを見ると、ますます怒りが心頭したみたいだ。

「絶対許さない！泣いて謝っても！もう許さないんだから！！」

アリアはそう言いながら、ガバメントをホルスターにしまい、背中から子太刀を二本取り出し、キンジに走っていった。あ、足元・・・

「みきやお！」

アリアは、おそらくキンジが転がしたであろうマガジンの弾によって、転んでしまった。あ、パンツ見えた。

「一真。逃げるぞへえーい。」

「じゃあな！ピンクパンツ！」

「ピンクパンツって言うなああああ！！！！絶対！！風穴開けてやるんだからあああああ！！！！！」

あーあー。何も聞こえない。

「いやあ。結構おもしろかったなキンジ」
クラス分けの結果、俺とキンジは、同じ2-Aのクラスになった。
まあ、そうしないと物語が楽に進められないからな。

「どこがだ。あと、メタ発言やめろ。一真」
隣の席で潰せ状態になっているキンジに軽くつつこまれた。

「おう！キンジに一真！同じクラスだな！」
声のした方を向いて見ると、車輛科^{ロツ}の生徒で、一応俺とキンジの友達である武藤剛気だ。あと、武偵高には〇〇科。って言うのがある。
詳しくは、wikiで確認してくれ！

「んだよまたお前と同じクラスかよ。いい加減俺の目の前から消えてくれ武藤」

こいつは、乗り物と名のつく物ならなんでも乗りこなすことの出来るスゴ技を持っている。俺から見たら、ただの乗り物バカなんだけな。あと俺は、武藤がなんか嫌いだ。

「なんだよそれ！というか、キンジどうしたんだ？」
武藤は、机にうつぶせになっているキンジを見て、俺に尋ねた。

「まあ、いろいろあったんだよ。想像以上の出来事かな」
俺が武藤にそう話していると

「はい。席について。HR始めるわよ」

武偵高1やさしいと言われる、高天原先生が教室のドアを開けて、入ってきた。先生。なんでこんなとこの先生になったんだよ

「ふふ。ではまず、去年の三学期に転校してきたカワイイ娘に自己紹介してもらおうかしら」

へえー誰だろうな？まさか、アリアとか。俺は冗談のつもりで言った。そして、その人物を見たとき、俺とキンジは驚愕した。緋色のツインテールを揺らした、小学生並みの身長、アニメ声の持ち主。アリアが、入ってきた。そして、とんでもないことを言い出した。

「先生。あたしあいつらの近くに座りたい」

三本目 憧れの先輩

あれえー可笑しいなあ。幻聴が聞こえた気がするんだけど？「あいつらの近く？」それって、完璧に俺とキンジのことだよな？指まで指されてるし、やべーよみんなの視線がちよー痛いんですけどおおおおー！！？

「な、なんでだよ！？」

キンジが驚愕の声を上げた。

「何か知らねえけど、この状況を作り上げたと思われるキンジに死刑を要求する」

「俺は悪くねえよ！」

俺とキンジがそんな言い争いをしているとちょうど俺たちの近くだった武藤が立ち上がった

「よ、よかったなあ！キンジ！一真！お前らにも春が来たみたいだぞ！先生イ！俺転校生さんと席変わりますよ！」

この野郎！後で東京湾に沈めてやる！！

「あああら、最近の子は積極的ねえ。じゃあ、武藤君。席かわってくるかしら？」

先生イ！！そんなこと言ってる場合ですか！！？転入早々近くの席に座りたいなんざ、遠まわしに告白してるようなもんですよ！！そんな俺の心の響もむなく、武藤は席を替わっていく。それと周りの連中。ギャーギャーうるせえ！！

「キンジ。これ、さっきのベルト」

アリア歩きながら、キンジに向かって、さつきキンジが投げたベル
トを返してきた。

「理子分かつちゃた！分かつちゃった！これフラグバツキバキに立
ててるよ！」

そう言いながら、席を立つ金髪の少女は、峰理子。探偵科1おバカインケスタ

「キー君ベルトしてない！そしてそのベルトをツインテールさんが持ってきた！これ謎でしょ！謎でしょ！でも理子には推理で来ちゃった！」

お！これはおもしろい物が見れそうだな

「キー君は彼女の前でベルトを取る何かをした！そしてそれを彼女の部屋に忘れた！つまり！二人は熱い恋愛の仲なんだよ！」

プッハハハハハハ！！！！こりや傑作だ！！やつぱ理子はおもしろえな！よーし！俺も参加すっかな！

「異議あり！理子フラグ部長！！キンジは彼女の部屋でベルトを取っていません！！」

俺は立ち上がりながら、叫ぶ。

「ほほう。ではどこでとったのですかな！かず君係長！」

ちなみにかず君と言うのは、俺のあだ名だ。

「お答えしましょう！ズバリ！体育倉庫です！」

俺のこの発言と共に、クラスのざわめきは、いっそう増した。そして、キンジは俺の方を、睨み続けていた。そのとき

バキュン！バキュン！

と、二発の銃声が響いた。一発は天井へ、一発は俺の机へ放たれていた。ははっ、やべ、調子に乗りすぎたか？

「れ、恋愛なんて！く、くっだらない！」

アリアは、顔を真っ赤にさせながら、言い放った。いやいや、そうでもないぜ。

「覚えときなさい！そんなことを言う奴は！！！」

これが初めてだった。これから俺が聞き飽きるほど聞かされる言葉を聞くのは

「風穴開けるわよ！！！」

「調子に乗るんじゃないかった」

俺は今、午前の授業が終わり、午後の授業、強襲科アサルトの訓練をしているところだ。武偵高では、午前中に一般高と同じ授業をして、午後からそれぞれの学科で授業、用は訓練をするのだ。なお、この時間をクエストに使っても言いわけだ。クエストを無事終了させると、報酬金が入る作りになっている。ま、銃を使わない俺がこんなところにきてやることといっても、筋トレくらいなだけだな。日課の筋トレを終えた俺は、暇だったので射撃訓練場を見に行ってみた。そこには、茶色い髪にの両サイドに白いリボンをつけた、「美」をつけても文句はないほどの少女が、訓練中のアリアの姿を、防弾ガラスの外から見ていた。なに、この娘？

「素敵です……アリア先輩」

「誰が素敵なの？」

「わっ!!!？」

その娘の近くで、話しかけてみたら驚かれた。ちょっと悲しい。

「ごめんごめん。驚かすつもりはなかったんだ。えっと……」

「私は1年の間宮あかりって言います。あかりでいいですよ」

「俺は二年の東城一真。一真でいいよ」

俺は、アリアを見ていた謎の少女、あかりちゃんに名を告げた。

「なんでアリアを見てたんだ？」
俺があかりにそう言ったとき

「あ、アリア先輩とお知り合いなんですか！？」
俺に駆け寄ってきた。な、なんだ！？」

「あ、ああ。同じクラスで知りあった」

「うらやましいですう」
そうか？

「で？話を戻すけど、どうしてアリアを見てたんだ？」

「アリア先輩は、あたしの目標なんです。アリア先輩みたいに、強くなりたいです！」
なるほど、ファンの一員みたいなもんか

「なんで強くなりたんだ？」

「あたしは、弱いからです。強くなれば、あんな思いはもう、しなくてすむから」

「・・・・・・・・・・昔の俺と同じだな

「なら、戦姉妹アミカになればもっとお近づきになれるぞ？」

俺がそう話し出すと、あかりちゃんの顔が暗くなってしまった。あと、戦姉妹の意味を知りたいなら、wikiで調べなさい！

「そうしようと思いました、でも、友達はやめたほうがいいって言ってます」お前みたいなEランク武偵がやったって無駄だ。どうせ、なれないからやめとけよ」って

「・・・・・・・・・・・・・・・・おもしろくねえな」

「え？」

「おもしろくねえって言ったんだよ。最初^{ハナ}から諦めるなんざ、おもしろくもなるともねえ!!」

俺は、気づけばあかりちゃんに怒鳴っていた。

「友達が言ったから諦めるだろ？他人がどうこう言おうが、手前は手前の思うとおりに動けば良いじゃねえか！」
おいおい、あかりちゃんが怯えてるよ

「そんな覚悟なら、戦姉妹^{アミカ}なんかになろうと思ってんじゃねえ!!」

「その通りよ！」

「「!!?」」

どこからか、朝聞いたアニメ声が聞こえた。俺は、その方向へ向いた。そこには、訓練から終わったアリアの姿が見えた。

「人間には無限の可能性が秘めてるの。だから、やってみないと分からないことだってあるわ！間宮あかり!!」

「は、はい!!」

突然名前を呼ばれたあかりちゃんは変な声を上げた。はいいつて

「あたしと戦姉妹^{アミカ}を賭けて、勝負よ!!」

お！おもしろい展開になってきたじゃねえか！

「だってさ、あかりちゃん」

俺がそう言う本人は、顔を真っ赤にして、ボーツとしている。

「おい。あかりちゃん。せっかくのチャンスを逃しちゃうよ」
俺があかりちゃんの耳元でそう呟くと

「は!!?!?あたしは!!?!?」

意識が復活した。

「いい?ルールはこれよ」

そう言つてアリアが見せたものは、エンブレムだった。

「このエンブレムをあたしから30以内に奪えば、あんたの勝ちよ」
ふん。そんなことしなくちゃなんねえのか。俺には向いてねえな。

「じゃ、ここに相応しくない俺は、とつとと退散しますかねえ」
そう言いながら、歩き出した俺をアリアの「まって」で止まる。なんだ?

「あんた、結構良い奴なのね。朝は、誤解してたわ」
なにを言い出すかと思いきや

「俺はおもしろそうだったからあかりちゃんに言った。ただそれだけだ」

俺はそう言つと、また歩き出したが

「一真先輩!!」

あかりちゃんに呼び止められた。

「ん？」

「あたし！！がんばりますから！！誰がなんと言おうと、最後まであきらめずに！！がんばりますから！！」
そうかい。俺はそう眩き、強襲科アサルトから出て行った。

三本目 憧れの先輩（後書き）

次回！！奴隷宣告！！

四本目 奴隷宣告

俺は、チャリが大破してしまったので、バスに乗って、自分が住んでいる強襲科寮^{アサルト}に戻ったのだが

「……何この惨劇？」

リビングを見た俺は啞然とした、いつもはキレイなリビングが、瓦礫の山で埋まっているからだ。俺は、ため息をつきながら自分の荷物をトランクケースにまとめ、強襲科寮^{アサルト}から、探偵科寮^{インクスタ}に向かった。え？なぜ探偵科寮だつて？そんなの、キンジがいるからに決まっているじゃないか！俺は、再びバスに乗り、探偵科寮前^{インクスタ}で降りた。

「さてと、キンジの部屋はどこだったかな？」

俺は、荷物の入ったトランクケースを弾きながら、キンジの部屋を探していた。

「お！ここだな」

俺はキンジの部屋とその前で玄関のチャイムを鳴らす、とある人物を見つけた。

「あれ？アリアじゃん」

俺は、赤色のトランクケースを持った、緋色のツインテール娘、アリアを見つけた。

「あんたは……」

つて！名前くらい覚えといってくれよ！

「俺は、東城一真。一真でいい」

俺は、アリアに初めてかな？自己紹介をした。

「あたしは、神崎・H・アリア。今まで通り、アリアでいいわ」
神崎・H・アリアねえ。つか「H」って、なに？

「ところで、なにしてんだ？」

「キンジを呼出してんのよ」
ふん。でも、さっきからチャイム鳴らしまくってるけど、そろそろあいつキレンじゃねえか？俺がアリアにそう言ったとき

「誰だ！」

予想通り、怒り心頭してやがった。

「遅い！あたしがチャイムを鳴らしたら！5秒以内にでてくること！」

5秒って

「か、神崎に一真！！？」

「よ。キンジ」

俺がキンジに軽く挨拶すると、アリアは、キンジの許可なく勝手に部屋に上がっていった。おいおい、そりゃまずいだろ

「ちょー！！？まて神崎！！」

キンジのそんな声もむなく、アリアは、キンジの部屋に上がりこんでいく。

「はあ。で、一真は？」

ん？強襲科のバカ共のせいで、寮がめちゃくちゃ、だからここに泊まりに来た。あと、お前に拒否権はない。

「神崎みたいなこと言っなよ。別に断ったりはしないけどさあ」
おお！さすがマイフレンド！！心が広いねえ！

「二人とも！！早く来なさい！！」

と、キンジの部屋であるはずの奥から、女王様^{アリア}の声が響いた。

「で？なんのようだよアリア」

俺は、このときまだ知らなかった。これから起こる、おもしろく大変な出来事に

「キンジ！！一真！！あんたたち！！あたしの奴隷になりなさい！！」

・・・・・・・・・・・・・・は？俺は、思わぬ一言に目が点になった。むろん、キンジもな。早々と奴隷宣告をしたアリアは、ソファに腰を落とした。

「コーヒー！！エスプレッツ・ルンド・ドッピオ！！砂糖はカンナ！！一分以内！！」

まてまてまてまて！！なんですかその意味不明な単語を並べたコーヒーは！！？俺は、キンジに「とりあえず作ったほうがよさそうだ」と目で合図を出した。キンジは、それを承諾したのか、台所に向かい、インスタントコーヒーを入れ、アリに持ってくる。アリアは、それを珍しい物を見るかのような目で見ていた。おい、それは珍しくもなんともないただのコーヒーだぞ？アリアは、不思議そうに臭いを嗅いで、俺たちに尋ねてきた。

「これ、本当にコーヒー？」

そうだよ。コーヒー以外の何者でもないよ。アリアは、そうは言いながらも、コーヒーを口に運ぶ。

「変な味。ギリシャコーヒーに似てるけど、ちょっと違う」
「すんません。ギリシャコーヒーってなんすか？」

「今朝、助けてくれたことは感謝する。それに・・・お前を怒らせるようなことは悪いと思ってる。でも、なんでここに押し付けてくる？」

確かに。

「分からないの？」

「分かるかよ！」

おいおいキンジ。あんま、カリカリすんな。血圧上がるぞ？

「一真も分からない？」

俺に振ってきますか

「そうだなあ・・・・・・俺たちの实力を見て、興味を持った！とか？」

「分かってるじゃない！」

ええ！！？まじすか！！？冗談半分で言ったのに！！？俺はこの時、心底驚いた。

「おなかすいた」

おい！話が360度違う方向に行ってるぞ！！

「なんか食べ物ないの？」

アリアが、ソファに寝そべりながら、キンジに聞いてきた。

「ねーよ」

言うと思った。

「ないわけないでしょ？あんたいつもなに食べてんのよ？」

「砂糖と水」

「ふざけてんの？」

「すみません」

アリアに睨まれた俺は、素直に謝った。

「俺は、いつも下のコンビニで済ましてる」

おい、おい不健康だなあ。白雪に作って貰ってるくせに。

「コンビニ？ああ、あの小さなスーパーのことね」

小さなスーパーって、あながち間違ってるねえけどさあ。

「じゃあ、行きましょう」

「じゃあってなんだよ」

キンジが、アリアの発言に問う。

「バカね。もう夕飯の時間でしょ？食べ物買いに行くのよ」

確かに、もう六時半だな。俺は、キンジの部屋の時計を見て、そう思った。

コンビニでそれぞれ、目的のものを手に入れた俺たちは、テーブルを囲んで座っている。ちなみに、キンジはハンバーグ弁当、アリアはモモまんとか言う謎のまんじゅう、そして俺は、安くて満腹感が得られる素晴らしい食品、カロリーメイトを二つほど買った。

「で？ 奴隷になれて、どういう意味なんだ？」
今分かってることは、アリアが俺とキンジに興味を持っていることくらいだ。ま、そのことが分かってるんなら考えられることは恐らく・・・

「強襲科であたしのパーティに入りなさい。そこで一緒に武偵活動をするの」

「やっぱり。俺は別におもしろそうだから良いんだが、キンジは・・・」

「何言ってるんだ！俺は強襲科アサルトが嫌で、一番まともな探偵科インケスタに転科したんだぞ！それに、あんなトチ狂った連中の所に戻るなんて、無理だ！」

「おいキンジ。そのトチ狂った奴の中に俺も入ってるのか？」

「あたしには嫌いな言葉が三つあるわ」

「聞けよ人の話！」

「まあ、キンジが怒るのも無理ないな。なんせ、いきなり自分のことを話し出すんだからな。」

「無理、疲れた、めんどくさい。この言葉は、人間の可能性を押し止めるよくない言葉。二度とあたしの前では、使わないこと。いいわね！」

「まあ、俺も好きじゃないからいいけど。アリアは、人差し指を舐めながら」

「キンジと一真はそうね・・・あたしと同じフロントが良いわ！」

「もうキンジと俺はあんたの奴隷決定的な言い方だな」

「よくない！そもそも何で俺なんだ！一真じゃだめなのか！？」
「おい、友を売るのがお前は？」

「太陽はなんで昇る？月はなぜ輝く？」

なぜかって？そりゃ地球が太陽の周りを回ってるからだろ。月が輝くのは、太陽の光によってだろ。確か。

「キンジは質問ばつかの子どもみたい。仮にも武偵なら、情報を集めて推理しなさいよね」

キンジには無理だろ。いや、裏キンジならできるか。

「ともかく、人間二人を必要するって事は、よほどの事情があんだろ？」

「それを推理してみなさい」

推理ねえ。あてずっぽうだけど、いいか？

「人助けとか？」

これこそないだろ。ドラマじゃあるまいし。

「あんた、さつきもそうだけど、良く分かったわね」
え？マジで？

「とにかくだ！」

お！キンジが強気に出たな！

「帰ってくれ！一真はしょうがないが、お前は帰ってくれ！」

「そのうちね」

そのうちって、いつごろ？

「そのうちっていつだよ！」

あ、キンジと被った。

「あんた達があたしのパーティに入ってくれるまでよ」
ワガママな姫さんだな。でも、おもしれえ！

「絶対入らねえ！」

キンジも強情だな。入ればおもしろいモン見られるのに。

「あたしには時間が無いの！うんと言わないなら！」
お！こりやまたおもしろそうな予感！

「うんと言わないなら、なんだよ？」

キンジのその言葉にアリアは、顔に笑みを浮かべ

「泊まってく」

そう言った。プッ！キンジの奴、顔が引きつってんぞ

「はあ！？何考えてんだ！帰れ！」

そりゃ怒るはな。

「うるさい！長期戦も想定済みよ！」

なるほど。そのためのトランクケースか。

「でてけ！」

この声は、アリアが言ったのか？キンジに？

「な、なんで俺が出て行かなくちゃいけねんだよ！？」
知るか。

「うるさい！分からず屋にはお仕置きよ！頭冷やしてくるまで、帰
ってくんな！」

アリアはそう言いながら、キンジを玄関から追い出した。さて、次

は俺の番かな？

「ほら！一真もさっさと出て行く！」
やっぱり。

「はいはい」

俺はそう呟き、玄関から外へ出て行った。

五本目 下手な行動は命取り

寮から出た俺は、暇つぶしにコンビニに行ってみた。なんと、寄寓にもキンジがいるではないか。俺は、漫画雑誌を読んでいるキンジの隣に、ジャンプを取って、行った。今週号、まだ見てなかったな。

「ありえんだろ。あいつ」

キンジが、アリアのことを言い出した。同感です。

「確かに」

俺は、お気に入りの漫画を読みながら、キンジに答える。おお！！
そこであいつが裏切るのか！！

「一真はどうするんだ？」

「どうするってなにを？」

ああ、いいところで終わっちまったな。

「なにをって、あいつと組むのかって話だよ」

「ああ、それ？おろしろそうだし、俺は組むぜ」

さてと、次の奴は、ええ！？こいつ死ぬのかよ！？

「ならお前だけで組んでくれ。俺を巻き込むな」

「んなこと言っただって、巻き込んだの俺じゃねえし。それに、お前も欲しがってたぞ？アリア」

良い奴だったのになあゝこいつ。

「今日はなんて日だよ。チャリジャックには遭うし、意味分かんねえ奴まで来るし、厄日だ」

「そうか？おれにとっちゃ、こんなおもしれえ日が毎日続いてもいいんだけどなあ」

次は、おお！新キャラ登場！！

「あいつのこと、なんか知らねえのか？強襲科アサルトだろ？」

「さあ？俺今日始めて知ったし」

こいつドSだなあ。やっぱ新キャラってのはドSキャラが多いのか？

「というか、前から思ってたんだが、お前のその力。なんなんだよ？」

「うーん？アリアも言ってたろ？武偵なら推理してみろって」
ああー、今週号もおもしろかった。やっぱ最高だな、ジャンプ。

「さてと、そろそろあの姫さんも機嫌が直ってる頃だろ」
俺は、ジャンプを棚に戻し、キンジに言った。

「そうだな」

キンジも漫画雑誌を棚にも返し、そう言った。

ギイイ

俺とキンジは、泥棒でもするかのように、ゆっくり玄関の扉を開けた。中に入ると、廊下が真っ暗だった。電気が消えてる。つてことは、帰ったのか？

「帰ったのか？」

あ、またキンジと被った。

「さあ？」

俺とキンジは、そんなやり取りをしながら玄関から上がり、とりあえず廊下の電気をつけて、リビングに向かった。だが、そこにアリアの姿は無かった。

「あれ？本当に帰ったのか？」
俺が、そう言ったそのとき

チャポン

と、水の滴る音が聞こえた。

「え！？」

俺とキンジは、二人そろって、声を上げた。そして、風呂場を見に行ってみると、やはりあった。今朝見た、ピンクパンツとハート柄の「バキューン」が。

「おいおい、マジでか？」

俺は、キンジにそう小声で言ったそのとき

ピン、ポーン

と、玄関のチャイムが鳴った。ついこの押し方、もしかして・・・俺は、サツとキンジの方を向いて見た。キンジの顔が、見る見るうちに青くなっていた。確定だなこりゃ

（（白雪だ！！））

俺は、この時、キンジと意識がシンクロしたような気がした。

「ど、どうするよ。一真」

どうするって、とりあえず出なきゃ不審に思われるぜ。俺はキンジにそう言い、玄関の扉を開けた。

「あ、キンちゃん。と、かず君」

やはりいた。巫女装束に身を包み込んだ、キンジ溺愛者。星伽白雪。あと、俺の時にテンション下げんのやめて。マジ悲しいから。ちなみに、キンちゃんとかず君とは、俺とキンジのあだ名だ。

「な、なんだよその格好」

キンジが、巫女装束姿の白雪に尋ねる。大方、晩飯持ってくる時間が無いから着替えずその格好で来たんだろう。

「あ、これ・・・私、授業で遅くなっちゃって・・・お夕飯。キンちゃんに届けたくて、着替えずに来たんだけど、いやなら着替えてくるよ?」

いや、そんなめんどくさいことをしようとなぜ思う?白雪。

「ねえキンちゃん。朝来た、自転車爆破事件の周知メールって。あれ、もしかしてキンちゃん?」

あれ?可笑しいな?俺の名前が出てきてないんだけど?とりあえずキンジ。お前、あとで殺す。

「あ、ああ。俺だ」

おいおい、白雪が驚いて飛び跳ねたぞ。それとキンジ。ついでに「俺達」って言ってもよかつたんじゃないか?

「だ、大丈夫!?キンちゃん!?怪我とか無かった!?!」

おーおー、モテモテ野郎はうらやましいね。

「俺は大丈夫だから触んな」

今の言葉でキンジ。全国の白雪ファンを敵に回したぞ。

「は、い!でも、本当によかつたあゝ無事で。それにしても許せない!キンちゃんにこんなことするなんて!絶対私犯人見つけ出して、切り刻んでコンクリ・・・じゃない。逮捕するよ!」

あれえ!?!なんかやばい言葉聞いた気がするんだけどお!?!?

「し、白雪！こんあこと、武偵じゃ日常茶飯事の出来事だろ！？」
キンジが、慌てて言う。そう、武偵は毎日こんなことが起きてもおかしくないのだ。そして、いつ死ぬのかも・・・

「は、はい。そ、そうです」

キンジの前じゃ滅茶苦茶普通なのになあ。

「と、とくらで！何しに来たんだ！？白雪！」

とにく、用事をすましてもらって早く帰ってもらわねえと！！

「タケノコご飯作ったの。今、瞬だし、それに明日から私、SSRの合宿でいないから、キンちゃんのご飯。創って上げられないからこの幸せ物め！」

「あ、ありがとう。さあ、用事も済んだし帰ろうな」

「キンちゃん、なんか変だよ？」

やべえ！！ごまかせえ！！キンジ！！

「な、何が？」

おいイイイイイイ！！！！！！！！ボロを出すな！！消されるぞオオオ！！！！

「なんか、顔色悪いよ？」

まずい！！

「し、白雪！！キンジはなあ！！お前が無事に帰れるか心配なんだよ！！なあ！キンジ！！」

「あ、ああ！だから暗くならないうちにさっさと帰ってくれ」

キンジが、俺を睨みながら合わせてくれた。スマン！また今度、なんかおごってやるから！

「あ、ありがとう！キンちゃん！じゃあね！」

白雪はそう言つと、玄関から、出て行つた。た、助かったあ！

「一真！！何言つてんだよ！！」

「悪かつたつて、今度なんかおごるから勘弁してくれ」
俺は、両手を合わせながら、キンジの前に出す。

「さて、次はあいつだな」
ん？アリアになんかすんのか？

「あいつの武器を取り上げるんだよ。お前も手伝え」
「・・・・・・・・・・なんか嫌な予感がプンプンすんだけど・・・・・・・・俺はそう思いながら、風呂場にある、アリアの武器をキンジと共に取りに行った。そして、アリアの脱衣かごに手を突っ込んだ瞬間、風呂場のドアが開いた。ゑ？

「へ、変態！！」

アリアは、小さい胸を両手で隠しながら、俺達にそう行つてきた。
キンジ！！まずい！！どうすんだ！！？

「ち、ちがう！おれはただ！こいつを！！」

そう言つてキンジは、脱衣かごにつつこんだ自分の手ををあげるが、それが最悪なことに、キンジの手にしている、小太刀に、アリアのパンツとブラが引つかかつて、どう見ても取りに来ました的なことを表している状態だった。それを見てアリアは、顔をトマトのように真っ赤にさせた。

六本目 ヤンデレ娘佐々木さん

「バカキンジ！！起きろー！！」
ドンン！！

は！！？な、なんだ！！？俺、東城一真は、アリアの叫び声によつて起こされた。俺は、キンジの使っていない上のベッドで寝ていたんだが、キンジのところでドンン！！なんて音が聞こえたから、つい眼が覚めてしまった。俺は、上から下り、キンジの所へ行くと、アリアとキンジが、取っ組み合いをしていた。何してんだ？

「おい何やってんだよ二人とも？」
俺が、そんな二人にどうしてこうなったのか、理由を尋ねた。

「キンジが朝ご飯作ってくれないのよ！！」

「というか！！何で俺がお前に作るみたいになつてんだよ！！？」
なるほど。ようは、腹が減ったから飯を作れって言ってるんだな。よーし！！

「アリア。玉子焼きくらいなら俺作れるけど、それでいいか？」
俺は、キンジといがみ合っているアリアに尋ねた。

「玉子焼き？何それ？」

おい！玉子焼きくらい知つてて当然だぞ！！？一体どう言う家庭だよこいつの家は！！？おれは、説明が面倒だったからとりあえず、「うまいもんだ」と、教えておいた。

「なら！さっさと作りなさい！」

へいへい。俺は、そう言いながら、台所へ向かい、冷蔵庫から卵を取り出し、それを割って、フライパンで焼き、それを丸めると、あつという間に出来上がった。

「ほれ。これが玉子焼きだ」

俺は、テーブルで待っているアリアの目の前に、出来立ての玉子焼きを出した。アリアは、それを犬みたいに鼻で嗅ぎ、箸を使って、口へ運んだ。

「おいしいじゃない!!」

どうやら高評だったみたいだ。

「悪いな。一真」

ベッドから起き上がったキンジが、そんなことを言ってくる。フツ、言いつてことよ。俺とキンジは、玉子焼きに夢中になっているアリアを他所に、制服に着替えていた。するとキンジが

「アリア。時間をずらすぞ。お前が先に行け」

玉子焼きを食い終わったアリアに、そう言った。つーか食うの早っ!!

「なんでよ?」

なんでって

「ここは男子寮。アリアは女子。つまり、一緒の時間帯に出ると、面倒なことになる。そう言うことだ」

俺がアリアに、分かりやすく説明をするのだが

「旨いこと言って逃げるつもりね!」

どうやってだよ?一緒のクラスなのに。

「やだ！逃がすもんか！キンジと一真はあたしの奴隷だあ！！」
頬を風船のように膨らましたアリアは、俺とキンジの両腕にしがみついていた。結構重たいんですけど。余談だが、俺はこれにより、武偵高のバスに乗り遅れ、歩いていくことになってしまった。ありえねえよ。

午前の退屈な授業が終わり、午後の訓練（おれにとっちゃ休み）の時間が来た。やっと、勉強と言う名の呪縛から開放されたああ！！俺はそんなことを思いながら、強襲科^{アサルト}の廊下を歩いていると

「一真先輩！いい！！」

と、俺を呼ぶ声が聞こえた。しかも、先輩ってもしかして。俺は、呼ばれた方を振り向いてみた。そこには、茶色に髪の毛の両サイドを白いリボンで結んだ少女、あかりちゃんがいた。

「あかりちゃんじゃないか。どうだった？アリアとの戦姉妹勝負」
俺は、あかりちゃんにアリアとの戦姉妹勝負との結果を聞いた。あかりちゃんは、顔に笑みを浮かべ

「やりましたよあたし！！アリア先輩の戦姉妹になれました！！」
おお！そいつはあよかったじゃねえか！！

「はい！！一真先輩のおかげです！！ありがとうございます！！」
あかりちゃんは、そう言って、俺に頭を下げてきた。

「頭を上げろって。俺はただきつかけを作っただけだ、やったのはあかりちゃんだろ？まあ、ともかく！よくがんばったな！」
俺があかりちゃんとそんな話をしていると

「あかりちゃん。その人は？」

「あかりの彼氏？」

二人のあかりちゃんの友達っぽい人たちが現れた。一人は、金髪の毛のポニーテールで、一人は、黒髪の毛のロングヘアの「これまたあかりちゃんと同様「美」をつけても、罰は当たらないくらいの少女がいた。

「か、彼氏とそんなじゃないよぉ！！」
プツ。ちよつといじわるしようかな

「チイス。よろしくつす先輩」

金髪の少女、火野ライカは、俺にそう挨拶をしてきた。元気がとりの子かな（汗）

「それでこっちが、佐々木志乃ちゃん」

「佐々木志乃です。インケスタ探偵科です」

黒髪の少女、佐々木志乃は、俺に一礼してきた。やっぱり、視線がやばい。

「よろしくねお二方。アサルトじゃ、俺はそろそろ行くわ」
俺はそう言いながら、強襲科の廊下を歩いていた。

俺は、強襲科アサルトで訓練を終え、今は、校庭に来ているところだ。え？
なぜ校庭につて？それは、楽しいパーティー会場だからさ！

「さて、そろそろ出てきてはどうだい？佐々木さん」
俺は、校舎の物陰に隠れていた人物、佐々木志乃に声をかけた。

「気づいてたんですか？」
物陰から出ながら、佐々木さんは俺に尋ねる。

「まあねそれで？俺に何の用？」

「先輩。少しお時間よろしいでしょうか？」
少しどころか、たっぷり時間はあるけど？

「ありがとうございます」

佐々木さんのその言葉と共に、メイドさんが、どこから沸いて出てきた。そして、そのメイドさんの手には、一本の長刀があった。佐々木さんは、そのメイドさんから長刀を受け取り、鞘から抜き出した。てっ！！？あの刀！！？まさか！！？

「直ぐに終わらせますから」

鞘からキラリと光る刀身が姿を現し、佐々木さんは、その刀を振り上げ、俺目掛けて振り下ろしてきた。

ヒュッ！！

俺は、間一髪で、その刀から避け、後ろにバックステップを取った。

「おい、おい、その刀「物干し竿」じゃねえか！？」

俺は、佐々木さんに手にしている長刀を尋ねる。

「良く知っていますね。そう、これはあの佐々木小次郎の使っていた名刀「物干し竿」そしてわたしは、佐々木小次郎の子孫。佐々木志乃です」

おい、おい、マジかよ。あの佐々木小次郎の子孫だつてえ。

「俺が斬られる理由を聞いて言いかない？」

俺、なんかしたかなあ？

「あなたは、あかりちゃんと仲良くしすぎた」

は？っ—ことはあれか？俺とあかりちゃんが仲良くして、それに嫉妬して俺を消しに来たああああ！！？！？！ただあかりちゃんに溺愛でてんのオオオオオ！！？

「ま、まてまてまてまて！！！！ちよつと待ってエエエエエエエエ！

「！！！！いったん落ち着こう！！落ち着こう佐々木さん！！そんな物騒なモン振り回さずに、話し合いで解決しよう！！ね！！」
俺の必死の説得が通じたのか、佐々木さんは、物干し竿を、鞘に収めた。ふゝ。

「じゃ、じゃあ！佐々木さんは、俺にどうして欲しいわけ？」

「あかりちゃんの前から即刻立ち去ってください」
うつ！そつくるか・・・なら！

「それは無理だよ」

「なぜですか？」

「だって、俺とあかりちゃんは、友達だから」

「友達なら私がいます！あかりちゃんは誰にも渡しません！」
渡しませんで、あなたは親ですか！！？

「恐いんです」

は？佐々木さんは、急に涙を流しながら、言ってきた。

「あかりちゃんが、あなたに取られて、私とはもう友達じゃなくなってしまうんじゃないかと思うと、恐いんです」

はあゝ、まったく。最近の娘は、なにを思ってるんだか。

「あのなあ。そんなんで友達裏切るような奴は友達なんかじゃねえつて」

俺は、後頭部をポリポリかきながら、佐々木さんに言う。

「え？」

佐々木さんは、キョトンとした顔をしている。

「いいか？友達って言うのはな。友達が笑っていたら一緒に笑って泣いていたら一緒に泣いて、困っていたら助けてあげる。そう言うのを友達って言うんだよ。そりゃ、中には一人の友達だけしか心が開けない奴もいるよ？でもな、大半の奴は、沢山の友達を持って、一緒に楽しい時は笑って、悲しい時は泣いて、困っている時は助け合っていく。それが、本当の友達ってモンだ。あかりちゃんは、俺の大切な友達だ。だから」

俺はそう言って、佐々木さんに右手を差し出す。

「その大切な友達の友達とも、俺は友達になれると思うんだ」

佐々木さんは、俺の手を見て、少し考えた後、左手を差し出してくれた。俺と佐々木さんは、しっかりと握手を交わし、友達になった。

「そう言えば佐々木さん。あかりちゃんが、アリアと戦姉妹アマミカになったこと知ってる？」

「ええ知ってますよ？それがなにか？」

「いやね。確か戦姉妹制度に、アマミカ『三日内解除規則』って言うのがあったよね」

「ええ」

「その間に私闘で負けちゃうと、契約が解消になるじゃん。だからさ、佐々木さん。あかりちゃんのボディガードにでもなったら？」俺が佐々木さんにそう提案すると、佐々木さんは猛ダッシュで、あかりちゃんの寮へ向かっていった。

「・・・・・・・・あの娘が一番危険な気がするの俺だけか？」

七目 キンジ強襲科への一時復帰

俺、遠山キンジは今、昼間のクエストを終え、植物園で、理子と会う約束をしていた。断じてデートとかじゃないからな！

「キーくん！！」

植物園の入り口から、理子が手を大きく振りながら、俺の名前を呼んでくる。声がでかいぞ理子。

「相変わらずの改造制服だな。そのひらひらはなんだ？」

俺は、理子の着ている改造制服が気になって、理子に尋ねてみた。断じて着たいとかそういう願望は無いからな！

「これは武偵高制服の白ロリアレンジ風だよ。キー君いい加減、ロリータの種類くらい覚えようよ」

俺はそんなモンを覚えるつもりは全く無い。

「理子。いいか？ここのことは、アリアには内緒だからな」

そう、理子と待ち合わせをしていたのは、アリアの情報を得るためだ。

「ブラジャー！」

俺は、理子の敬礼の真似事を見ながら、手に持つてある紙袋を理子に渡した。その中身とは

「わあああああああ！！！！しろくろに、妹^{マイ}ゴスだあああああ
ああ！！！！」

そう、理子に渡したものは、エロゲーだ。理子には、これを渡すことを条件に、アリアと一真の情報を提供してもらうのだ。しかし、

飛び跳ねるほど凄いものなのか？

「あ……これは、理子いらな〜い」

理子はそう言くと、妹^{メイ}ゴスの2、3を俺に渡して来た。なんだよ？
気に入らなかったか？

「2、3とか個々の作品に対する侮辱」

知らねえよ！っーか！知りたくもねえ！

「まあ、とにかく。それやったんだから、アリアと一真の情報教える」

「は〜い。じゃあ、まずアリアからね。アリアは、強襲科^{アサルト}でSランク」

Sか。やっぱり

「徒手格闘も旨くてね〜。たしか……バ……バリ……
・バリッ」

「バリ・トワードな」

俺でも知ってるぞ。

「そうそれ！拳銃と刀はもう天才の領域。アリアって、両利きなんだよね〜」

あいつ、両利きだったのかよ。

「んでね！アリアには、二つ名があるの」
二つ名まで持ってるのか。

「双剣双銃で、^{カドラ}双剣双銃のアリア」

双剣双銃。^{カドラ}つまり、両利きで二丁拳銃に二刀流ってわけか。

「アリアの武偵での活動はどうなんだ？」

「それ聞いて驚かないでよ。アリアは、14歳のころからヨーロッパ各地で武偵として活躍。そして、犯人を一度も逃がしたことが無いんだって」

な！！？マジかよ！！？

「他、体質とかは？」

「アリアって、お父さんがイギリス人で、ハーフなんだよ
ってことは、クウォーターか。」

「でね。アリアの一族が「H」って言って、とっても有名な一族らしいよ。おばあちゃんは、デイムの称号まで持ってるんだって」
てことはあいつ貴族かよ！！？どういう育て方したらあんな貴族が生まれるんだよ！！

「で？他は、キンジ」

「いや、もうない。ありがとな、理子」

俺は理子にそう言い、植物園から出て行った。

寮に戻ると、アリアはソファに寝転び、一真は、携帯ゲーム機をしていた。

「さすが貴族様は身だしなみにもお気を使ってるっしやる」
俺は、手鏡で髪をいじくっているアリアに向けて、挑発的な発言をした。

「あたしのことを調べたのね!」
おい。なんでうれしそうなんだよ?

「おいキンジ。貴族って誰が?」
ああ、そうか。一真はアリアのこと知らないんだっけ。

「そこで寝そべってるアリアだよ」

「はああああ!!?!?お前!!?!?冗談も良いところだぞ!!?!?」
そんなに驚くな。俺だって最初は驚いたけど。

「冗談ってどういう意味よ!!一真!!」
やべっ!!アリアが反応してきた。

「そ、そんなに怒ると血圧上がるぞ。一度も犯人を逃がしたことが無いだつてな。双剣^{カトラ}双銃のアリアさん」
俺は、そう言いながら、台所の水道水をコップに注いだ。

「でも、この間一人逃がしたわ」
へえー。天才でも失敗はあるんだな。俺はコップに注いだ水を、口に運んでいく。

「誰を逃がしたんだ?アリア」
お!それは気になる。

「キンジよ」
ブブー!!俺は、口の中に入れた水を盛大に噴出した。

「な、なんで俺が犯罪者にカウントされてるんだよ!?!」

「うるさい!あたしにあんなことしておいてしらばつくれるつもり!!」

あんなことつて、だからあれは不可抗力だつて言っただろ!!

「ま、あんなことしたんじゃ犯罪者呼ばわりされてもしゃーねえーよキンジ」

おい一真!!助けるよ!!

「あんたならあたしの奴隷になれるかもしれないの!だから!強襲^{アサルト}科に戻って、あたしから逃げた実力をもう一回見せてよ!」

「あのときは、たまたまうまくいっただけだ。それに、俺はただのEランク武偵だ」

「いや、キンジは入学試験のとき、Sランクをたたき出したぜ」

「真！！余計なこと言っな！！」

「つまり、あれは偶然じゃなかったってことよね！」

クソ！一真めえ！！

「とにかく！今は無理だ！」

「今？てことは、なにか条件でもあるの？いいなさい！協力してあげるから！！」

協力って、お前!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

「キンジ。諦めろ。そして一緒におもしろえことしようぜ」

一真。お前は、いつもそんな理由で動いて、本当にいいのか？仕方ない。この手を使うか。

「一回だけだ」

┌
┌
?
┌
┌

アリアと一真の頭に、？マークが浮かんでいる。

「戻ってやるよ強襲科に。自由履修として。ただし、組んでやるのは一回きりだ。俺が強襲科に戻って、最初に起きた事件と一緒に解決してやる。これが条件だ」

これでアリアを失望させれば、もう俺に付きまとうこともなくなる
だろ。

「いいわ。この部屋から出て行ってあげる」
妥協したのか？

「あたしには時間が無いし、その一件であんたを見極めるわ。そのときは一真。あんたも来なさい。あんたは確か、Eランクだけど実力がSランク並みって聞いたわ」
一真はどうせこいつについていくんだろうな

「いいぜ。おもしれえモンに俺が行かねえわけねえだろ」
やっぱりな。

「どんな小さな事件でも一回だけだぞ」

「いいわ。その代わり、どんな大きな事件でもよ」
ああ

「手抜きなんてしたら！二人とも風穴よ！！」
手抜きなんてしねえよ。通常モードの俺の力だな。

七本目 キンジ強襲科への一時復帰（後書き）

次回！強襲科に戻ったキンジを待ち受けるのは！！？

八本目 ヒーローとは何か

俺は今、強襲科^{アサルト}で、キンジがここに来るのをまつているところだ。強襲科^{アサルト}は、生存確率97・1%。つまり、100人中3人は毎年死んでいるわけだ。冗談ではなく、本当に。そのことから強襲科^{アサルト}は、別名「明日無き学科」と言われている。ま、「武偵たちの墓場」の方が、分かりやすいかな？ん？なんだ？強襲科^{アサルト}の連中が入り口に集まってやがる。もしかして。俺は、連中が集まっている入り口に向かった。そこには、連中から質問攻めにされるキンジの姿があった。ようやく来たか。

「キンジ！俺はお前が戻ってくるって信じてたぜ！さあ！さっさと死んでくれ！」

「戻ってきたわけじゃない。自由履修だ。お前こそ、さっさと死ぬ。三上」

「キンジイ！やっと戻ってきたんだな！安心しろ！お前みたいな間抜けは直ぐに死ぬるぞ！」

「じゃあなんでお前が生きてんだ？桐谷」

「キンジ！俺は嬉しいぜ！やっとお前が死にに来たんだからな！」

「死にに来た覚えは無い。それより、お前が死ぬ。笹山」
死ぬ死ぬ死ぬ死ぬるせえな。なんかの中毒者がこの連中は。そう、ここ、強襲科^{アサルト}では、「死ぬ」が挨拶代わりといった、完璧に狂ったところだ。まあ、そんなところに俺もいるんだがな。さて、俺もキンジに話し掛けよ。

「よおキンジ。どうだ？久々の強襲科アサルトの空気は？」

「最悪だ。やつぱり戻ってくるんじゃないかった」

言うと思ったよ。俺がキンジと話をしていたそのとき

「キンジ。一真」

アニメ声が聞こえた。俺とキンジは、その方向を向いた。そこには、緋色のツインテールに、小学生並みの身長アサルトの、アリアがいた。そして、なぜかアリアの姿を見ると強襲科アサルトの連中は、キンジから離れ、強襲科の中に入っていた。なんでだ？俺とキンジは、そんなアリアの元へ、歩いていった。

「あんた、人気者なんだね。ちょっとびつくりしたわ」

そりゃそうだろ。キンジは、入学試験で教官を3人以上倒したんだ。アサルト強襲科では英雄ヒーローみたいなもんだからな。ま、俺は別にどうでもいいんだが。

「あんたってちょっと……ネクラって感じだし。人付き合いとか苦手そうだと思ってたけど。あの様子じゃ、そうじゃないみたいね」

勝手なイメージを入れられてたな。キンジ。

「あのさ、キンジ」

「なんだよ？」

「ありがとうね」

「なんだよいまさら。勘違いするなよ。俺は仕方なく戻ってきただ

けだ。クエストが終わったら、探偵科インクスタに戻る」

そんなつれねえこと言っなよキンジ。もっかい戻って俺と一緒におもしれえことしようぜ！

「断る」

ちえ

「分かってるよ。でも、強襲科アサルトのときのキンジ。かつこよかったよ」
アリアのその一言で、キンジは顔を赤くさせる。プッ！やっぱアリアについて行って正解だな。

「あたしは強襲科アサルトでは誰も近寄ってくれないの。ま、実力があらずぎていずらいのよ」

何だ？もつとチャホヤされてんのかと思ったけど、そうじゃないのか。

「なるほど。名前通り、「独奏曲」アリアってわけか」
ん？なんだそれ？

「よく分かったわね。そうよ。アリアってのはオペラで歌う一人きりのパート。だからあたしは、名前通り、「独奏曲」アリア。いつも一人よ」

「……………昔の俺と似ているな。」

「それで？俺と一真を捕まえて、トリオにでもなるうってか？」
キンジがそんなことを言ったとき。アリアは口を手で押さえて笑い出した。

「あんたもなかなかおもしろいこと言うじゃない」
どこに笑うところがあったんだ？

「今のあんたは、昨日とは違って魅力的よ」

「そんなことは・・・ない」

なんか良いムードじゃねえか。ええ？

「アリア。お前は先に帰れ。俺と一真はゲーセンに寄っていく」
そう言えばそんな約束したな。

「ゲーセン？何それ？」

おいおいコイツマジか？ゲーセンなんて、小学生でも知ってるぞ？

「ゲームセンターの略だ。分かったらついてくんな」

キンジはそう言いながら、歩き出す。それをアリアが小走りで追いかけていった。さてと、俺も行こうかな。

「今日は特別にあたしも付いて行つてあげる。ご褒美よ」

いや、罰ゲームの間違いじゃね？

「罰ゲームの間違いだろ」

あ、キンジと被った。キンジはそう言いながら、足の速度を上げていく。アリアはそれに小走りで付いていく。それに気づいたキンジは、さらに歩く速度を上げる。アリアはそれに付いて行くとで、最終的に二人は、全速力で走っていった。そんな二人を見ながら俺は、「小学生の喧嘩かよ！！？」と、つつこみ、二人を走って追いかけた。

二人を追いかけて数分後。俺は目的地のゲーセンへたどり着いた。その前では、キンジとアリアが二人、息を切らし体を前に曲げているところだった。アホかこいつら。俺はそんなことを思いながら、アリアとキンジと共に、ゲーセンの中へ入った。俺は真っ先にあるゲームに向かった。それは、リズムに乗って太鼓を叩くゲームだ。このゲーム、素晴らしいことに、フルコンボを達成すると、千円分のゲーセンで使える券を貰えるのだ。俺は100円玉を入れ、ゲームスタートだ。フッ！ハッ！実は俺、このゲームの常連客で、フルコンボを何回も達成してるのだ！だからこんなものは！よっと！簡単にフルコンボ達成が出来るのだ！俺はそれを店員に教え、千円分の券を貰い、キンジたちを探しに行こうとすると

「今度こそ！」

アリアのアニメ声が聞こえたので、その声の方へ行ってみた。ビンゴ。アリアとキンジ見つけ。

「よ。キンジ。アリア何してんだ？」

俺は、近くでアリアを見ているキンジに尋ねた。

「クレーンゲームで失敗しまくってたんだよ」

なるほど。だからさっきあんな声が聞こえたのか。あ、アリアの奴。また失敗した。

「い、今のは！練習よ！」

アリアが俺たちに向かってそう言ってくる。

「長い練習だな」

キンジがアリアに挑発気味に言う。

「今度こそ！！」

その台詞、何回言ったんだ？あ、また落ちた。アリアはそれを見るなり、クレーンゲームに顔を貼り付けていた。それを見たキンジが、アリアを押しつけコイン投入口にコインを入れ、ゲームを始めた。お！三つも取れてるじゃねえか。キンジこついうの得意そうだな。な。

「見て！三つも取れてる！」

あ、アリアと被った。アリアは、それを見ながら、子どものようにはしゃいでいる。へえー。あいつもこんなに笑うことがあったんだな。

「キンジ！落としたら許さないわよ！」

いやもう、キンジにどうこう出来ないだろ。

「もう俺にどうこう出来るかよ」
あ、キンジと被った。

「あ！あ！入る！入る！」

分かったから落ち着けよアリア。キンジの操縦していたクレーンが商品入手口で開いた。キンジの取った人形が、一匹二匹、三匹と落ちてきた。

「やった！」

「よし！」

キンジとアリアは、気づくとハイタッチをかましていた。フーン。キンジもキンジで楽しんでたんじゃないか。キンジとアリアはそれに気づき、ぱつと手を離れた。おいおい、もう少しそのままでもよかったんじゃないか？アリアは、落ちた人形を驚づかみにして、取った。

「カーワイー！！」

アリアは、その人形に頬をすりよせながら、男ならドストライクの笑顔を浮かべていた。・・・・・・は！！いかん！いかん！俺も惚けていた。というかその人形、いつか破裂するんじゃないか？

「キンジ！一真！」

ん？なんだよ？

「3人で分けましょう。はい！」

アリアはそう言って、俺とキンジに人形を渡してきた。裏のタグには、「レオポン」と書かれていた。なんだそれ？俺はそんなことを思いながら、その人形をポケットに入れた。その後俺達は、ゲーセ

ンを遊びつくし、アリアと分かれた。

キンジの部屋に帰った俺とキンジは、テレビを見ながらソファに転がっていた。

「キンジ」

「なんだ？一真」

「お前。本当にアリアとは組まないのかよ？」

俺は、あのゲーセンの時に浮かべていたアリアの笑顔を思い浮かべながら、キンジに言った。

「一回だけって言っただろ？それに、俺はもう、武偵を辞めるんだ」
そうか。キンジがここまで武偵を辞めたがり、アリアから避けているのには、理由がある。遠山金一。キンジの兄さんだ。キンジが1年の頃、金一さんの乗った船が偶然、シージャックに遭った。金一さんは、乗組員全員を助けた結果、金一さんただ一人だけ逃げ遅れ死亡した。しかし、その会社は船に乗っけていながら未然に防げなかった金一さんを、無能な武偵と非難したのだ。そして、それはマスコミに同調させられ、金一さんの弟であるキンジにも矛先が向けられた。自分を犠牲にみんなを助けた英雄^{ヒーロー}は、そんな腐った人間のせいで、悪者扱いされた。そして、その身内であつたキンジには、数々の言葉の暴力が降り注いだ。キンジはそれから、誰かのために必死になり死んだ者に対し、こんな扱いを受けることになる武偵を辞めると思い始めた。

「……………お前にも事情があるのは十分分かってる。けど、あんなに必死になってまで、お前を必要としてるんだ。あの子は」

「なんだ？そんな俺を攻めるって言うのか？」
キンジは、声のトーンを落として聞いてきた。

「そうは言っていない。ただ、アリアの目的が果たすまでなら、協力してもいいはずだ」

俺がその言葉を言ったとたん、キンジはソファから立ち上がった

「いい加減にしろ！！知ったような口利きやがって！！お前に俺の気持ちがかんのかよ！！」

「だから！！お前のことも十分分かっていと言ったろ！！お前が武偵を辞めたい気持ちも分かって！！！！けど！！目の前で助けを求めている人を！！見捨てるって言うのか！！？」

俺もソファから立ち上がり、キンジに向かって叫んだ。

「お前に俺の何が分かるって言うんだよ！！」

「それはっ！！」

言葉が続かなかった。俺は何一つとしてキンジのことを分かっていない。分かってやりたい。分かりたい。けど、分からない。沈黙が辺りを支配した。俺はゆっくりと口を動かした。

「ああそうさ。俺にはお前のことは何一つとして分かっていない。でも、だからって、目の前で助けを求めている人を見捨てるほど、お前もバカじゃないはずだ。思い出せ。お前は、金一さんを目標に今まで武偵をしてきたんだろ。そして、お前の中には、金一さんの信念と同じものがあるはずだ。「弱い人を救ってやりたい」って信念が」

「兄さんと俺は・・・・・・・・・・違っんだ・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・

「とにかく！俺は武偵をやめる！」

キンジはそういうと、リビングから出て行ってしまった。

「・・・・・・・・・・キンジ」

俺は一言そう呟くと、全身の力が抜け、ソファに倒れこむように寝転んだ。そして、そのまま深い眠りに付いた。

八本目 ヒーローとは何か（後書き）

次回！！バスジャック！！

九本目 奴隸たちの失敗

「う．．．ん？」

俺はカーテンの間から刺し当たる太陽の光によって目覚めた。ソファから体を起こし、部屋にある時計を目をこすりながら見る。時計の針が示す時刻は、午前7時だ。俺は目をこすりながら洗面所へ向かい、顔を洗った。洗面所からリビングに戻ると、昨日口喧嘩をした相手、キンジがソファに座っていた。

「．．．．．キンジ」

俺は、少し間を空けて、キンジを呼んだ。

「なんだよ？」

「昨日は．．．．．ごめん。つい、言い過ぎた」

俺は昨日キンジと、アリアのパートナーのことで口喧嘩をし、キンジの気を、悪くしてしまったと思い、今こうして謝っている。

「いや、俺の方こそ．．．．．すこし言い過ぎた。ごめん」

今度は、キンジの方から謝ってきた。

「キンジ。アリアに組めとはもう言わない。けど、一回の事件は、ちゃんと一緒に解決してやってくれ。それでもアリアが言うようだったら、俺が説得する。だから「お前に言われなくても。一回だけはちゃんと事件を解決する。それに、これは俺が言い出したことだしな」ああ、そうだな」

俺は、キンジに怒られることを覚悟で言ったが、キンジも、ちゃんと約束は守る奴だったな。俺はそんなことを思いながら、台所に向かい、朝飯を作ることにした。

「キンジ。バス、間に合うのか？」

俺とキンジは今、武偵高行きのバス停まで歩いていて、朝のバスは早く行かなければ、込んでしまうのだ。

「大丈夫だ。アリアのいない分、いつもより余裕がある」

キンジはそうは言うが、なんか嫌な予感がすんだよなあ。朝から。俺はそんなことを思いながら、バス停付近を歩いていた。すると

プー！

と、バスの出発する合図が聞こえた。な！！？どう言う事だよ！！？

「キンジ！余裕じゃなかったのか！？」

俺は、余裕があると言った張本人、キンジに聞いた。だした。

「知らねえよ！安物のコイツがあつてなかったんだろ！」

キンジはそう言いながら、自分の腕時計を見せる。

「とにかく！次のバス停までダッシュすれば間に合うかもしれないねえ！」

俺とキンジはそう言い、次のバス停まで全速力で、走った。だが、所詮人の足。バスに追いつけるはずも無いが、俺とキンジはそれを覚悟で走った。そうやって走っていると、バス停には、武藤がおり、武藤がバスに乗ったところに俺たちは追いついた。

「む、武藤！！はあ、はあ、た、たのむ！乗せてくれ！」

武藤は嫌いだ、この際しょうがねえ！

「そうはしてやりたいが！満員だ！お前らチャリで来いよ！」

無茶言うんじゃないぞ！ツツツ頭！俺たちのチャリは大破して乗れないんだよ！

「ダメなモンはダメだ！あきらめて遅刻の道を選びな！」

「てめえ！武藤！俺を裏切りやがって！」

キンジがバスの戸が閉まる寸前でバスに乗車した憎たらしい武藤に向かって叫ぶ。だから嫌いなんだよ。コイツは！俺とキンジの叫びもむなしく、バスは出て行ってしまった。武藤。てめえ、後で覚えてやがれ！

俺とキンジは仕方なく、一時間目をサボるつもりで、歩いて行くことにした。

「くそ、武藤の野郎。後で東京タワーから突き落としてやる！」

「お前はなに恐ろしいこと言ってるんだ」
「だってさあ！俺がキンジに愚痴っていたとき

ピリリリリリ

と、キンジの携帯が鳴り響いた。キンジはそれを取り出し、携帯に出た。

「もしもし」

『キンジ！今どこにいる！？』

「今は、強襲科アサルトのそばだ。一真もいるぞ」
俺もつてことは、アリアか。

『なら丁度良いわ！今すぐそこでC装備に武装して女子寮の屋上に来なさい！事件よ！』

「な！！？分かった！」

キンジが、驚愕の表情になっていく。どうしたんだ？キンジは、携帯を切つて、俺の方を向いてきた。

「一真！事件が起きたらしい！今から女子寮屋上に来いってアリアが！」

事件。ようやく来たか！アリアとキンジの共同クエストが！

「分かった！女子寮だな！」

俺はキンジにそう返事をし、キンジと共に、女子寮へ向かった。女子寮の屋上の扉を開けると、そこにいたのは、緋色のツインテール娘、アリアがいた。その近くには、黒い武偵高の扱うヘリがあった。

「遅いわよ！」

悪かったって。

「わりい」

あ、キンジと被った。

「まあ、いいわ。武偵高の通学バスが、ジャックされた。あんたちが乗るはずだったバスよ」

フハハハハハハ！！！！ざまあみる武藤！って場合じゃねえ！！バスジャックだと！！？

「詳しい話はヘリの中ですから。乗って」

アリアにそう言われ、俺とキンジはヘリに乗り込む。そこには、緑の髪に、ヘッドフォンをつけ、背中にドラグノフ狙撃銃を背負った物静かな少女、レキがいた。

「キンジ、一真。このバスジャックの犯人は「武偵殺し」。あんたちの自転車に爆弾をつけた奴と、同一犯よ」

なに？

「犯人は、バスにいるのか？」

いや、俺たちを襲った奴と同一犯ならおそらく・・・

「多分いないわ。武偵殺しは遠隔操作で爆弾をコントロールするのだから、おそらく今回も・・・」

遠隔操作をしてるから犯人はいない。と

「で？俺たちはどうすればいいんだ？アリア」

「バスの乗客全員の救出！以上！」

バカの俺には丁度良い目的だな！

「ちょ！？ちょっと待て！もうちょっと状況を詳しく・・・」

「武偵憲章第1！仲間を信じ！仲間を助けよ！乗客は武偵高の仲間よ！ちんたらしていたら！爆発するかもしれないわ！」

アリアが、キンジに怒鳴り散らす。うるせえな

「とにかく！全員助けりゃいいんだろ！アリア！」

俺はアリアにそう怒鳴る。

「ええ！そしてキンジ！これが最初で最後のあたしとの約束の事件よ！」

「大事件すぎるだろ！！？はあゝ。俺はとことん付いてねえな」
お前には、死神的なモンが憑いてんじゃねえか？

「見えました」

無言少女、レキが、そう呟く。どこだ？

「ホテル日光を右折しているバスです」

おい。全然見えんのだが？まさか・・・

「お前、視力は？」

「両方とも6・0です」

アリアもキンジも今のレキの言葉に啞然としている。お前はアフリカ出身なのか？

「と、とにかく。作戦を説明するわ。パラシュートでバスに降りる。あたしは、車外。キンジと一真は車内を調べて。それと、みんなの様子も」

あ、俺パラシュート要らねえから。

「何言ってるのよ一真！！」

そう言いなさんなって。俺には、これがある。俺はアリアにそう言う
と、懐から鎌鼬を取り出した。

「じゃな！」

俺はアリアにそう一言言い、ヘリから飛び降りた。

「な！！？待ちなさい！！一真！！」

アリアが何か叫んでるな？俺が飛び降りてから数秒後、目の前にバスとその横を走る、短機関銃を装備した、無人車が広がってきた。そろそろか

「いくぜ！鎌鼬！」

俺は、愛刀の名前を叫びながら、刀を構えた。

「旋風！」

俺はその言葉と共に、鎌鼬を振るった。すると、バスの上に、渦を巻いた風が現れ、俺はそれ目掛けて突っ込んだ。俺はその風の影響で、バス上空数センチ上に浮かび、風が止むと同時に、ゆっくりとバスに着地した。

「ふゝ。着陸成功」

俺はバスの上でそう呟き、無人車のほうへ向き、鎌鼬を二回振るった。鎌鼬から、風の刃が現れ、無人車を切り刻んだ。さてと、さつさと中に入らねえと。俺はバスの扉を刀で無理矢理こじ開け、車内に進入した。バスの中は武偵高の人間達であふれかえっていた。おいおい。こりゃ、多すぎだろ。おれがそんな事を思っていると

「一真！」

俺の今、一番聞きたくない奴の声が、運転席から聞こえた。

「武藤かよ。どうだ？今の気分は？」

「良い分けねえだろ！ああ、なんで俺はこんなバスに乗り合わせちゃったんだ」

知るか。どうせ人を見捨てた罰とかで天罰が下ったんだよ。

「で？どうやってジャックされたんだ？」

「一年生の子の携帯から、妙な機械音で減速すると爆発するってクソッタレ！同じじゃねえか！」

「それで？お前が運転してるってことは運転手は」

「ああ。さっき無人車から発砲されてな。それに被弾したんだ」
「ちィ！俺が軽く舌打ちをしたそのとき、俺が強引に開けたバスの扉から、キンジが入ってきた。」

「一真！」

「キンジ！ようやく来たか！やっぱりこれやったのは、俺たちにや
った奴と同一犯だ！遠隔操作でジャックされてる！」

「な！！？」

「アリアは！？」

「今、車外で爆弾探してるところだ！」

「なら！俺たちも車内を探すぞ！」

俺とキンジはそう言い、バスの車内を探し回った。座席、天井、運転席の下等と、隅々探したが、なかった。くそ！一体どこに！？

『キンジ！一真！』

胸の通信機から、アリアの声が聞こえた。

「なんだ！アリア！」

『車外下に爆弾があつたわ！この量、バスだけじゃなく戦車でも吹っ飛ばす量よー！』

な！！？そこまでするかよ武偵殺し！！

「解体できそうか！？」

『なんとかね！』

そうか。俺はそう言い、通信を切った。

「キン！・・・ジ？」

俺はキンジを呼ばうと振り返るが、キンジの姿がどこにも見当たらない。

「不知火。キンジどこ行つた！？」

俺は、近くにいたイケメンスマイルの所持者、不知火にキンジを聞いた。

「東城君。遠山君なら、このバスに仕掛けられてると思う、センサーを探しに車外に出て行つたよ」

な！！？通常状態なのか！！

「そのとき！キンジは頭に、メットしてたか！？」

「いいや。してなかったと思う」

あの野郎！！最低メットはしとけよ！！俺はそんなキンジに苛立ちを少し覚え、キンジを追い、バスの車外に出て行つた。

「キンジのヤロー。どこだ？」

俺はバスの上に上がり、辺りを見渡すと、後ろの方から、キンジと

アリアの声が聞こえ、キンジの姿が確認できた。よかった。俺が安堵の表情を浮かべた、そのとき。バスの後ろから、短機関銃を持った、無人車が来やがった。まずい！アノ無人車！今あの状態のキンジをロックオンしてるはずだ！！俺はキンジ目掛けて、全速力で走った。

バン！バン！

まずい！銃のほうが早い！俺は間に合わないと感じ、刀を振るおうとしたそのとき

「！！？」

キンジの前にアリアが立ちやがった！アリアは、そのまま二発、銃弾を被弾した。

「！！？アリアッ！！！」

鮮血がバスに飛び散りながらアリアは、ゆっくりと、スローモーションのように、倒れていく。クソツタレ！！俺は鎌鼬を構えながら、倒れたアリアを抱えたキンジの元まで走った。

「風斬！！」

俺は無人車に向けて、鎌鼬を縦に一回振るった。鎌鼬から、鋭利な刃物のような、風が現れ、無人車を真つ二つにした。

俺は、巻物に鎌鼬を収めながら、アリアの名を叫び続けるキンジの近くに寄り添った。

「アリア！アリア！！アリア！！！」

アリアの額からは、真つ赤な血が流れている。やばいぞ！早く病院に！！

タァン！タァン！

二発の銃声が、突然辺りに響いた。俺は、銃声の発音されたと思われる場所を見た。そこには、ヘリが橋を通っているバスに並列に並んでいた。ということはい！

「レキ！」

「私は一発の銃弾」

俺のインカムに、レキの音が響いた。

『銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない』

レキのその言葉に続き、バス下の爆弾が、橋から海に落ちていくのが見えた。海に落ちた爆弾は、巨大な爆音と共に、巨大な水しぶきを上げていた。さすがだな。レキ。そして、次第にバスはスピードを落としていった。俺は、キンジに抱えられているアリアを一目見、その場に拳を思いつきり下ろした。くそ、助けられなかった。

「チクシヨオオオオオオオオオオオオ!!!」

俺は、振り下ろした拳を思いっきり握り締めながら、叫んだ。

九本目 奴隸たちの失敗（後書き）

感謝ください！！ダメだしでも結構！！提案でも結構でございますから！！

十本目 額の傷に誓って（前書き）

今回は、一真が仁義を通します。

十本目 額の傷に誓って

バスジャックは無事終了した。アリアに怪我を負わせて。俺は今、アリアの搬送された病院で、アリアの病室を探していた。お見舞いの品に、アリアの好きなももまんを、奮発して、箱買いしたのだ。

「どこだ？アリアの病室？」

俺はそう言いながら、病院の一階を歩いていると、俺の近くの一室で、男女の言い争いが聞こえてきた。

「あたしはあんたに期待してたのに！！・・・あんたが・・・事件になれば、また！あの時みたいに実力を見せてくれるって思ってたのに！！」

この声・・・アリア！？俺は一步下がり、ドアの前を見た。そこには、「神埼・H・アリア」と書かれていた。俺は、そのドアを少し開け、除いた。そこには、アリアがベッドに座った状態で、キンジと言い争いをしていた。おいおい、なに言い争ってんだ。

「お前が勝手に期待したんだろ！！俺にはそんな力はない！！それに俺は！！・・・もう、武偵をやめる」

「勝手にもなるわよ！！あたしにはもう！！時間が無いのよ！！」
「どうもそれが引つかかる。『時間が無い』。一体・・・どうという意味なんだ？」

「何だよそれ！！？意味分かんねえーよ！！」

「前にも言ったように！！武偵なら調べてみれば！！？あたしの！！・・・あたしの事情に比べれば！！あんたが武偵をやめ

る滋養なんて！！大したこと無いんだから！！」

ちい！アリアめ！！禁句を言いやがった！！その言葉に切れたキンジは、アリアに拳を上げるが、女であることを瞬時に思い出し、上げた拳をゆっくりと下げていった。ふゝ。

「とにかく。．．．．．俺はもう、武偵をやめる」

「．．．．．」

「聞ってるのか」

「分かったわよ。．．．．．あたしの探してた人は．．．．．あんたなんかじゃ．．．．．なかつた」

アリアがそう言うと、キンジはこっちに向かってきた。やべっ！！俺はとっさにどこかへ隠れようとしたが、その前にドアがキンジによって、開いた。

「．．．．．」

「．．．．．」

俺と数秒間目を合わせるとキンジは、苦い顔をしながら、病院の廊下を歩いていった。．．．．．キンジ。俺は、キンジが出て行ったアリアの病室に、ゆっくりと入った。

「よ、よお。怪我はどうだ？」

俺は、アリアにそういいながら、近づく。

「軽症よ。ただ、一生額に傷跡は残ったけど」

そう言えばアリアの奴。自分のデコがお気に入りだったっけ

「で？何しに来たの？」

「お見舞いと、少し話をしに来た」

俺はそう言いながら、手に持った袋をアリアに見せ、アリアのベッドの近くになつた椅子に、座る。

「お前にその傷を負わせたのは、キンジをすっかり見てなかった俺の責任だ。本当に、すまん」

俺は、そう言いながら、頭を下げる。

「武偵憲章に従っただけよ。あんたの責任じゃないわ」
武偵憲章に従っただけ。か……………

「俺がお前に「人助け」って言ったの。覚えてるか？」

「覚えてるわよ。それがなに？」

「時間が無いつて意味は、その人を助けるための時間が無いつてこととでいいのか？」

「ええそうよ。そう思ってくれていいわ」
そうか。

「……………お前が焦る気持ちはよく分かるけど、自分の事情が大変で、キンジの事情が大したこと無いなんてない。あいつの抱えている事情だって、大きいんだ」

俺がその話をする、アリアは、俺を思いつきり睨んできた。

「それで？そんなあたしを責めに来たの？」

アリアは、涙目になりながら、聞いてきた。はあ。さっき言ったけど、お見舞いと話をしに来ただけだ。

「そうは言っていない。けどな、自分の言うことが何もかも叶うと思うな。そんななんだったら、ずっと独奏曲アリアのままだぞ？」

「いいわよ！あんたたちみたいな役立たずの奴隷がいたってあたしの足を引っ張るだけよ！それな一人のままで良いわよ！！」
.....

「アリア。その果物ナイフ。取ってくれるか？」
俺は、アリアの近くにあった果物ナイフを指した。

「え？ええ」
そう言つてアリアは、俺に果物ナイフを渡してきた。俺は意を決してそれを

シャッ！

「！！？」
額に当て、切った。俺の額からは、赤い鮮血が、ポタツ、ポタツ、と、床に垂れ落ちる。

「な、なに考えてんのよ！！？あんた！！」

「主人が傷を負ったら、奴隷も傷を同じ場所に負う。それが奴隷である俺と主人であるお前との主従関係だ」

「な、なに意味分かんないこと言ってるのよ！！」

「俺はこの額の傷に誓う。もう、俺は、お前を一人にしない」
チッ！やっぱ痛えな。

「俺はお前がどこに行こうが、俺はお前について行く。それが奴隷になった者のすべきことだ」

「なんで………なんでそこまでするのよ!!」

「お前が助けを求めているからだ」

「!!!？」

「俺は、目の前で泣いている人をほっとけない性格なんですね。そして、その人が笑顔になるまで、俺はついていく。たとえば、地球の裏側に行くとしてもな。」

俺がアリアに向かってそう言っているとアリアは、少しを笑顔を浮かべた。

「ありがとう。一真」

十一本目 戦う意味

ピロロロロロロ！

俺は、携帯の着信音で目を覚ました。

「う．．．はい？」

俺は、目をこすりながら携帯に出た。

『一真』

アリア？下にはキンジがいる。小声で話すか。

「なんだ？」

『今日の昼。新宿警察署まで来なさい』

新宿警察書？一体何のために？

『つべこべ言わない！あんた言ったわよね！あたしについて来るって！』

わ、分かったからそんなに大きな声を出すな。耳に響く。

『そう。じゃあ昼にね』

そう言ってアリアは、通話を切った。しかし、新宿警察署に行って何するつもりだ？俺はそう呟き、とりあえず洗面台に向かった。

「あれっ？」

いつものように顔を水で洗うために、額にかかっている髪を左手で上げたとき、俺は驚いた。

「昨日作った傷が．．．．．塞がっている？」

そう、昨日額に作った傷が、元通りに戻っていた。なんでだ？いくらなんでも早すぎる……

そう思って体の節々を見てみるが、何も異常は無かった。

「うーん……どういふことなんだ？」

この異常な回復力を調べてみたかったが、アリアの呼び出しを思い出し、また今度にすることにした。

待ち合わせの場所。新宿警察署。俺はその前で、アリアが来るまで携帯をいじくっていた。ちなみに、今の俺の格好はフードを頭から被った黒いパーカー姿の、はたから見たらどう見ても変人に見える姿だった。

「アリアの奴。遅せーな」

一体なんのようなんだ？こんなところに呼び出して？俺はそんなことを思いながら、携帯をいじくっていた。そのとき

「ん？」

俺の目に、人影が見えた。緋色のツインテールに、いつもとは違った淡いピンクのワンピースを着た、アリアの姿だ。

「よお。遅かったじゃねえか」

「あんたが早すぎんのよ。それより」
「ん？なんだ？後ろに誰がいるのか？」

「下手な尾行。しつぽが丸見えよ」
アリアのその言葉と共に、物陰から出てきたのは、アリアをあれほど嫌がっていた、キンジだった。なるほど、アリアの姿でも見て、

デートとでも思ってた尾けてきたな。

「あ……その……お前、前に言っただろ。」「武偵なら自分で調べなさい」って」

なるほどね。キンジはアリアを本当に拒絶していなかったわけだ。それとも、アリアに情でも沸いたのか？

「で？この尾行者はストーカーどうするんだ？」

俺は、横にいるアリアに尋ねる。

「もう着いちゃったし、いいわ。あんたも関係者だしね」

「？」

アリアの言葉の意味が分かってないって顔してるな？キンジの奴。俺たちは、キンジを含めた三人で、新宿警察署内に向かった。

管理局の二人に見張られながら、俺たちと、面会をしている彼女、神埼かなえ。名前の通り、アリアの母親だ。

「まあ・・・アリア。どちらかが彼氏さん？」

「ち、違うわよママ！」

かなえさんは、アリアと物凄く似ていて、上品で綺麗だった。

「じゃあ、大切なお友達つてところかしら？アリアもボーイフレンドを作る年頃になったのねえ。ふふふ」

この人、天然だ。

「そんなんじゃないわ！こいつらは遠山キンジ！と東城一真！そういうのじゃない！」

ハハハ。ストレートに言いやがって、泣くぞ？

「初めましてキンジさん、一真さん。私、アリアの母親のかなえでございます。娘のアリアがお世話になっているそうですね」

「「ど、どうも」」

この人。天然だけど、さすがアリアの母親だな。綺麗だ。

「ママ。時間が無いから手短に話すけど、この二人は武偵殺しの3人目の被害者よ」

待て。なぜそこで武偵殺しが出る？

「……まあ……」

アリアの言葉に、表情を固くするかなえさん。何がなんだかさっぱり分からん。

「さらにもう一つ。一昨日、奴はバスジャックを起こしたわ。奴の活動は急激に活発になってきてる。そろそろシッポを出すハズだから、最初の狙い通り、「武偵殺し」を捕まる。奴の件だけでも、ママの懲役864年が、742年まで減少するから」
「な！！？懲役864年！！？事実上の死刑と変わんねえじゃねえか！！」

「そして、ママをスケープゴートにした、「イ・ウー」の連中をここに全員ぶち込んでやる」

イ・ウー？なんだ？

「アリア。気持ちは十分うれしいけど、パートナーは見つかったの？」

パートナー。ここでそれが出てきたか。

「それが……どうしても見つからないの」

なるほど、俺じゃ力不足ってことか。やっぱりキンジの力も……

「ダメよアリア。あなたの才能は遺伝的なもの。あなたは、一族のよくない一面。プライドが高くて、子どもっぽい一面も遺伝しているの。そのままでは、あなたは実力を半分も出せないわ。適切な

パートナーなら、あなたの実力を何万倍にもして出してくれる。曾お爺様もお祖母様も、優秀なパートナーがいらっしゃったのよ?」

「……それは、ロンドンで耳にタコが出来くらい聞かされたわ。でも、いつまでたっても出来ないから、欠陥品なんて呼ばれて……」

「……一人じゃできない……ロンドン……パートナー……」

「人生はゆつくり歩みなさい。早く走る子は、転ぶものよ」

「神埼。時間だ」

おい!早すぎんだろ!!?

「ママ、待つてて!!必ず公判までには犯人を全員捕まえるから!!」

「アリア、焦ってはダメ。私の最高裁は、弁護士さんが必死に引き伸ばしてくれてる。だから、まずはパートナーを見つけなさい」

「やだやだやだ!!!」

アリアは、子どもが泣き叫ぶかのように駄々をこねる。

「時間だ」

管理局の人間が、かなえさんを羽交い絞めにする。ちくしょう。ここが警察じゃなけりや、ぶっ飛ばせるのによお!!

「ヤメロ!!ママに乱暴するな!!」
「まずい!!」

「アリア！！落ち着け！！」
俺はアクリル板に飛びつこうとするアリアを、抑えた。かなえさんは、アリアの方を最後まで見ながら、管理局の人間に、連れて行かれた。

「訴えてやる！！あんな扱い方！！絶対に！！」
アリアは、都心であるも関わらず、盛大に叫んだ。ああ、そうだ。怒れ！！

「・・・・・・・・」

アリアの叫びが止まる。そして、アリアは顔を伏せたまま、泣いていた。地面に涙がぼろぼろと、滴る。それに続くように、晴天だった青空が曇天に変わり、大粒の雨が降り出した。

「アリア・・・」

キンジ。今は・・・そつとしいてやれ。

「泣いてなんか・・・ない」

ちい！うっとうしいなあ！！

「さつきから俺たちを見ながらクスクス笑いやがってテメーら！！消える！！一片の欠片も残さず消し飛ばすぞ！！！！」

俺は、先ほどから、俺たちを見ながら笑っていた通行人共に向かって、殺気を込めて叫んだ。俺の殺気が利いたのか通行人ともは、俺たちから逃げるように走っていった。

「うわああああああん！！！！ママあああああああああああああ！！！！！！！！」

アリアが突然、こらえていたであろう涙を盛大にこぼしながら、かなえさんを叫んだ。そうだ。思いっきり泣け。それが、今のお前に出来ることだ。ちくしょう。なんで俺には、目の前で泣き叫ぶたった一人の女の子を救えない！！俺は、降り注ぐ雨の中、右手を強く握り締めた。

十一本目 戦う意味（後書き）

なんか段々文章力が無くなっていくような気がします（涙

十二本目 飛行機内での遭遇（前書き）

一万アクセス突破しました！！皆様のおかげです！！ありがとうございます！！
ざいます！！

十二本目 飛行機内での遭遇

時刻は午後23時。大半の人物は眠りについて、俺はある人物に電話を掛けた。

『はい』

「あやつじゃねえ「川嶋」。俺だ、一真だ」

『一真。久しぶりね』

俺の話し相手は、俺の幼馴染の川嶋という奴だ。なぜコイツに掛けたのかというと、コイツは、頭が物凄くキレる奴で、数々の難事件を解決していった、俺のもっとも信用できる奴だ。

「悪いが今はそんなことを言っている場合じゃないんだ。俺の質問に答えてくれ」

『私に答えることならいいけど？』
大丈夫だろ。

「神崎かなえ。この人のことを、お前が知っている限りで良い。教えてくれ」

『なんでその人を知りたいかは分からないけど、良いわ。神崎かなえは、あの神崎・H・アリアの母親。そして、イ・ウーに武偵殺しの犯人の濡れ衣を着せられた人よ』
また出た。イ・ウー

「その、イ・ウーってのは一体なんなんだ？」

『イ・ウーって言うのは、超人的な人材を集めた戦闘組織。そこでは、超人的な人材の人間同士が、互いに己の能力を教えあって、超人的な人材を作り上げているの。組織の巨大さゆえ、日本はおろか、大国アメリカさえも頭が上らない程の組織よ』

なるほど。そのリーダーがかなえさんに、864年分の濡れ衣を着せた。それで、警察も頭が上らず奴らの言いなりって分けか。チィ！厄介な組織を相手にしてやがるな。アリア

「なら、武偵殺しの真犯人はまだ捕まっていなくてことか？」

『そう言うことになるわ』

武偵殺しだけでも確か、100年分くらいは罪が軽くなるってアリアが言ってたな。武偵殺しだけで100年分ということは、200年、300年分の大玉がイ・ウーにはいるってことか。

「で？武偵殺しの真犯人。お前は知ってるのか？」

もしコイツが知っていたら、そいつをアリアに知らせてとっ捕まえてやる！！

『そこまではさすがに知らないわ』

川嶋も知らないか……いや、これだけ情報があれば十分だ。

「ありがとう。」「K」「」

俺は川嶋にそう言い、携帯を切った。

「さて、後はアリアの名前の「H」って意味が分かれば解決に近づくんだが……」

俺は、昼間アリアとかなえさんとの会話に出てきた単語を頭の中で並べていた。ロンドン……パートナー……ロンドン

でパートナーと一緒にだった過去の人物……
・ダメだ。後一つ、決定的なピースがあれば。俺は、必死に頭を
回転させていると、強烈な睡魔に襲われ、眠りに付いた。

アリア side

あたしは今日、ここを出る。そして、ロンドンに帰る。あたしは、寮の中で荷造りをしていた。もちろん、このことはキンジにも、あたしに付いてくるって言ってくれた、一真にも教えていない。一真は、付いてくるって言ってたけど、あたしのために、自分の人生を捨てることなんて無い。そう思って、何も伝えずに帰ることにした。

「・・・・・・・・」

なんだろう・・・・この気持ち。ここから、離れたくない。あたしは、そんな気持ちを押し払って、寮の玄関から出て行った。近くでタクシーを拾って、羽田まで向かった。

「・・・・・・・・」

やっぱり、二人に「さよなら」だけでも、言えばよかったかな。あたしは、揺れるタクシーの後部座席で、そんなことを考えていた。

「ありがとうございました」

タクシーの運転手にお金を払って、あたしは降りた。目の前には、羽田空港が広がる。・・・・・・・・行こう。羽田に向かって、足を動かしたそのとき

「どこに行くんですか？お嬢さん？」

あたしの聞きなれた声が、後ろから聞こえた。あついのは、後ろを振り返ってみた。そこには、昨日と同じ、黒いパーカー姿の、一真がいた。

「か、一真！！？なんでこんなところに！！？学校は！！？」

「ん？ああ、サボった」

「サボった！！？どうして！！？」

「大丈夫だって。一日くらいサボっても退学になるわけじゃないし」

「そういうことを言ってんじゃない！！なんで来たのよ！！？」

「言つたろ？俺はお前の奴隷。奴隷は主人に尽くすつて。俺はこんなとこにいても退屈なんだよ」

一真は笑いながらあたしにそう言ってきた。

「お前はかもしれえモンを次々と運んできてくれる。俺にとつちや、お前と離れるのは惜しいんだ。あと、ロンドンにも行つてみたかったしな」

一真は本当、まじめなんだかバカなんだか、分かったもんじゃないわね。でも

「ありがとう。一真」

こんなにうれしいことは、久しぶりよ。

「ところでさあ」
「なによ？」

「お前、貴族なら、金、結構あるよな？」
「そうだけど？」

「俺、ロンドン行きの切符ないんだわ。だから、買ってくれねえ？」
「はあー。前言撤回。こいつは、バカよ。正真正銘の。あたしはそんなことを思いながら一真と一緒に、羽田へ歩いていった。」

一真side

何とかアリアにロンドン行き切符を買ってもらった俺は今、アリアの乗る飛行機の凄さに驚いている。

「なあ。アリア」

俺は、横にいるアリアに話しかけた。

「なによ？」

「この中、飛行機だよな？」

「そうよ。何言ってるのよ？」

「なんで飛行機の中がホテルの部屋みたいになってんだアアアアアアアアアア！！？」

そう。俺の前に広がるのは、天井に飾ってるシャンデリア、座り心

地最高のソファ、40インチはあるテレビ、そして、飛行機の中とは思えないほどの広さが、俺の前に広がっていた。おかしいだろ！？飛行機の中にあるのが不自然なものばかりあるんですけど！！？

「いやこれ、どうみても飛行機の中じゃないよね！！？高級ホテルの一室だよね！！？」

「何分わけかんないこと言ってるのよ。飛行機はこうでしょ？」
お前はただけデンジャラスな生活を送ってきたんだアアアアアア！！！俺は、そんなアリアに突っ込みながら、ソファに座った。

「で？お前は戻ってどうするんだ？」
俺は、隣に座ったアリアに尋ねた。

「パートナーを見つけるわ。見つからなくても、あんたも一緒に来ることだし」

なるほど。アリアの中で俺は、保険って感じかな？やっぱりキンジがよかったか？

「キンジは、もう、いいわ。」

冷たいね。そんなこと言ったらキンジの奴が泣くぜ。なあ、キンジ！！俺は、ドアに向かってそう叫んだ。それに続くように、ドアが開き、そこには、俺とアリアのよく知る人物、遠山キンジがいた。

「アリア！！つと一真！！？」

おいおい、俺を見てそんなに驚くなよ。ま、こっちも驚いてるみたいだがな。

「キンジ！！？どうして！！？」

役者がそろったな。俺は、顔に笑みを浮かべながらそう言った。

「キンジ。俺に驚くより、アリアに話が合ってきたんじゃないのか？」

恐らく……………。

「ああ。アリア。俺との最初の約束。覚えてるか？」
キンジは、そう言いながら、座席に座る。

「覚えてるけど？今更何よ」

「武偵憲章第2条 依頼人との約束は絶対に守れ。俺は、強襲科アサルトに戻って一度だけお前と一緒に事件を解決すると約束した。でも、武偵殺しの1件はまだ、解決して無いだろ？」

なるほど。言われてみれば確かにそうだ。キンジは最初に起きた事件と一緒に解決するとアリアに約束した。そして、バスジャックは1件の事件だが、その犯人、武偵殺しはまだ捕まっていない。だから、キンジはここにいるもおかしい分けではない。そういうことから、考えたな、キンジの奴。

「何よ今更！！」

うお！！アリアは、キンジの言葉にライオンのように吼えた。

「帰りなさい！あんたのおかげでよく分かったわ！！もう武偵殺しはあたしと一真で解決するって決めたの！！」

おいおい、そう言うなって。

「アリア。そう言うなよ。俺だけより、キンジもいた方がいいだろ？お前がずっと探していた人だったんだろ？」

俺はとりあえず、この空気を直すことにした。おつ、なんか浮遊感がある。俺は、窓の外を見てみた。やっと飛んだか。

「足手まといが増えるだけよ！ロンドンに着いたら帰りなさい！！
エコノミーのチケットくらいなら買ってあげるわ！！もうあたしと
あんたは他人！！あたしに話しかけないこと」

「元から他人だろ？」

お！キンジが反撃に出たな！

「うるさい！喋るの禁止！！」

揚げ足を取られたアリアは、キンジに向かって怒鳴った。

ピッ！ゴゴーン！！

ん？雷でも落ちたか？俺は、窓を見ながら呟いた。そのとき「キャ
！」と、アリアの声が聞こえた。俺は、アリアの方を振り向くと、
耳を塞いで、その場にしゃがみ込んでいた。もしかして

「恐いのか？」

あ、キンジに台詞取られた。

「こ、恐くなんか」

アリアの声に続くようにまた

ピッ！ゴゴーン！！

爆音のような音を立てながら、雷が響いた。

「キャ！」

恐いんじゃない。俺は、ニヤニヤしながら、アリアを見ていた。

「恐いんならベッドにでも潜ってるよ」

キンジが、アリアに提案する。まあ、プライドの高いアリアは

二発の銃声が響いた。俺は、銃声のした方へ、急いで向かった。そこには、金髪のアテンダントの直ぐそばで、この飛行機の人間が二人、倒れていた。

「おい！その二人に何をした！」

俺は、その金髪のアテンダントに向かって叫んだ。金髪のアテンダントは俺の方を向き

「おきをつけでやがります」

そう言っと、何かを投げてきた。ガス管か！？俺が気づいた時には、あたり一面が、白い煙で覆われていた。

「クツ！ガス缶か！？とりあえず口と鼻は押さえねえと！！」

煙を吸わないように口と鼻を押さえる。しばらくすると、煙が晴れていった。体は……問題ないな。ただの発煙缶だったみたいだな。

「どうした！一真！」

俺の名を叫びながら、キンジとアリアがやってきた。キンジたちも銃声が聞こえたみたいだな。

「金髪のアテンダントにガス管投げられたただけだ！それより、その金髪のアテンダントの喋り方が！武偵殺しだ！」

俺の言葉に、キンジとアリアは目を丸くする。

「やっぱり出やがった」

やっぱり？キンジは、武偵殺しがここに現れることを知っていたのか？

「ああ。武偵殺しはバイクジャック、カージャックから続いて、シ

「ジャックでとある武偵を仕留めた。たぶんそれは、直接対決だ」
金一さんか。キンジが説明していると

『Attention please デヤガリマス。トウキハハイジ
ヤックサレヤガリマシタ。ジョウキヤクハオトナシクシヤガレデゴ
ザイマス。タダシブテイハレイガイデヤガリマス。アイテシテホシ
ケレバイツカイノバーニキクルデヤガリマス』
アナウンスに、俺が聞き飽きた声が響いた。のヤロー、なめやがっ
て！

「上等よ！風穴開けてやるわ！」
アリアは、腿に装着しているホルスターから、二丁のガバメントを
取り出し、一回のバーに走っていった。

「俺たちも行くぞ！キンジ！」

「ああ！」
俺とキンジは、自分の武器を構えながら、走っていったアリアを追
った。

「いい。慎重に行くわよ」
物陰に隠れながら、ガバメントを構えたアリアが、俺たちに向かっ
て小声で呟く。そんなこと、バカな俺でも分かる。俺たちは、一斉
に飛び出し、アテナントに各々の武器を向けた。

「『動くな！』」
俺たちは、バーの椅子に座っているアテナントに向かって、叫ん
だ。アテナントは、ゆっくり立ち上がり、俺たちの方を向いて、
笑ってきた。余裕かましやがって！

「今回もしつかりと引つかかってくれやりましたねえ」

アテナントは、そう言うと、顔と服に手を当て、それを剥がした。

「……な!!?」

俺は、その人物の顔を見て、驚愕した。その人物は、金髪にゆるいテンパのかかった髪をツーサイドアップにした、幼顔の武偵高の制服を着た少女

「……理子!!?」

アリアの転校初日に、俺とふざけあった、峰理子がいたのだ。

十三本目 リュパン4世

俺は、目の前にいる人物、峰理子を見て驚愕した。まさか、理子が武偵殺しなんて・・・

「アタマとカラダで戦う才能ってさ、けっこー遺伝するんだよね。武偵高にもお前達みたいな遺伝系の天才がけっこういる。でも、お前だけは特別だ。オルメス」

オルメス？俺がその単語に首をかしげていると、アリアが驚愕の表情になり、硬直した。しかし、オルメス。どこかで聞いた気が・・・

「あんた・・・一体・・・何者？」

「峰理子リュパン4世。それが、あたしの本当の名だ」

リュパン！！？フランスの大怪盗でシャーロック・ホームズと対立したあの、アルセーヌ・リュパンか！！？

「でもね。家の人はみんな理子のことを「理子」って呼んでくれないの。お母様が付けてくれたこの可愛い名前を、みんな呼んでくれなかった。呼び方がおかしいんだ」

理子意外に呼ぶ名前なんて・・・

「おかしい？」

アリアが、理子の言葉に首をかしげる。

「4世4世4世！！！！どいつもこいつも、みんな理子をそう呼ぶんだあ。酷いよね？」

確かに。酷い。

「そ、それが何よ。4世の何が悪いのよ？」

おい！今、理子にそれを言ったら！！

「悪いに決まってるんだろ！！あたしは数字か！！？ただの遺伝子か！！？あたしは理子だ！！数字じゃない！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・理子。

「曾お爺様を超えなければあたしは一生自分じゃない！だからイ・ウーに入って！この力を手に入れた！！」

理子のその言葉を聞いていると、俺の頭の中にある映像が流れ込んできた。みんなから蔑まれ、軽蔑された、幼きころの自分の姿が。

「お前が、武偵殺しの犯人なのか！？」

キングが理子に向かって叫ぶ。そうだ。アリアとの直接対決が望みなら、なぜ、武偵殺しなんてことをする？

「武偵殺し？あんなもの、プロローグをかねたお遊びだ。本命は、オルメス4世アリア。お前だ」

理子の鋭い睨みが、アリアに突き刺さる。まるで、獲物を狙う鷹のように。

「100年前、曾お爺様同士の対決は、引き分けに終わった。つまり！オルメス4世アリアを倒すことで！あたしは曾お爺様を超えることを証明できる！」

待てよ？初代リュパンはシャーロック・ホームズと対立していたはず・・・・・・・・一人・・・・・・・・パートナー・・・・・・・・ロンドン・・・・・・・・リュパン・・・・・・・・オルメス・・・・・・・・曾お爺様・・・・・・・・対立・・・・・・・・は！！？そう言うことか！！分かったぞ！！アリアの一族！！理子がアリアを狙う理由が！！

「バスジャックも、お前が？」

「くふ。キンジの部屋に入って時計いじったのに、キンジも一真も全然気づかないんだからあ」

なるほど。俺たちがバスに遅れたのはお前のせいだってことが。

「何もかもお前の計画通りかよ！」

キンジが、ベレッタを理子に向けたまま、言う。

「んーん。そうでもないよお。チャリジャックで出会わせてバスジャックでくっつけようとしたけど、キンジがくっつかなかったことは計算外だったもの。あ、でも保険として一真がくっついてくれたかあ」

アリアも理子も俺は、保険扱いってことが。ま、どうでもいいが。

「でも、どうしてもキンジをアリアにくっつけさせたくって、キンジにお兄さんの話をしたら、やっとくっついた」

「兄さんを……兄さんをお前が？」

キンジは、手を震えさせながら、理子に問う。ちい！まずいな！

「くふ。ついでに言いこと教えてあげる。キンジのお兄さん。理子の恋人なんだあ」

「いいかげんにしろ！！」

キンジが、理子に向かって怒鳴った。ちい！キンジのヤロー、冷静さを失ってやがる！

「キンジ！落ち着きなさい！」

「これが落ち着いてられるか！」

こうなったら！いつそ気絶させて！俺がそう思ったそのとき

グラッ

飛行機が突然揺れやがった。な！！？こんなときに！！？キンジはそれいより、体勢を崩し、理子はその隙にキンジのベッタをキンジの手から叩き落した。ベレッタは、バーの奥へ滑っていく。

「ノンノンダメだよキンジ。今のお前じゃ、戦闘の役には起たない。まだ、一真の方が冷静かなあ」

理子は、体勢を崩したキンジに、ワルサーを向けていた。しかし、とことんなめてやがるな、理子の奴。

「何やってるのよ！！」

アリアがキンジにそう叫びながら、床を蹴り、理子に一気に近づき、二丁のガバメントを理子に発砲する。理子は、一発を避け、一発は防弾制服を着た体に直撃した。理子は、アリアを「キッ！」と睨むと、もう一丁のワルサーを出してきた。

「アリア！二丁拳銃がアリアだけと思っただら大間違いよ！！」

理子はそう言いながら、アリアの懐に入る。アリアと理子の二人は、至近距離でお互いの銃を発砲していく。アリアがッ発砲し、理子がかわす。理子が発砲し、アリアがかわす。その同じ動作を、二人は延々と繰り返している。まるで、ビデオのリプレイをずっと見ているかのような。だが、そんな動作にも限りはある。弾切れ。弾が切れてしまえば銃などただのガラクタに成り代わる。弾があつてこそ、銃はその力を存分に発揮できる。まるで、アリアの探しているパートナーのように。二人が撃ち合いを始めて数分語、弾切れをおこしたと思われるアリアは、理子の両腕を両脇で挟む。今がチャンスだ！

「キンジ！一真！」

アリアの叫びと共に俺は鎌鼬を、キンジはバタフライナイフを理子に向けた。

「終わりだ。理子」

キンジが理子に勝利を宣言する。だが、理子は顔色一つ変えないでいた。どうということだ？

「^{カドラ}双剣双銃。奇遇よねアリア。アリアと理子はいろんなところが似てる。家系、戦闘スタイル、キュートな姿、それと、二つ名」

「？」

アリアは、理子のその言葉に首をかしげる。アリアの二つ名……
……^{カドラ}双剣双銃……まさか！！？

「あたしも持つてるんだあ。^{カドラ}双剣双銃の理子。でもね」

理子のその言葉に続くように、理子の髪が、動き出した。まるで、髪その物に意思があるみたいに。

「アリアは本物の^{カドラ}双剣双銃じゃない。お前はまだ知らない。この力を」

理子の髪は、理子の背後に隠していたナイフを取り出し、アリアに襲い掛かる。ちい！俺は、軽く舌打ちをすると、右手の鎌鼬を落とし、アリアとキンジの襟ぐりを掴み、後ろに思いつきり引っ張った。それをしたため、俺の顔をナイフが切り裂く。痛ッ！

「一真ッ！！」

後ろに飛ばしたキンジが、叫んでくる。俺は、鎌鼬を拾い直ぐに、理子との距離を取る。

「キンジ！アリアを連れて一旦逃げる！！」

アリアは、さっきのナイフでやられちゃったからな。ここは俺がやるっきゃねえ！

「一真！！」

ちい！

「さっさとしろ！！」

俺は、キンジに叫んだ。キンジはアリアを抱え、バーから出て行った。

「あれえ？一真は逃げなくて良いのお？殺しちゃうよぉ？」

フン！俺がこんなおもしれえモンを前にして、逃げると思っか？それに、俺は死なねえよ！絶対！

「だよねえー！一真はそう言うと思った！」

そうかい。俺は、お前がこんな奴とは思わなかったけどな。

「ねえ一真」

なんだ？

「イ・ウーに來ない？歓迎するよ」

あん？何言ってんだよお前。

「一真は理子に似てるの。一真の幼いころから、理子と何もかも」
.....

「お前.....俺の過去を知ってんのか？」

声のトーンを落とし、警戒心前回で理子に問いかける。

「うん。一真はずっと一人ぼっちだった。ただみんなと目の色が違うだけで、蔑まれてきたんでしょ？一真は悪くないのに……………」

……………」

「だから……………ね？」

そう言って理子は、そっと手を差し伸べてきた。その手は、まるで天使のようにそのときは思えた。俺は懷から懷を取り出し、鎌鼬を入れた。ゆっくりとその手に近づき、そして

「……………分かった」

「!!」

「とても言うと思ったか？」
その手を思いつき叩いた。

「！！？」

困惑している理子。訳が分からないって感じの目してやがる。

「俺は、目の前で誰かが泣いていたら、その人のために戦う」
バックステップで、理子と距離を取りながら、俺は背中に手を忍ばせ別の刀を取り出す。

「だから、誰かを泣かせるような組織に入るなんて、俺はゴメンだ！」

取り出した刀は、表すならば闇。全てを消し去る闇のようだった。
霊刀「鬼切^{オニギリ}」。その刀身を、ゆっくりと理子に向ける。黒い刀身

が、バーの明かりによって妖しく光る。

「あゝあ。せっかく理子が誘ったのにい。一真はやっぱりそうくるのかあ」

理子は、そう言いながら、二丁のワルサーを向けてくる。

「ああ。俺はそういう人間だから！」

俺はそう言つと床を蹴り、理子に近づいていった。

十三本目 リュパン4世（後書き）

今回の刀は、日本神話の天照の名前をお借りしました！

十四本目 似た者同士（前書き）

戦闘筆記はうまくありませんのであまり期待なさらずに（汗）

十四本目 似た者同士

床を蹴り、理子に近づいた俺は、右腕で鬼切を理子に振るう。理子はそれを、バックステップで後ろに避け、二丁のワルサーを俺に放ってきた。俺は、鬼切を振り、俺に向かってくる銃弾を弾いた。

「くふ。一真あ。そんな刀で理子に勝てると思ってるの？」

フン！この天照をなめてもらっちゃあ困るぜ！俺はそう言い、今度は、理子の肩目掛けて鬼切を振るった。だが、その攻撃は、理子の二本のナイフによって受け止められた。その髪便利すぎだろ。理子はその隙に、俺の胸元に向かって銃弾を二発発砲してきた。俺は、瞬時に鬼切をナイフから引き離し、体を反対に反らして銃弾を避けながら、鬼切を理子のわき腹に振るう。だが、それも二本のナイフによって受け止められる。俺は、理子から距離を取るために、脚に力を入れ、宙を一回転しながら後ろに下がった。

「鬼切でこんなにてこずるなんて……はっ！さすがだな。双剣^{カトラ}双銃を名乗ることのだけはあはる」

「くふ。一真も中々じゃん。その刀はなめない方がよさそうかもねえ」

そりゃそうだ。この刀も、そして俺も強いからな！！

「ふん。なら、手加減無しの本気で相手してあげる」

ハーン！俺もなめられたもんだなあ！俺は、理子にそう言い、天照をまた、理子目掛けて振るう。そして、やはりナイフで受け止められる。

「理子！お前は俺がお前に似てるって言ってたなあ！ああ！確かに

そうさ！いつも一人だった！！誰からも俺の名前を呼んでもらえなかった！！凄く辛かった！！毎日が地獄のような日々だった！！」俺は、つばぜり合いの中、理子に話しかけた。

「けどな！！俺は誰かに認めてもらいたかった！！」「東城一真」として！」

鬼切とナイフからは、火花が飛び散る。

「俺はそれから努力した！！！そして！！みんなに「東城一真」として認められた！だから今の俺があるんだ！」

「くっ！」

俺は鬼切に込める力を強めた。鬼切が押している！

「お前はそんなことをしなくても！立派な一人の人間「峰理子」だ！」

俺は両腕にさらに力を込めた。理子はまずいと思ったのか、鬼切からナイフを引き離し、俺と距離を取った。

「例え他の人間がお前のことを4世って言っても！！俺は！俺だけは絶対に4世なんて呼ばない！！だから！戻ってきやがれ！！」

ハア、ハア、ハア、ハア。俺はあの時、キンジと口喧嘩した日以来だった。全力で訴えかけるのは。

「………やさしいんだね。一真は」
理子！！

「でも、理子はアリアを倒さなくちゃいけないの」
ちっ！何がコイツをそんなに縛り上げる！！

「・・・・・・・・・・そうか。なら、俺はお前に負けるわけにはいかねえ！」

俺はそう叫び、理子につっこもうとした。そのとき

ドクン！

「うつ！」

何だ！！？体が！！？突然、俺の体が言うことを利かなくなった。

俺は鬼切を握る力を失い、鬼切を手放した。クソッ！何なんだ！！？
一体！！？

「アハハハハ！！やつと利いてくれたあ！！！」

利いた！？コイツ！毒かなんか俺に仕掛けやがったのか！？でも、
いつ・・・・・・・・・・は！！？あのか！！？俺の脳裏に、
アリアとキンジを引き離れた時に、理子に切られたナイフが思い浮かんだ。
あのかのナイフに！毒かなんかを仕込んでいたのか！？
俺は、その場に「バタッ！」とうつぶせの状態で倒れこむ。

「アハハハハハ！！安心していいよお！！それは神経毒。10分
もすれば元通りになるから！！！」

だが、そんな時間はくれそうになさそうだがなあ。俺の心の呟きに
続くように、理子は俺の頭にワルサーを向けてきた。くそっ！

「じゃあねー真！」

俺は、覚悟を決め、目を瞑った。

ダン
ン
！

銃声が響いた。ああ、結局、俺は最後まで、兄さんを超えられなかった。俺は、そんなことを思っていた。ん？思っていた？つーことは、俺の頭、撃たれてない？俺は、瞑った瞳を、ゆっくり開いた。そして、俺の前に写っていた光景は、理子が右腕を押さえている。何が起きたんだ？よくみると、理子の足元に、理子のワルサーが落ちていた。そして、俺のすぐ側には、人影が見えた。

「だ・・・れだ？」

俺は、その人影に尋ねた。

「俺だ。一真」

その声！！？それにその喋り方！！？まさか！！？俺は、目を見開いて、その人物を見上げた。そいつは、黒髪に、武偵高の制服を着た、

俺のもっとも知る人物

「キンジー!!?」

遠山キンジが、理子に銃を向け、立っていた。

「遅くなった。ここからは、俺の出番だ」

十四本目 似た者同士（後書き）

次回！！ハイジャック解決！！の予定。

十五本目 生還

「キン・・・ジ!」

俺は、麻痺した口をなんとか動かし、キンジを呼ぶ。

「一真。お前はゆっくりしてろ」

おいおい、そりゃねえだろキンジ。俺のノルマを横取りするつもりかあ？俺は、麻痺している体を、気力で無理矢理立ち上がらせた。

「くふふ！まだ5分も経ってないのに、さすが一真あ」

へっ！俺がこんなおもしれえ状況を前にして寝ていられるかってんだ！俺は、理子を鋭く睨みつけながら言った。理子がアリアにした、獲物を仕留めようとする鷹の目つきを。

「くふつ。さいっこう一真。その眼。理子ゾクゾクしちゃう」

それは褒めてんのかあ？ま、どっちでもいいがなあ。俺は、ゆつくりと床に落ちていた霊刀「鬼切」^{オニキリ}を拾い上げ、理子に向ける。キンジもまた、ベレッタを理子に構える。だが、理子は、顔色一つ変えずに笑ってやがる。クソ！この状況は、俺たちが断然有利だ。しかし、理子は何を狙っているか分からない。伸張にいかねえと。俺が理子に一歩足を踏み込もうとすると

「くふふつ。一真あ、キンジイ、動かない方がよいよ？」

その理由は、すぐ分かった。理子の後ろの壁に、円を作るように爆弾が仕掛けられていた。逃げる場所まで考えてやがったのかっ！

「ご存じの通りわたくし、武偵殺し（爆弾使い）ですから」

俺とキンジに向かって、スカートの裾を持って軽くお辞儀をする理子。へっ！武偵殺しじゃなけりゃ！十分可愛いんだけどな！

「ねえキンジ。イ・ウーに來ない？一人くらいならダンテムできるし。それに。イ・ウーには、お兄さんもいるよ？」

理子があからさまに挑発をかましてきた。だが、今のキンジなら！

「理子。これ以上俺を怒らせないでくれ。武偵憲章9条を破つてしまいそうだ。それはお互い困るだろ？」

武偵憲章9条。武偵は如何なる状況においても人を殺してはならない。それを破るほど、裏キンジも頭にきてるのか。

「念のためもう一回聞くけど。一真は？どうする？」

熱心に俺を誘ってくれてるみたいですねえ。だが

「行かねえーよ。さっきも言つたろ？俺は、泣いている誰かのために戦うつて。だから、その人を泣かせるような組織には入らない。絶対に」

理子は「はぁー」と、ため息をつくとき、武偵高の制服を掴んだ。何をする気だ？

「あ、そ。まあいいや。じゃ、アリアにも伝えといてねえー！あたしたちは、いつでも三人を歓迎するよ？」

その言葉に続くように、爆弾が爆発し、理子の後ろに、一人一人が出来る大きさの出口ができた。逃げるつもりか。

「待て！」

キンジは、理子を追おうと走るが、それを俺が、キンジの手を握り止める。

「なー！？かず「理子！！最後に言わせろ！！」

俺は、キンジの言葉を聞かず、理子に叫んだ。

「俺は目の前で泣いている奴を助ける！！だから！！助けて欲しかったらいつでも俺のところに来い！！俺がお前を救ってやる！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

理子は、無言のまま、そこから身を空中に乗り出していった。キンジは、俺の腕を振り払い、理子が、逃げた場所まで走っていった。たぶん、制服がパラシユートだったんだろ。だから、制服をあのとき掴んだんだな。俺が、そんなことを考えていると

ドッゴーン！！

巨大な爆音が聞こえ、飛行機が大きく揺れた。おわっ！！？

「キンジ！！さっきの衝撃は！！？」

「ミサイルだ！！理子の奴！！こんなとんでもないプレゼントくれやがった！！」

な！！？ミサイル！！？本当にどんなプレゼントだよ！！？って言うてる場合じゃねえ！それなら恐らく、エンジンがやられたはずだ！！

「キンジ！！アリアは！！？」

「先に操縦室に行ってもらった！俺たちも行くぞ！」

言われなくても！俺とキンジは、アリアのいる、操縦室へ向かった。

「遅い！早くしなさい！！」

操縦室に入ると、緋色のツインテール娘、アリアに怒鳴られた。無茶言っなよ。俺なんか、毒喰らって経ってるのも結構きついのに、無理してここまで来たんだぞ。少しは心配してくれよ。

「アリア。操縦できるか？」

「セスナならね。ジェット機なんてやったこともないわよ」

おいおいマジかよ。アリアの奴、飛行機飛ばせんのかよ。俺は乗り物と言ったら、チャリか車、バイクくらいしかできねえぞ。

「で？着陸はできんのか？アリア」

「無理よ。上下左右に飛ばすことしか出来ないわ」

頼みの綱のアリアもさすがに着陸は無理か。ま、あの人の子孫なと裏キンジなら、この状況、くりぬけなくも無いだろ。

「俺はちよいと理子にやられちゃったからね。少し休ませてもらうぜ」

俺はそう言い、壁にもたれかかる。キンジは、空いている席に座り、無線機をスピーカー状態にし、無線を始めた。

『こちら羽田コントロール。ANA600便。応答せよ。繰り返す』
お！第二の綱が現れたか！？キンジは、すぐさまマイクを取った。

「こちら600便。当機はハイジャックされたが、コントロールを取り戻した。機長と副操縦士が負傷。現在は、乗客のうち武偵二名が操縦している。俺は、遠山キンジ。他二人は、神崎・H・アリアと東城一真だ」

キンジが、現状報告をしている。

『よくやった遠山武偵。次の指示を待て』
羽田コントロールはそう言い、通信を切った。

「一真。機長から衛星電話、取ってくれ」
ああ。俺は、キンジの指示通り、機長から、衛星電話を借り、キンジに渡した。この状況でかける相手といやあ……………俺の嫌いなあいつか。

『もしもし』

「武藤。俺だ。キンジだ」
やっぱりな。ま、あのクソヤローにも今回ばかりは助けを求めずにいられねえからな。

『キンジ！！？お前、ハイジャックされた飛行機にいるんじゃない！！

「一真とお前の彼女が大変だぞ！！？」

アホかコイツは。アリアの奴、さつきから顔真っ赤にしてるじゃねえか。

「一真とアリアも一緒だ。それより武藤。ハイジャックのことよく知ってたな」

たぶん、ニュースにでもなってるじゃねえか？

「とつくに大ニュースになってるぜ！！客の誰かが機内電話で通報でもしたんだろ。乗客名簿はすぐ通信科が周知してな。そこに一真とアリアの名前があつたもんだから、今みんなで教室に集まってるところだ」

ほおー。バスジャックの時のお礼を今してくれるか。丁度良いねえ。キンジは、武藤にこれまでの出来事を全て教えた。ハイジャックされたこと、犯人が逃亡したこと、そして、ミサイルでエンジン二基が大破したことを。

「ANA600便。安心しろ。その航空機は最先端技術の塊だ。エンジン二基でも問題なく飛べる。さらに、悪天候でもその長所に変わりはない」

羽田コントロールが急に喋りだした。しかし、なんだ？この嫌な予感は？

「それよりキンジ。大破したのは内側の二基って言ってたな。燃料系の数値を教える」

キンジは、燃料系の数値に目をやる。

「540。今535になった」

キンジが説明すると、武藤が悔しがり

『クソツタレが！！盛大にもれてやがるぞ！！』
な！！？燃料漏れ！！？最悪だろ！！？

「どうすれば止まる？」

『止まる方法はない。厳密に言うと、機体側のエンジンは、燃料系の門も兼ね備えているんだ。そこをやられると、元も子もない』
んだよちくしょう！！あとどれ位持つんだ！！？

『持つて後、15分てとこだ』
な！！？15分だと！！？

「さつき通信科^{「ネット」}に聞いたんだが、その飛行機は、相良湾上空を飛んでいるらしい。羽田に戻れ！距離的にそこしか着陸できねえ！」
武藤が、俺たちに向かって盛大に叫んでくる。へっ！手前も中々やるじゃねえかよ武藤。俺が、安堵の表情を浮かべたそのとき

『こちら関東自衛隊司令部。600便。応答せよ』
はあ！！？自衛隊！！？

『羽田空港に着陸は許可できない。現在、空港は自衛隊により閉鎖中だ』

な！！？

『ふざけんな！！』

そう叫んだのは、俺の嫌っていた武藤だった。

『誰だ？』

『俺は武藤剛氣！！武偵だ！！600便は燃料漏れを起こしてる！

！持って後10分なんだよ！！着陸する場所は羽田しかねえんだ！
」

・・・・・・武藤。

『武藤武偵。無駄だ。これは防衛大臣の決定したことだ』

俺は、ふと窓の外を見た。そこには、戦闘機が二台いやがった。なるほど。命令に従えない場合は、撃墜も已むお得不いってわけか。クククククク。本当に腐ってやがるな。最近の日本政府は！！

「アリアー！絶対海にでるんじゃないぞー！」

俺は、アリアに向かって、思いつきり叫んだ。

「キンジイー！衛星電話を貸せー！」

俺は、キンジから衛星電話を受け取り、ある番号に掛けた。

『はい』

「あやー！じゃなかった、「K」！！ハイジャックの件、知ってるかー！？」

俺がその単語を発したとき、アリアとキンジの目が丸くなった。

『ええ。政府はあんたを見捨てたみたいね』

「なら話は早いー！今から俺が自衛隊司令部にお前のことを知らせるー！その後にお前は通信に割り込んで声を流してくれー！頼むー！」

『はあ。あんたってホントダメなやつね。まあいいけど』

「ありがとうなー！」

俺はそう言つと、無線を自衛隊司令部に掛けた。

「こちら自衛隊司令部。600便。なんだ？」

「よく聞けよ！！政府のクソヤロー共！！俺は「K」の相棒の東条一真だ！！現在政府がこの600便を見捨てたことは「K」は知っている！！そして！！俺の身にもしものことがあった場合「K」は今後の日本政府との関係を完全に断ち切ると言った！！これは脅しても何でもねえ！！その証拠に！！「K」の声を聞かせてやる！！耳の穴かっぽじってよく聞きやがれ！！」

それと同時に、自衛隊司令部に通信が割り込んできた。もちろん、こっちにも聞こえている。

「私が「K」よ。戦闘機を今すぐ下がらせ、羽田を空けなさい。なお、これに逆らった場合、あたしは今後、日本政府との関係を断ち切る。以上」

「わ……分かった。しかし！羽田は本当に封鎖中なんだ！！ちっ！まあ、戦闘機が引いていくことだけでもよしとするか。」

「あんだ数々の難事件を解決に導いた世界最高の名探偵「K」と知り合いなの！！？」
まあな。

「武藤。滑走路には何メートル必要だ？」

キングが武藤に冷静に尋ねるってことは……裏キングか。

「2045メートルだな」

「そこの風速は？」

『レキ。学園島の風速、分かるか？』

おいおい、レキもいんのか。

『私の体感では、南南東の風速41・02です』

「じゃあ武藤。その風速41メートルに向かい、着陸すると、滑走距離は？」

『2050だ』

「ギリギリだな」

キンジが言う。

「キンジ。どうするつもりだ？」

俺は、キンジに尋ねる。

「空き地島に着陸する」
なるほど。

『おい！待てキンジ！あそこはただ広いだけで何も無い！それにこの天気じゃ！島の輪郭すら分かりやしない！』
なに？っ—ことは、天気を晴れにすれば良いのか武藤？

『ああ！そんなことできるわけがないがな！！』

「いや、俺の鎌鼬で雨雲を吹き飛ばす！！」

「な！！？んなことが出来んのか！！？」
キンジが、目を丸くして言う。

「ああ。ただこの技、まだ使ったことがねえから、一か八かだな」

「いや、可能性が少しでもあるなら、やってくれ」

へっ！了解！！俺はそう言い、理子の逃げていったバーまで行った。そこで、懷から鎌鼬を取り出し、外の雨雲に向けた。

「行くぜ！！鎌鼬！！」

俺は、鎌鼬の名を叫び、全身の力を鎌鼬に込めていった。そして

「暴風・竜巻！！！！」

そう叫び、外の雨雲に向かって鎌鼬を思いっきり振るった。鎌鼬からは、台風のような暴風が、雨雲に一直線に向かった。そして、暗かった雨雲の空を晴天の青空に変えた。

「へ、へへ。これで……だい……じょ……う……ぶだ」

俺は鎌鼬をその場に手放し、そのまま後ろに倒れ、意識を手放した。

十五本目 生還（後書き）

かなり強引な終わらせ方。もうしわけありませんでした。

十六本目 神埼・H・アリア（前書き）

武偵殺し編。完！！

十六本目 神崎・H・アリア

「う……ん？」

知らない天井だ。俺は、そんなどこかの二次創作定番の言葉を呟き、体を起こした。周りを見てみると、どうやら病院みたいだ。

「俺は……」「やっと起きたわね」川嶋！！？何でこんなところに！！？」

ハジャックの土壇場で俺が助けを求めた、川嶋が病院の壁にもたれかけていた。

「何でって……悪いかしら？友人のお見舞いに来るのは？」
「いやそう言うことじゃなくてお前、仕事は？」

「今日はオフよ。わざわざアメリカから飛行機すっ飛ばしてきてあげたんだから感謝しなさい」

「いや、別に頼んではないけど。……あの後、どうなった？」

「無事飛行機は着陸。負傷者及び死亡者は0」
「そうか……」は！アリアは！！？」

「アリアなら、ロンドンに帰るそうよ」
「な！！？どういうことだ！！？」

「ついさっきアリアが、あんたに会いに着たわ。けど、まだ眠ってるって教えたら、手紙を私に渡して、出て行ったわよ」
その手紙、どこだ！！？綾香は、俺の眠っていたベッドの近くにある、机を指した。そこには、白い手紙があり、「一真へ」と、書かれていた。俺は、すぐさま手紙を開いた。

『一真。本当は直接会って話したかったけど、一真が起きて無かったから、手紙でするね。あたし、イギリスに帰ることにしたの。パートナーを見付けにね。キンジや一真が一緒だったらよかったんだけど、キンジとは一回事件を解決したら終わりって約束したし、一真はあたしについてくれるって言ってたけどあたしなんかのために人生を棒に振ることなんてないと思って、あたしだけで帰ることにした。一真があたしのためにいろんなことしてくれたときは、うれしかったよ。じゃあ、またどこかで、縁があれば会いましょう。』

神崎・H・アリアより。』

「……………アリア」

なんでだよ。なんなんだよ、ちくしょう……………俺は……………
……………強くなったんじゃないのかよ……………！

「行きなさい」

え？

「アリアは、女子寮の屋上にいるわ。今ならまだ、間に合う」

……………ああ！俺はそう言っと、ベッドから跳ね飛び女子寮の屋上に向かった。

「まったく。相変わらずバ一真なんだから」

クソツタレ！！何が人生を棒に振るだ！！俺はの残りの人生を！！
何に使おうが勝手じゃねえか！！俺は、そんなことを考えながら、
女子寮の階段を上る。クソツ！間に合えええええ！！そして、俺は
屋上の扉を開いた。そこには、黒いヘリと、近くに黒服の人間二人
に、緋色のツインテール娘、アリアがいた。

「アリア！！」

俺は、アリアに向かって大声で叫んだ。

「一真！！？目を覚ましたの！？」

「目を覚ましたのじゃねえ！！お前何考えてんだ！！キングがダメ
でも！俺がお前のパートナーになるって！！」

「いいのよ。それは」

「俺に不満があるってんなら！！強くなる！！だから！！」

「違うの一真。不満なんて無い」

「じゃあ！」「あたしのせいで！一真が死ぬかもしれないからよ！！」
「な！！？」

何を言ってるんだアリアは。

「あんたはあたしのためにバカみたいに動いてくれる！！でも！！
それであたしの考えが誤って！！一真を死なせるような結果になる
かもしれないの！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・アリア

「だから！！」「分かったよ」「え？」

「ご主人様からの命令だ。奴隷は素直に聞くとするさ。ただ、これ
だけは言わせる」
そろそろかな？

「辛くなったら、いつでも戻って来い！！俺が救ってやる！！」

「ありがと。一真」

アリアはそう言つと、ヘリに乗った。操縦席は、アリアが乗るのを
確認すると空に飛び立った。

「アリア。一つ言い忘れたことがあった」
俺は、誰もいないはずの屋上で呟く。

「奴隷は主人の言うことを聞くが、他はどうだかな？」

俺はそう言つと、上がつてきた屋上の扉の方を向いた。次の瞬間、閉まつていた扉が勢いよく開き、出て来たのは、黒髪に、腕を白い包帯で巻いた、俺の親友。遠山キンジが、俺に目もくれずに、走つて来た。

「アリアアアアアアア！！！！！！俺が！！！！パートナーになつてやる！！！！だから！！！！行くな！！！！アリアアアアアアア！！！！」

キンジは立ち止まり、アリアが乗ったヘリに向かって、叫んだ。そのとき

「遅いのよ！！バカキンジ！！」

その叫びとともに、アリアがヘリから飛び降りた。おいおい、ギャグ漫画じゃねえぞ。キンジは、そのアリアを見事キャッチしたが、どうもそれでは終わらないみたいだ。ヘリから、黒服の連中が降りてきやがった。

「アリア!!! キンジ!!!」

俺は、二人の名を叫びながら、鎌鼬を取り出した。

「しっかり捕まってるよ!!」

俺は、そう言っと、アリアとキンジに向かって、鎌鼬を振った。

「旋風！！」

鎌鼬から風が吹き荒れ、アリアとキンジを包み込むと、二人は「フワ」と、宙に浮かんだ。さて、あの人たちも怪我のしないように帰すか！！俺は、次に黒服の連中に向かって、鎌鼬をい振った。

「大旋風！！」

巨大な旋風が、黒服の連中を包み込み、向かいのビルに運んでいった。俺は、最後に自分に向けて、旋風をかけた。俺の体を、旋風が包み込み、宙に浮かんでいるアリアとキンジの元まで向かった。

「よ。お二人さん」

俺は、左手を上げ、二人を呼んだ。

「一真！？おまつ！？なんで俺たち宙に浮いてんだよ！？」

キンジが、アリアを抱えながら、俺に尋ねる。ん？そんなの、俺が旋風をお前らにしたからだろ？

「だからなんでそんなに軽いんだよ！！？」

まあまあ、それよりアリア。良いパートナーいや、こう言う場合四代目ワトソンが見つかったと言った方が正解かな？オルメス4世さん？俺の間に、キンジが目を丸くする。

「いつ気づいたの？」

「理子がお前を超えるって言った時かな？」

「ちよっ！！？ちよつと待てよ！！オルメスってなんなんだよ！！？アリアと何の関係があるんだよ！！？」

あれ？お前知らなかったの？

「知るか！！」

おいおい。あれだけキーワードがあれば出てくるだろ。なあ？

「そうね。分かってないようなら教えてあげるわ！あたしの名前は！「神崎・ホームズ・アリア」！！」

「ホ、ームズ・・・？」

キンジ。もう分かっているはずだろ？目の前にいる横暴貴族様は

「そう。あたしは、シャーロックホームズ4世。そして！あんたちは！あたしの四代目ワトソンにたった今決定したわ！！口答えするなら！！」

しねえよ。なんせ、ホームズだぜ。そんなおもしれえモンを

「風穴開けるわよ！！」

しねえわけねえだろ！！俺は、満面の笑みで言うアリアに、笑みで返した。

武偵殺し編・完！！

十六本目 神埼・H・アリア（後書き）

次回！！ラルド先生とのコラボです！！

十七本目 暗黒の刃降臨（前書き）

今回は、ラルド先生とのコラボ作品です！！

十七本目 暗黒の刃降臨

「暗黒の刃？何それ？」
ダークマテリアルナイフ

放課後の2年A組の教室で俺、東城一真は、ある噂を耳にしていた。

「知らないの？漆黒のようなナイフを使う超偵で、物凄く強いって人の噂」

「それで。その人の名前が「萩原願」って言うの」

漆黒のナイフを使う超偵で暗黒の刃の異名を持つ、萩原願か。・・・
ダークマテリアルナイフ

・・・・・・おもしろいな。

「その人とどこで会えるか知ってる？」

「なんでも、近くの廃工場にいつもいるみたい」

そうか。ありがとう。俺は、その子に礼を言い、廃工場に向かった。

廃工場。去年まで使われていたんだが、なんでもその会社が眠れ
たらしく、今はこうして放置状態の場所だ。さてと、いるかなあ？
俺は、その工場の扉を開け、中に入った。しばらく歩いていると、
人影を見つけた。

「おいあんた」

俺は、その人物に話しかけた。その人は、藍と黒が混ざったような
髪をしており、武偵高の制服を着ていた。

「何だ？お前は？」

「俺は東城一真って言つんだ。一真で良い。あんたは？」
俺は、その人にな名前を聞いた。

「萩原願。願で構わない」
ピンゴ！！見つけた！！

「じゃあ願さん。いきなりで悪いけど、俺と勝負しようぜ！！」
俺はそう言つと、腰に差している刀「鬼切」を鞘から抜き出し、願
さんに向ける。

「勝負だと？おもしろい。受けてやろう」

その言葉は、俺の後ろから聞こえた。

「ッ！！？」

瞬時に鬼切を後ろに回して攻撃を防ぐが、力負けしてしまい、後ろに弾き飛ばされる。

「おいおい瞬間移動なんて、あんたどこの星の人だあ？」

鬼切を構えなおし、願さんに話しかける。

「母なる大地、地球に住む、地球人だ」

願さんはその言葉に続き、D・Eを二丁構えて発砲してくる。てつ二丁！！？ありえんだろ！！？俺は、そんなことを思いながら、発砲された弾を弾き落す。しかし、その直後に腹に痛みを感じ、後ろに吹き飛ばされる。

「いっつつつ……銃弾は囷で、俺がそれに目入ってる隙に、俺の懐に入り込んだなんて……チートかよ？」

俺は、腹を押さえながら、願さんに問う。

「チートじゃない。俺の実力だ」

へっ！そうかい！俺はそう言っと、八咫鳥を鞘にしまい、懐のから鎌鼬を取り出す。

「風斬！！」

俺は、願さんに向かって、鎌鼬を一振りした。鎌鼬から、強烈な風が刃となり、願さんに向かう。だが、願さんは、それを暗黒の刃で受け流す。ゲッ！！マジかよ！！？
ダークマテリアルナイフ

「別の刀？……そうか。お前が「千本の刀」と呼ばれる男か」
サウザンドソード
ん？なんだそれ？俺そんな風に呼ばれてたのか？

「なら、あんたも暗黒の刃の萩原願で、言いのか？」

ダークマテリアルナイフ

「ああ。だが、俺の刃「ノワール」には、敵わない」

「ほー。言ってくれるじゃん。なら俺も、この鎌鼬は、絶対に負けない！！」

「フン。おもしろい。では俺の暗黒の刃とお前の暴風の刃、どちらが強いかな」

「勝負だな」

俺と願さんは、そう言うと、同時に動いた。そのとき

ダン！

銃声が響き、俺と願さんは、数センチ差で止まる。

「おいおい！どこから入ったんだあ？このガキ共はあ？」

「知りませんよ。どうせ、遊び場かなんかと勘違いして入ってきたんでしょう」

「どうでもいいが。俺たちのアジトに無断で入ったんだ。生きて返すわけにはいかねえなあ？」

先頭のスキンヘッドの男を始め、後ろには、ざっと300人近くの柄の悪い男共がいた。

「おいそこのガキイ！！そういう訳だから、おとなしく死ねや」

先頭の男のその言葉に続き、100人近くの男共が、一真と願に襲い掛かった。しかし、その連中は、襲い掛かって一分もしないうちに、地面に這いつくばっていた。

「な!!?」

先頭の男は、それに戸惑いを隠せなかった。そのとき

「おい。テメーら」

普段の一真とは違う、ドスの効いた声が聞こえた。一真の体からは、黒いオーラが出ていた。

「一つ言つてやる」

願もまた、体中から黒いオーラを出しながら、ドスの効いた声を響かせた。

「テメーらこそ!!俺の楽しみを奪つて!!生きて帰れると思うなよオオオオオオオ!!!!!!!!」

一真と願はそう叫び、残りの200人に向かっていった。

「あ、相手はたった二人だ!迎え撃て!」

スキンヘッドの男が、残りの200人に指示を出す。200人は、100人100人に分かれ、一真と願に向かった。一真は、鎌鼬を大きく振り上げた。そして

「大旋風!!」

その叫びと共に、鎌鼬を振り下ろした。鎌鼬から、大きな旋風が三つほど現れ、100人近くの一真に向かってきた連中を、包み込んだ。

『ぎゃあああああああああああああ』

一真に向かってきた連中は、大旋風により、空中に投げ出され、地面に叩きつけられた。一方の願は、D・Eを二丁構え、的確に相手を狙っていった。D・Eが弾切れを起こすと、愛用のサバイバルナ

イフ「ノワール」で、敵を翻弄していった。つそいて、5分も起たない間に、2人の近くには、沢山の人間が転がっていた。

「そ、そんな！？う・・・うそ・・・だ・ろ？」

スキンヘッドの男は、それを見て、後ろに後ずさりしていた。そんな男を、一真と願は、「ギロツ！」と、睨みつけ、近づいていた。

「ま、まてまて！！お、俺が悪かった！！だから！」「おい」「ひいイイ！！！」

一真と願いは、その男に近づくと、ドスの効いた声を響かせた。

「今すぐここから警察署まで突っ走っていけ。1分以内にだ」

「さもないと。お前を一片の欠片も残さずに消す」

一真と願は、その男に、体中から黒いオーラを出しながら、命令した。

「は、はいイイイイイイ！！！！」

その男はそう言い、近くの警察署まで、突っ走っていった。余談だが、この二人は「鬼神の子と風神の子。犯罪者グループ「虚羅墓」を壊滅」と、新聞に一面を飾った。

十七本目 暗黒の刃降臨（後書き）

どうでしたか？次回は！！魔剣編です！！

十八本目 キンジ溺愛者の襲来

アリアとまた、賑やかな日を送るようになった俺とキンジ。だが、俺たちはまだ気づかなかった。あの人が来ている事に。

「はあ。今日も疲れたな」

キンジが、ソファに腰をかけ、呟きながら、ケータイを開く。突然、キンジの顔色が、真っ青になっていった。

「どうした？キンうつ！」

俺も、キンジのケータイを見て、顔を青くした。俺の目に、新着メール49件という文字が入ってきた。

「き、キンジ。これって」

俺がキンジに尋ねようとしたそのとき

ピン、ポーン

玄関のチャイムが鳴り響いた。しかし、このチャイムはなぜか、死神の足音に聞こえたのだ。俺は、一応玄関の方へ向かった。次の瞬間

ドガンツツツツ！！

玄関のドアが、奇妙な音を立てて破壊された。その玄関から、日本人形のような黒く長い髪に、白い巫女装束に身を包んだ、なぜか手に刀を持った、キンジ溺愛者の少女、星伽白雪がいた。

「あ、かず君」

なんだろ。この声が死神の呼び声に聞こえるんだけど？俺の耳がやばいのかな？

「は、はい！！なんでありますか白雪殿！！」

俺は、気づくと白雪に敬礼をしていた。

「アリアはいるう？」

なんか体中からドス黒いオーラが出てるんだけどオオオオオオオ
!!!!!!?

「り、リビングにいるかと！！！！」

俺は、気づけばアリアの居場所を教えていた。そのとき

「し、白雪!!?」

[illegible]

「やっぱりいた！神埼・H・アリアアアアアア！」

白雪は、その叫びとともに、アリアに向かっていった。恐らく、二人はここで火花を散らすだろう。ご愁傷様です。キンジ。俺は、リビングに向かって、合掌をすると、部屋から出て行った。

「キンジの奴。死んでなきゃ良いけどな」
俺は、部屋に取り残したキンジのことを考えながら、夜の公園を歩いていた。すると

「ん？あれは・・・」
ある人物が目に入った。緑色の髪をし、耳にヘッドフォンをつけ、背中にドラグノフ狙撃銃を抱えた少女

「レキ」
無言少女、レキが、公園のベンチに座っていた。レキは、俺の声が聞こえたのか、ゆっくりと、俺の方を向いてきた。

「一真さん。どうしたんですか」
相変わらずの無表情で、俺に尋ねてくる。

「いや、まあ、いろいろあったのよ」

「？」

俺の意味不明な説明にレキは、首をかしげる。しかし、こいつも少しは感情を表に出したらいいのに。周りから「ロボット・レキ」なんて呼ばれて、なんとも思わないのか？

「レキは、どうしてこんな所に？」

「風が言いました」
はい？

「風が言ったのです。ここに行けと」
・・・・・・・・レキって電波？

「あ、えつと・・・・・・・・風？」

「はい」

そんな「はい」って

「そのヘッドフォンは、音楽聞いてんじゃないの？」

「いいえ。これは、私の故郷の風の音です」

どんな趣味してんの！！？俺だったら一分もしないうちに飽きるぞ！！？

「そ、そうか」

俺はそう言いながら、レキの隣に座る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

俺とレキの間に長い沈黙が続く。き、気まじいいいい！！！！何この状況！！？な、何か話題を！！

「そ、そう言えば！！レキ！！お前、普段は何してんだ！！？」

「部屋に戻って、武器の整備です」

うっ！もうちょっと女の子らしいことしろよ・・・・・・・・

「どっか行ったりとかはしねえのか？」

「しません」

おいおい、そりやまずいぞ。いろいろと

「そうか・・・・・・・・あのさ！今度時間があったらさあ！俺とどっか行かねえ？」

「一真さんと？」

「おう！俺が教えてやるよ！楽しい一日って奴を！ダメか？」

「いいえ。構いません」

ほっ。

「ならば、アドレス交換しようぜ！」

そう言っただけ俺は、ケータイを取り出し、レキに向ける。レキも、ケータイを取り出し、俺に向ける。送信完了っ！

「じゃあ、俺はもう帰るな。時間が出来たら教えるから」

「はい」

「じゃあな！」

俺はレキにそう言い、キンジの部屋に戻って行った。

十八本目 キンジ溺愛者の襲来（後書き）

AAの3巻、いつ発売だろう？

十九本目 登場人物紹介（前書き）

中途半端ですみません！

十九本目 登場人物紹介

名前・東城一真

所属・東京武偵高

所属科・強襲科^{アサルト}二年。

ランク・E（実力はS）

容姿・ナルトのサスケ髪型で、顔は整っている。髪色は黒で、瞳の色は赤。筋肉質で、首には、青い水晶を掛けている。

武器・霊刀・鬼切

性格・普段はお調子者。しかし、時には、性格が一変したように真面目になる。

東城一真とは？東京に生まれるが、幼いころ両親に捨てられ、それを見つけた養護施設の人間によって、以後は擁護施設で育てられる。自分の両親の顔は覚えていない。自身の赤い瞳のことにより、周りの人間から「化物」「邪眼」などと蔑まれていた。武偵になろうと思ったきっかけは「強くなりたい」という理由である。銃は仕組み等が面倒らしく、ただ振るうだけと言う理由で、刀を武器にしている。よく施設に通ってくれていた武偵に、ある程度の戦闘技術を学ぶ。霊刀は、一真が13歳の時にとある女性から受け取ったものである。かなりの甘党で、一日に一回でも糖分摂取を怠ると、干からびてしまうらしい。

名前・川嶋

通称「K」

所属・ニューヨーク武偵局

容姿・ロングヘアーで、髪色は薄い青。瞳の色は、黒。顔はかなりハイレベルな美形。

川嶋とは？東京に生まれる。頭が物凄くキレ、わずか10歳で、数々の難事件を解決していった。このことから彼女の呼び名は「最後の切り札」。一真と同じ施設で育った、いわゆる幼馴染。一真と共に武偵となり、二人でよく依頼をこなした。中学卒業後は、ニューヨーク武偵局に入局する。表向きは武偵として活躍、裏では各国の難事件を解決に導いていつている。川嶋という名は偽名であり、彼女の本名は、一真と施設の人間しか知らない。各国の政府と繋がりを持っており、彼女が繋がりを断ち切ると経済破綻になるほどの人物である。また、政府は彼女の姿を知らない。このことは、一真も知っている。

二十本目 ヤンデレ娘白雪さん

レキと公園で分かれた俺は今、キンジの部屋の前にいる。さてと、もうすんだかな？俺は、そんなことを思いながら、扉を開け、リビングに向かった。リビングには、緋色のツインテール娘アリアと、黒髪のロングヘアー娘白雪が、お互い床に座り込んでおり、ベランダには、黒髪の少年キンジがいた。つかここはどここの戦場だよ？聞いたことねえぞ、部屋で戦争勃発なんて話。

「キンジ。生きてるか」

俺は、ベランダにいるキンジに歩きながら、尋ねる。

「ああ。部屋は瀕死状態だな」

いや、瀕死状態でもまだましな方だろ。この二人の猛獣にしては。

「はあ、はあ、・・・しぶとい・・・泥棒猫」

白雪は、息を切らしながら、日本刀を杖のように床につけ、ゆっくりと立ち上がる。

「あ、あんた・・・こそ・・・ハア、ハア、とつとと・・・くたばりなさいよ」

アリアもまた、息を切らしながら、ゆっくりと立ち上がる。

「キンちゃん様！！」

突然白雪は、キンジに飛び掛った。つかキンちゃん様って・・・

「アリアはキンちゃんのこと遊びだよ！！絶対そうだよおお！！」

「意味が分からん！！遊びってどういう意味だよ！！？」

おいおい、そんなことを流れるに分かるだろ。そしてキンジ、それに気づかないお前に腹立ったから死ね。

「キンちゃんはアリアに騙されてるの！！そうじゃないとキンちゃんがこんな女を選ぶわけ無いよおお！！」

白雪は、キンジの首を前後に振りながら、キンジに叫ぶ。白雪さん。キンジの奴、そのままじゃ死にますよ？

「こんな女ってなによ！！こんな女って！！」
それを聞いたアリアは、白雪に食って掛かる。おい！きりがねえからもうやめろ！！

「キンちゃんと恋仲だからっていい気になるな！！この毒婦！！」
だアアア！！白雪もアリアに恋仲とか言うなよ！！「恋仲」という単語を聞いたアリアは、見る見るうちに顔を、赤くしていった。ホラみる！！

「こ、恋仲！！？ば、バカ言ってるんじゃないわよ！！あたしは！！れ、恋愛なんて！！したこともするつもりもない！！」

「じゃあ！アリアとキンちゃんは恋人じゃないの！！？」

「そついうのじゃない！！」

白雪の言葉を、顔を赤くさせたまま返すアリア。

「キンジと一真は！！あたしの！！あたしの奴隷にすぎないわ！！」
白雪の前で奴隷って言うなアアアアア！！変な誤解を生むだろうがアアアアア！！！！

「ど、ドドドド奴隷！！？」

白雪は、アリアと同じくらいに、顔を赤くしながら言う。

「そ、そんないけない遊びまで……き、キンちゃんにさせるなんて……」

あれエエエエエエエ……！！？そこに俺の名前が入ってないんですがアアアア……！！？

「ち、違う……！一真……！あんたも何か言いなさい……！！」
なんで俺に振るんだよ……！！

「し、白雪さん。二人はですね、少しの間だけ一緒に組んでいるだけですよ」

「そうなのキンちゃん……！！？」

俺の言葉に反応したのか、白雪は、キンジに問いかける。

「あ、ああ。そうだ。俺とアリアと一真で、組んでるだけだ。決してそんな関係じゃない」

「ほ、ほんとうに？」

まだ疑ってるな。キンジ。何とかしろよ。

「俺の言うことが信じられないか？」

「そ、そんなんじゃ……！！信じてます……！！信じてますよキンちゃん様……！！」

ようやく落ち着いたな。それにしても、キンジに溺愛しすぎだろ白雪。普通にしたら、かなり可愛いになあ。

「じゃ、じゃあ、キンちゃんとアリアは、そ、そんなことはしてな

いのね？」

そんなことってなんですか？

「そんなことってなんだよ？」

あ、キンジと被った。

「き、キスとか」

は？ いやいや白雪。いくらなんでもそりやないだろ！！なあ！キン・ジ？ 俺は、笑いながら、キンジとアリアの方を向くと、二人は、顔を赤くして、黙っていた。え？ マジで？

「おいお前ら！！マジでか！！？」

「し．．．．．た．．．．．のね？」

俺が二人に聞くよりも先に白雪が、二人に尋ねた。あれっ！？ 白雪の声がなんか死神の声に聞こえるんですけどオオオオオオオオ！！？

「そ、そういうことはしたけど！」

したんかいアリア！！！！

「で、でも！！大丈夫だったのよ！！！」

何が？

「こ、子どもは！！で、出来てなかったから！！！！」

．．．．．はい？ その言葉を聞いた白雪が、後ろに「バタリ」と、倒れた。なんか、白雪の口から魂が抜けてるのが見えるんだけど。俺、靈感でもあんのか？

「おい！！アリア！！！！キスで子どもが出来るわけないだろ！！！」

キンジが、アリアに向かって怒鳴る。というかどっから仕入れた情報だそれは！！？間違いすぎだろ！！？

「で、でも！！キスしたら子どもが出来るって！！昔お父様が！！」
どんな教育してんだホームズ家エエエエエエエエエエエエ！！！！！！

「んなことで子どもが出来るか！！」

「何よ！！じゃあどうやったら出来るか教えなさいよ！！」

聞いても文句なしならいいけど？俺が、アリアにそう言い、耳打ちで、子どもの出来る仕組みを教えた。俺が言い終わると、アリアは、顔をこれまで以上に赤くし、アリアのガバメントで俺は、蜂の巣にされた。

二十一本目 昼のひと時

昨日アリアに蜂の巣にされた俺は、なんとか一命を取り止めた。そして今は、アリア、キンジと共に、食堂で昼食をとっているところだ。俺はラーメンを、キンジはハンバーグ定食を、アリアはももまを食べていた。

「遠山君、東城君。ここ、いいかな？」

俺たちが飯を食っている中、褐色の髪に、女なら誰しもが蕩けるイケメンスマイルをした、不知火亮が、食堂のトレーを持ちながら、話しかけてきた。

「ん？不知火か。いいぜ」

俺はそう言い、不知火が座れるスペースを作る。不意にキンジの方を見ると、俺の嫌いな武藤が、キンジを押しつけるように入ってきた。まあ、この間の件では助かったからな。最近、そこまで嫌いではなくなった。

「聞いたぜキンジ、一真。ちょっと事情聴取させる」
何をだ武藤？あと、なぜ俺もだ？

「なんだ事情聴取って？」
あ、キンジと被った。

「キンジ。お前、星伽さんと喧嘩したんだって？」
ああ、そういうこと。武藤は、白雪のこと好きだからな。まあ、当の本人は、武藤より断然キンジだろうがな。俺は、キンジに聞く武藤を見ながら、ラーメンを口に運ぶ。

「星伽さん沈んでたみたいだったぞ？何があつたんだ？」

「どうもこうも・・・武藤。お前白雪見たのか？」

「今朝温室で花占いしてたって不知火が言うからよ」

「なんか、「好き」「嫌い」って言いながら、花をちぎってところを見たけど。どうしたの？星伽さんとはもう、愛が冷めちゃったとか？」

不知火たちの間では、キンジと白雪が付き合ってるように見えるのか。まあ、そう見えてもおかしくはないわな。というか、そう見えないとおかしいぞ。

「あのな。俺と白雪はそんなじゃない。ただの、幼馴染だ」
キンジよお。いい加減白雪と付き合っちゃえよ。白雪はお前のこと溺愛してんだからよお。

「幼馴染ねえ。でも、噂では、独占欲の強い神崎さんが、星伽さんに、遠山君と東城君を取られたくないから追い返したって聞いたよ？神崎さん。遠山君と東城君と話してる時、楽しそうだからね」
おい待て！！なぜそこで俺の名前が出てくる！！？

「こ、この変態！！」

「ぐっ！」

「ぶべらっ！」

アリアが、俺とキンジの顔面に、拳を叩き込んできた。なぜ俺がこ
うなる！！？

「ハッキリ言っておくけどね！！あ、あたしは！！そ、そんな理由で白雪を追い返したんじゃないの！！キンジと一真は、ただのパトナー！！す、好きでも！！なんでもないんだから！！」

俺は、殴られた顔を手で押さえながら、アリアの怒声を聞いていた。

「へえ。なら、遠山君と星伽さんに、復縁の可能性もあるってことか」

不知火。お前本当にこういう話好きだな。いつそのこと、女子との恋愛トークでも混ざってこいよ。

「復縁ってなんだよ！復縁って！さっきも言ったけどな！俺と白雪はただの幼馴染だ！付き合っでは無い！」

あーあ、キンジ。お前それ白雪聞いてたら思わず自殺するんじゃないか？

「そうだったね。ごめんよ。遠山君」

「ああ！！もうこの話はおしまい！！キンジ！！一真！！明日からあんたたちにあたしが調教よ！！」

おい！！んなとこで調教とか言っな！！勘違いされるだろ！！？

「ちょ、調教！！？まさかお前ら・・・・へ、変な遊びでもしてるんじゃないだろうな・・・・？」

ホラみる！！武藤が食いついてきたじゃねえか！！

「してねえよ！」

俺は、立ち上りながら、武藤に向かって言う。

「アリア！！人前では訓練と言ってくれ！！」

「うるさい！！奴隷なんだから調教！！」

おいおい、キンジの言う通りにしてくれよ。

「で？調教でも訓練でもいいけど、なにすんだよ？」

まあ、アリアのことだからどうせ・・・

「そうね。明日から毎日鍛練しましょ！！」

やっぱりね。死なない程度に頼むぜ。ご主人様。アリア そんな話をしていると、あつという間に、昼休みが終わった。

二十二本目 一真の朝

ピピピピピピ！――！

目覚まし時計のアラームで、俺は目を覚ました。時間は……まだ6時か。アリアとの訓練は、7時30分からだしなあ。

「……………飯作るのだし、あの店で飯でも食うか」

俺は小声でそう呟き、武偵高の制服に着替え、玄関から出て行った。え？なぜ着替えたかって？飯食った後ついでに、そのまま学校に行けるじゃん。

寮から出て15分後。俺は、行きつけである定食屋に来ていた。俺は、そのドアを開いた。

「らっしやい！お！ボウズじゃねえか！よく来たな！！」

そう俺に話しかけてくる彼は、ここの定食屋の店主の親父だ。

「親父。日替わり定食一つ」

俺は、席に座りながら、俺のお気に入りメニューを頼んだ。俺は、近くに置いてある漫画雑誌を手に取り、飯が来るまで、時間を潰した。

数分後。

「ほれ！」

その言葉と共に、俺の前に、納豆、豆腐、白米、味噌汁、魚が出てきた。俺は、割り箸を割り、真っ先に納豆に手を付けた。

「ボウズ」

何？俺は、納豆を白米の上に掛けながら、返事をする。

「武偵つてのは大変か？」

そうでもねえよ。始めたころには大変だったけど、今はもう慣れた。

「ふん。武偵つてのは、基本何してんだ？」

午前中は一般高と変わらねえよ。午後からは、訓練したり、依頼を受けたらして。

「しかし、武偵が出来るようになったのも、犯罪が増えたからなんだろう？」

まあな。

「犯罪が減ったら、武偵はどうなっちまうんだ？」

さあ？警察に就つか、自衛隊にでも就くか、はたまた一般人に戻るかな。親父とそんな話をしていると、飯を食い終わっていた。

「ご馳走さん。旨かったぜ、親父」

俺はそう言いながら、財布から、親父に千円を渡す。

「おう！ありがとな！」

俺と茜は親父にそう言い、店から出て行った。

「さてと、もうすぐ7時半になるし、そろそろアリアの所に行くか」
俺は一人そう呟き、アリアの待つ、武偵高の裏庭に向かった。

二十三本目 白雪護衛部隊（前書き）

緋弾のアリアのO? A。早くみたい!!>|<!!

二十三本目 白雪護衛部隊

茜と分かれた俺は今、キンジと共に、アリアを待っていた。

「おっせーな、アリアの奴。キンジ。お前、なんか知らない？」

「俺が知るところか？」

そつだらうな。俺が、キンジとそんな話をしていると、急に目の前が真っ黒になった。

「だあれだ？」

アリアだろ。俺は、ふさがれた手を払い、後ろを向いた。そこには、紅色のチアガール姿のアリアがいた。

「もう、後ろを取られえるなんて、あんたたちもまだまだだね」
「……………なにその姿？何でチアガール？」

「言ってなかった？あたし、アドシアードでチアやるのよ」
アドシアード。簡単に言うとまあ、一種の祭りだ。

「へえー、馬子にも衣装ってことかな？」

「どついう意味かしら？」

「すみません」

アリアが俺にガバメントを向けてきたので、俺は素直に謝った。

「で？鍛錬って具体的に何するんだよ？」

キンジが、アリアから目を反らしながら尋ねる。おいおい、こんな

貧乳のどこが「風穴」すみません。

「とりあえず。あんたのもう一つの人格を呼び出すための特訓ね」
もう一つの人格？・・・・あぁ、裏キンジね。

「キンジ。あんた、二重人格なんでしょ？おそらく幼少期のトラウマによる別人格が、戦闘時のストレスによってもう一つの人格に移り変わるのよ」
あながち間違っではないな。

「だから！あんたを戦闘時のストレスにさらしまくるのよ！」
アリアはそう言いながら、後ろから木刀を取り出し、キンジの頭を叩く。痛いんだよなぁ、それ。

「今の攻撃を真剣白羽取りできるようになること！」

「んな無茶だろ」

キンジは、叩かれた頭を抑えながら、アリアに言う。

「無茶じゃない！！あんたはやれば出来る子なんだから！」
お母さん！！？ちっこいお母さんがいるよ！！？

「とにかく、さっきのタイミングを500回、頭の中でイメージしなさい」
イメトレか。

「迫ってくる刀を、両手で挟み込む感じでやってみなさい」
アリアの言うとおりにキンジは、両手を前にあげ、白羽取りの練習を始めた。

「で？俺はなにすんだよ？」

「あんたもやるのよ。白羽取り」

「やっぱりねー。俺もキンジと同様に、白羽取りのイメトレを始めた。まあ、俺は刀使ってるから、大体のイメージは分かるけどな。俺とキンジがそうやって白羽取りのイメトレをしてる最中、アリアは、チアの練習を始めた。さすがだなあアリアの奴。俺は、アリアの動きに、少し見とれてしまった。不意にキンジの方を向くと、キンジは、頬を少し赤くしていた。キンジ。お前がアリアでヒスったりしたら、俺はお前を次からロリコンと呼ぶぞ。」

放課後。

時間手のはとてつもなく早いもんだ。俺が白羽取りの練習をしていたら、あつという間に放課後になっちまった。今、俺とキンジは、グラウンド付近の水道の水で顔を洗っているところだ。

「いっつつつつ・・・アリアの奴、容赦ねえな」
キンジが、タオルで顔を抑えながら呟く。

「だな。その内俺ら、顔中が傷だらけになるんじゃないか？」
タオルで顔を拭きながら、キンジに返す。

「そうなりたくないなら、早く白羽取りをマスターしなさい」
後ろから、聞きなれた声が聞こえた。振り返ってみると、緋色のツインテールを風に靡かせたアリアがいた。

「あんたたちが白羽取りを出来るようになるまで、この訓練は続けるからね！」

「勘弁してくれ。俺の顔が表現できないくらいに大変なことになりそうだ」

俺は、顔を拭いたタオルを首にかけながら、アリアに言う。

「ダメよ。あたし達が追う、イ・ウーにも剣の名手がいるらしいの。だから、白羽取りは覚えといたほうが良いの」

「ま、がんばるけどさ」

そう言いながら、俺たちは歩き始める。中央にアリアを挟んだ形で、歩いていく。しばらく歩いていると、アリアの足が止まった。

「どうした？」

「キンジ、一真、これ見て」

そう言うアリアが指すのは、マスターズ教務科の掲示板だ。俺とキンジは、教務科（マスターズ）の掲示板に目をやる。そこには「生徒呼び出し。2年B組 超能力捜査研究科（SSR） 星伽白雪」と、書かれていた。白雪が？あの、キンジ溺愛性格を取れば、成績優秀、スポーツ万能、容姿端麗のほぼ完璧人間の白雪が呼び出しねえ。あれか？高校デビューとか言うやつで、なんかやらかしたとか？

「キンジ、一真」

「なんだよ？そんなこれから何かします見たいな顔しやがって」
アリアの顔が、なぜか邪悪な笑みに包まれていた。

「これはチャンスだわ！」
何の？

「白雪よ！あの女を遠ざけるいい機会だわ！！この件を通して、あの女の弱みを握るわよ」

「弱み？なんでそんなこと。大体白雪の奴は、もうお前に突つかかってないだろ？」

「何言ってるのよ。来てるじゃない」

「「は？」」

「気づいてなかったの？あの女、あたしが一人のとき、誰かから見られてるような気配を感じたり、電話が盗聴されてたり、渡り廊下から水をかけられたり、とにかくあたしは、あの女に嫌がらせを受けてるのよ！！」

それもう、一種のいじめじゃん。やりすぎだろ、白雪。

「でも、この間なんか特にやばかったわ」
何されたんだよ？

「女子更衣室のロッカー開けたら、あたしの首の位置にピアノ線が張られてたわ」

恐あ！！！！殺すきかよ！！？

「とにかく！！今から教務科^{マスターズ}に潜入して、白雪の弱みを握るわよ！！」
やめよう。と言っても、コイツは聞かないだろうしな。ま、スリルがあつておもしろえからいいけど。俺たちはそうと決まり、教務科^{マスターズ}に進入したのであった。

芋虫のように匍匐前進をしながら、アリア、キンジ、俺の三人は、教務課の通風口を進む。すると

「星伽イ」

下から、女にしてはやけに声の低い声が聞こえてきた。下を覗き込むと、黒髪の短髪で、夏場なのに黒いコートを着た、尋問科の担当ダギユラをしている綴梅子先生が、口にタバコを銜えながら、白雪と話していた。

「何だこの点数は、お前が90切るなんてなあ」

「す、すみません。綴先生」

綴先生に見せられたテストの答案に書かれた点数を見て、白雪は、ペコペコと頭を下げる。

「まあ、別に点数とかどうでもいいんだけどさ。なんかお前らしくなくてさ」

綴先生は、タバコを手に取り「プハー」と、口から煙を吐いた。

「あんたもしかして……アイツにコンタクトされた？」
「アイツ？誰だ？」

デュランダル
「魔剣ですか？」

その単語を聞いたアリアの眉が、なぜか動いた。しかし、デュランダル
魔剣と言
えば、超偵の連中ばかりを誘う犯罪者だったな。

デュランダル
「それはないです。でも、魔剣は存在しないって噂が「噂じゃ
なきゃ、どうすんだ？」

「仮にいたとしても、私なんかの小物より、もっと大物を狙うでし
ようし」

「星伽イ。お前は家の秘蔵っ子なんだぞ？もうちょっと自分に自信
を持って」

「そ、そんな」

「とにかく。もうすぐアドシールドが始まる。そうすれば、外部か

ら人がわんさかここに来るんだ。ボディーガードくらいつけとけ。気休めくらいにはなるだろ」

「こりや弱みを握ることより、ドでかいモン握っちまったみたいだな。アリア」

俺は、アリアに小声で話しかける。

「そうね。そして、こんな良い情報を提供してくれた白雪に、少し感謝しないとね！」

アリアは、そう言うと、通風口を開いて、二人の目の前に降り立った。

「そのボディーガード！！あたしがやるわ！！」

白雪と綴先生は、突然のことに、目を丸くしていた。ま、当然だろ。なんせ上から人が現れたんだからな。俺とキンジも続くように、二人の前に降り立った。

「アリア！！？キンちゃん！！？かず君！！？」

「ほー。Sランク武偵が二人とSランクモドキが一人か」

綴先生は、感心そうな表情で呟く。というか

「先生。そのモドキって言うのやめてくれませんか？」

俺がそう言うと綴先生は、立ち上がって、俺の頭を驚づかみにしてきた。イッダダダダダダダダ！！！！

「お前は試験さえサボらなければすぐにSランクになれるってのに」綴先生はそう言うと、俺の頭から手を引いた。た、助かった。

「で？ボディーガードってのはどういう意味だ？」

そのまんまの意味だろ。分からなかったのかよ？

「うるせえ」

イダダダダダダダ！！！！だから頭掴むなって！！

「そのままの意味よ。24時間体制であたしが引き受けるわ！！」

「星伽イ。なんか知らないけど、Sランク武偵がボディガード引き受けてくれるらしいよ？」

ハアー、ハアー、ハアー、ハアー、頭割れるかと思った。

「い、嫌です！！アリアと一緒になんて！！汚らしい！！」

す、凄い言われようだな。アリア。アリアは、その言葉に「ムッ」

ときたのか、ガバメントをキンジに向けて、白雪を脅しだした。き、汚ねエエ！

「わ、分かりました！！でも！！私からも！！じよ、条件があります！！」

・・・・・・・・・・なんだろう。凄い予想が付く。

「き、キンちゃんも！！私に！！24時間体制で！！わ、私も！！キンちゃんの家で暮らすうー！！」

やっぱりね。こうして、白雪の護衛が幕を開けたのだ。

二十四本目 犬猿の仲

白雪護衛部隊を結成した、その夜。護衛対象の白雪が、大量の荷物を持ってやってきた。

「ほ、星伽白雪です！！ふ、不束者ですが！！よ、よろしく願いします！！」

純白のエプロン姿の格好で、目の前にいる最愛の男性、キンジに、頭を下げる。つーか何この絵図。完璧に嫁さんが嫁ぎに来た時みたいじゃねえか。

「あ！ご飯作らなきゃ！」

白雪はそう言つと、台所に走つていった。

「なんでこうなるんだ？俺の平和な生活はどこにいったんだよ」
胡坐を書いた状態でキンジは、ため息をつく。

「んなモン。女王様^{アリア}が来た時から、もう崩れてんだろ」
俺は、キンジにそう言いながら、先ほどから脚立に乗って天井に何かしているアリアの方を向いた。

「アリア。お前は何してんだ？」

「この部屋を要塞化してるのよ」
要塞化！！？やりすぎだろ！！？

「何言つてんのよ！！敵はあの魔剣^{デュランダル}なのよ！！これくらいして当然じゃない！！」

「アリア。なんでそこまで魔剣にこだわるんだ？」

「魔剣は、あたしのママに罪を着せた敵の一人なの。魔剣を捕らえれば、ママの刑期が635年まで減らせるわ」

なるほど。つーことは、魔剣は、イ・ウーの一員だってことか。

「でも、魔剣は、都市伝説って聞いたぜ。誰も見たことないんだろ？」

確かに。魔剣の噂はこれまで何度も聞いたが、誰一人として、その姿を見たことがない。次第に周りからは、魔剣はいないという認識が強くなってきたしな。

「そんなことないわ！！魔剣は、いる！！」

「じゃあお前、実際に魔剣の姿、見たことあんのかよ？」
キンジの言葉に、アリアは口ごもってしまふ。

「ホラみる」

「でも魔剣はいるわ！！だってママに罪を着せたのよ！！」

「他の犯人の罪ってこともあるだろ？」

誰も見たことないとまで言われてる奴だし、キンジの方が一理あるかもな。

「うるさい！！うるさい！！うるさい！！いいからあんたたちも仕事しなさい！！キンジは廊下のタンスの危険物チェック！！一真はあたしと一緒に要塞化の手伝い！！」

アリアの叫びに、しぶしぶ廊下へ出ていくキンジ。

「一真！…寝室にも仕掛けるわよ！…」
はいはい。俺は、アリアにそう言い、リビングから出ていった。

要塞化が終了した俺たちは、中央のテーブルを挟んで、俺、アリア、キンジ、白雪の順で、座っていた。俺の目の前には、豪華中国料理が並んでいた。す、すげえな。これ全部白雪が作ったのかよ。

「ちょっと、なんであたしの所には食器が無いのよ」
アリアは、右肘をテーブルにつけた状態で、白雪を睨んでいた。

「アリアにはこれ」

トーンを限界まで下げた声で白雪は、アリアの前に、茶碗一杯の白米の上に刺さった箸という、とても縁起の悪い状態で出した。

「なんでよー!」

「文句があるならボディガード解約します」

ツンと突っ張ったようにそっぽを向く白雪を見てアリアは、歯を食いしばりながら、白雪を睨んでいた。

アリアと白雪が反発しあうも、なんとか無事夕食を終えた俺は、テレビのチャンネル争いという平和な喧嘩をしているアリアとキンジを見ながら、ケータイをいじっていた。そのとき、白雪が、手になにかカードのようなものを持ってきた。

「あ、あの、キンちゃん。これ、巫女占いって言うんだけど
巫女さんがするから巫女占いってことか？」

「巫女占い？占いか？」
いや、字の通りだろ。しかもばっちり占いって書いてあるし。

「うん。キンちゃんのこと占ってあげるよ」

「ふーん。なら、やってもらおうかな。一真もどうだ？」

「いや、俺はいい。占いってのがどうも好きになれなくてな。ワ
イ」

俺はキンジにそう言うと、再びケータイをいじりだした。

「キンちゃんは何を占ってほしい？恋愛運とか、金銭運とか、恋愛
運とか、健康運とか、恋愛運とか」

おい、白雪。恋愛運って三回も言ったぞ。どんだけキンジの恋愛運
知りたいんだよ。

「じゃあ、将来のことを占ってくれ」

「チィ」

あれエエエエ！！？なんか白雪から舌打ちが聞こえた気がするんだけどオオオオ！！？白雪は、カードを机の上に並べ、占い始めた。カードを何枚か白雪が返していると、急に強張った顔つきになった。なんだ？

「どうした？」

キングジが、そんな顔をする白雪に話しかける。

「え、う、ううん。総運、幸運です。よかったねキンちゃん」
何が良いんだかいまいちよく分からん。

「もうす少し具体的に教えてくれないか？」

「黒髪の女の子と結婚します。なんちゃって」
それ自分のことだろ。きっと。

「次はあたしを占いなさい！！」
ほおー、アリアもなんだかんだ言ってやっぱり女の子だな。占いが好きだなんて。

「総運、ろくでもないの一言に尽きます」
適当とかいうレベルじゃねエエエエ！！！！どんだけアリアのこと嫌ってんだよ！！？

「ちょっと！ちゃんと占いなさいよ！！」

「私の占いにケチ付けるつもり？」
いやそんな占い方されたら、誰だって怒るって。

「あなた・・・人が下手に出てりゃいい気になって！」

「なら、ボディーガードやめれば？」

白雪のその言葉を聞き、アリアはまたも、歯を食いしばりながら、白雪を睨んでいるのであった。こんな調子で、魔剣デュランダルが襲ってきたらどうすんだよ？

二十五本目 魔剣の存在（前書き）

アクセス3万突破！！皆様のおかげでございます！！本当に感謝しています！！

二十五本目 魔剣の存在

放課後

帰りの白雪の護衛をキンジに任せ俺は、夕焼け空の武偵高の屋上で一人、綾香にケータイを掛けた。

『はい。川嶋です』

「川嶋。単刀直入に聞く。デュランダル魔剣はいるのか？」

『ええ。存在するわ』

「本当か！！？」

川嶋の言葉に俺は、思わず声を上げてしまった。

『うるさいわね。耳元でそんな大きな声出さないで』

「あ、ワリイ」

『話を戻すけど、デュランダル魔剣は存在するわ。そして、デュランダル魔剣は、イ・ウーの一員』

やっぱりな。

「特徴とかは何か知ってるか？」

『コレと言ったモノはないけど、これだけは言えるわ』

「何だ？」

デュランダル ステルス
『魔剣。奴は超能力者よ』
デュランダル ステルス
何！！！？魔剣は超能力者なのか！！？

『だからうるさいってば！！切るわよ！！』
だあー！！それだけはご勘弁を！！

『まったく。そう。魔剣は超能力者。しかも、氷の能力を扱っわ』
デュランダル ステルス
氷か。

「分かった。ありがとうな、川嶋。また困った時は頼むわ」

『なるべく掛かってこないことを願っわ』
はいはい。俺はそう言い、ケータイを閉じた。ふと空を見上げると、夕日が太陽の様に真っ赤に燃えながら、西の空に落ちていた。

「さて、俺もそろそろ帰るか」
俺はそう呟き、屋上の扉から出て行った。

星空が浮かぶ空の中、俺は、キンジの部屋のある寮の階段を登っていた。

デュランダル ステルス
「魔剣は超能力者か・・・」

俺は、川嶋から聞いた魔剣の情報をまとめていた。そのとき、俺の目にある人物の姿が映った。デュランダル
その人物は、緋色のツインテールを風になびかせながら歩く、どうみても小学生にしか見えない身長を持った、俺のご主人様、アリアだった。

「アリア」

俺は、後ろからアリアに声を掛けた。

「一真」

俺の声に気づき、緋色のツインテールが動きながら、俺の方を向くアリア。

「あんたも、今帰ったところ？」

「そうだけど、アリア、その袋はなんなんだ？」

俺は、アリアが両手で抱えている大きな袋を指した。その袋の先端からは、丸みのあるものが顔を覗かしていた。

「モモまんよ」

「ええ！！？多すぎだろ！！？」

「何言ってるのよ。これくらい全部食べれるわよ？」

「お前の胃袋はブラックホールか！！？」

そんな会話をしながら俺とアリアは、キンジの部屋のドアを開けた。そして、俺はその場で絶句した。なぜなら、目の前に上半身裸のキンジと巫女装束が脱げ掛けている白雪の二人が、抱き合っていたのだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・何してるのキンジ」

俺は、軽蔑のこもった眼で、キンジを見た。

「一真！！？ちがつ！！これはだな！！」

キンジ。そんな言い訳はどうも、ご主人様は聞いてくれないみたいだな。俺は、隣にいるアリアに目を向けた。思った通りアリアは、漆黒のガバメントと純白のガバメントを抜き、キンジに向けていた。

「こ、この！！エロ武偵イイイイイイイイイイイイ！！！！！！！！！！！！」

アリアは、その言葉と共に、キンジに向かって二丁のガバメントを発砲していく。

「ちよっ！！？待って！！！！のああああああああ！！！！！！！！！！！！」

キンジは謎の絶叫と共に、ベランダから向かいの海に落ちていった。
あゝあ。風邪引くぞ？その姿だったら。

「頭冷やしなさい！！！！浮き輪はあげない！！！」

アリアは、キンジに向かってそう言つと、ベランダの窓を閉めてしまった。しゃーねー。後で拾いにいこ。

二十六本目 アリアの魔剣対策

昨日アリアに海に落とされたキンジは、俺の予想通りベッドで横になっていた。

「どうだ？今の気分は？」

俺は、ベッドに横たわるキンジに嫌味っぽく尋ねる。

「いいわけ・・・ゲホッ！ゲホッ！・・・ないだろ」

昨日あんなことした天罰だとも思え。

「とにかく。お前は今日ゆっくりしてろ。護衛は俺がお前の分までやってやるからさ」

「ああ、ワリィ」

「気にすんな。じゃな」

俺は、キンジにそう言い、キンジのいる部屋から出て行った。

翌日の昼休み。キンジの奴の風邪も、なんでも白雪が買ってきてくれた特濃湯根湯を飲んだらすっかり治ったみたいだ。そして、俺とキンジは今、屋上で話をしている。

「なあ一真」

「何？」

「魔剣デュランダルつて、いると思うか？」

「さあ？俺はどっちゃかって言うといてほしいな」

俺は、魔剣デュランダルの存在を綾香から教えてもらっているが、キンジにはあえて知らないフリをした。そのとき

ガンー！！

痛つてエー！！突如、俺の頭上とキンジの頭上に、黒いスニーカーが降ってきた。

「あんたち！！なにやってんのよー！！」

俺は、頭を抑えながら、その声の方を向いた。そこには、緋色のツインテールに、小学生並の身長に、赤いラインの入ったノースリーブを着た、アリアだった。

「何すんだよ!!」

キンジは、アリアに向かって怒鳴る。

「あんたちこそ!!なに白雪の護衛サボってんのよ!!」
いや、お前もサボってるだろ!?

「大丈夫。レキに任せたわ」
おい。

「まったく。・・・白羽取り、一回くらい成功させなさいよね」
いきなり襲ってきてそりゃねえだろ。

「無茶言うな。だいたい、俺は病み上がりなんだぞ」
キンジが、頭を抑えながら、アリアに言う。

「そ、それは悪かったわよ。ちょっと、やりすぎちゃったかなって
思ってたし」

へえー。アリアがキンジの心配するなんてなあ。

「まあ、それはいい。白雪の買ってきてくれた「特濃湯根湯」のお
かげで、治ったしな」

キンジがアリアにそう言うと、アリアの顔が、驚愕の表情になった。
?どうしたんだ?

「え?あ、あれは!あたし」
?

「?なんだよ?あれはマイナーな薬だけどな、俺には効くんだよ」

「・・・白雪が・・・そう言ったの?」

アリアは、トーンをかなり低くした声で、キンジに尋ねた。おいおい、まさか、アリアの奴が・・・

「?ああ」

「あ、そう!まあ、治ったんならいいわ。あたしは貴族だし、そういうの我慢するから」

この反応・・・・・・・・やっぱり

「なんだよ。言いたいことがあるならはつきり言えよ」

おい、キンジ。気づけよアリアの言いたいことを。

「なによ!よかったわね!白雪に看病されて!!白雪!!白雪!!白雪!!あんたにいいことするのはいつも白雪!!もうあんた、白雪と結婚しちやえば!!?」

アリアの奴。やけくそになってやがるな。

「なんだよ!!何キレてんだよ!!」

キンジの奴も、結婚なんて言われて頭に血が上ってやがる。

「キレてなんかない!!」

「あのな!!この際だから言っておくが!!パートナーの方針でやってたけど、白羽取りの訓練なんてもうやめだ!!あんな達人技なんか、無理だ!!」

「ダメよ！！魔剣は、鋼をも切り裂くと言われているの！！だから
！！いざ白雪が襲われた時に」

「いざつ、て、この数日、白雪にはなんともなかったじゃねえか！
！前にも言ったが！！魔剣なんてモンはいねえんだよ！！」

「いるわ！！あたしの勘では、もうすぐそこまで迫ってきてる！！」

「なんでそんなことが言いきれるんだよ！！白雪は大丈夫だからお
前はどつかいけ！！お前はなんでも思い込みの独断で事を進めすぎ
なんだよ！！いいか！！俺たちが普通で！！お前がズレてんだよ！
！」

キンジのその言葉にそうとうショックを覚えたのか、アリアは後ろ
に、一步、二歩と、後ずさりしていった。

「あんたも・・・あんたもそういうこと言うんだ！！みんなあたし
のこと分かってくれないんだ！！みんながあたしのことをホームズ
家の欠陥品って呼ぶ！！あんたもそうよ！！あたしには分かるの！
！白雪に魔剣が迫っていることが！！でも、それを曾お爺様のよう
に論理的に説明できないのよ！！だからいつもあたしは独奏曲。ど
うして・・・どうしてあんたも信じてくれないのよ！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ああ、分かんねえよ！！いも知れない適が迫ってるなんて、そん
なの信じられるか！！何度でも言ってる！！魔剣なんていねえん
だよ！！」

バキッ！！

「！！！！？」

俺は、そんなキンジを、気づいていたら右手で殴っていた。

「見損なったぞキンジ。お前、アリアのパートナーになるって言っ
たんだろ。だったら・・・」

俺は、俺が殴った頬を抑えて倒れているキンジの胸倉を掴んだ。

「だったらアリアが言ってることも少しは信じてみやがれ！！ア
リアはお前が白羽取りを出来ると信じてくれてんだぞ！！それとも
！！お前はそんな簡単なことも出来ないのか！！？どうなんだ！！
？何とか言ってみろよ！！？ああ！！？」

俺は、キンジにそう叫んだがキンジは、俺から目を反らしやがった。

「チィ！アリア！！」

「な、なに！？」

「こんなヘタレほつといて行くぞ。いつ白雪が魔剣デュランダルに襲われるか分
からねえからな」

俺は、キンジを投げ捨て、屋上から出て行った。

屋上から出た俺とアリアは、廊下を横に並んで歩いていた。

「ねえ、なんで、信じてくれたの？」

アリアが、俺にそんなことを聞いてきた。

「奴隷は主人の言うことを信じる。たとえそれが、偽りだったとしてもな」

「・・・・・・・・・・ありがとう。一真」

「いいさ。それより、作戦は予定通りだな」

「ええ。少しキンジにはイラってきただけど、予定通りに進めるわ」
了解。俺は、アリアとそんな話をしながら、目的もなく歩いていった。

二十七本目 レキとのデート？

「・・・・・・・・ちつと、やりすぎちゃったかな・・・・・・・・」

揺れる電車の中で、俺はそう呟く。

「何をですか？」

その俺の呟きに耳を傾けてくれる彼女は、レキだ。なぜ俺とレキが電車の中にいるかというと、長くなる。昨日、アリアと分かれたとき、俺は突然思い出した。「あ、明日って祭りやるじゃん」と。そして、前にレキと楽しい一日を教えるという約束をしたのを同時に思い出し、すかさずレキに連絡したところ、見事OKをもらい、今こうして祭りの場所まで向かっているのだ。しかし、レキの奴。こんな日まで狙撃銃もってくんないよ。

「いや、キンジと少し口喧嘩しちゃってな。それで俺が頭にきて・・・・・・・・その・・・・・・・・キンジを・・・・・・・・殴っちゃったんだ。思いつきり・・・・・・・・」

確かにアリアのことを信じなかったキンジには頭に来ていた。けど、殴るまではなかったんじゃないかと後になって思いは始めた。あいつだって、自分なりに苦しんでるだろうに・・・

「大丈夫だと思います？」

「キンジさんは、そんなことで一真さんを嫌ったりはしません」
レキ・・・

「ありがとう。おかげで少し元気になった」

隣に座っているレキに俺は、礼を言った。そうこうしているうちに、

電車が、目的地の駅に着いた。

「レキ。行こっか」

「はい」

レキは俺にいつも通りの声で返してきた。俺たちは、電車から降り、祭りの会場まで向かった。

祭り会場

そこには、入り口から見る限り、人、人、人のオンパレードだった。す、すげえな、この人数。俺は、溢れ返る沢山の人を見て、驚いた。

「レキ。はぐれないように注意しろよ?」

俺はレキにそう一言良い、歩き始めた。後ろを振り返るが、レキはちゃんと着いてきていた。まるで、ロボットの用に静かに……。お!カキ氷あんじゃん!

「お姉さん!カキ氷二つ!一つはイチゴ!もう一つはメロン!」

「はい。うふふ、お兄さん、こんな可愛い娘連れて……。もしかして、デート?」

ハハハハ!俺とこんな美人さんが釣り合うわけないでしょ?

「うふふ、そうかしら?お兄さん、結構良い男よ?」

お世辞が旨いっすね!ハハハハハ!!

「はい。お待たせ。サービスに少し量多目にしといてあげたわ」

お!それはどうも。俺は、カキ氷屋台のお姉さんからカキ氷を受けとり、レキの方を向いた。

「レキ。どっちが良い?」

「では、こちらで」

そう言うレキは、メロンを取った。お!レキの好きな味発見つと俺は、そんなことを思いながら、再び歩き始めた。それから俺たちは、祭りを堪能した。金魚すくいに輪投げ、焼そば、紐くじ等をしていった。中でも射的をしたときは俺も驚いた。なんと、レキは射的の景品全てを打ち落としたのである。射的の親父は「景品の一番

高いPS3やるから！！全部は持って行かないでくれエエー！！」
と、泣き叫んでいた。レキはそれでいいと、PS3を受け取った。
というか親父、そのみつともない顔、早く直しといった方がいいぞ。

「一真さん
ん？」

「どうぞ」

レキが渡してきたのは、先ほど親父から貰った、PS3だった。

「なんでだ？コレはお前が取ったものだろ？」

「私はこういうものを使いません。一真さんなら、使うかと思いましたが」

そりゃまあ・・・使っけどさあ・・・

「でしたら」

レキはそう言いながら、俺にPS3を押してくる。んー・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・そうだ！

「分かった。お前からのプレゼントと言うことでコレは受け取る。
なら、次は俺の番だ」

俺は、そう言っと、レキの手を握り、ある場所まで走った。

「ここが、俺のプレゼントの渡す場所だ」
俺がそう言うところは、とある広場だ。

「ここは？」

「まあ待ってろって。もうすぐ」

「

ドカン!!

俺の声が、夜空に上がるとつもなくデカイ花火によってかき消された。そう、ここは、花火を見るための特等席なのだ。

「どうだ？俺からのプレゼントは？」

隣で、空に顔を上げているレキに尋ねた。レキは無言で、コクリと頷いた。……うれしいって受け取っていいのか？

「レキ」

色とりどりの鮮やかな花火が沢山上がる中、俺はレキを呼んだ。

「はい」

「どうだった？今日は楽しかったか？」

俺の質問にレキはまたコクリと頷いた。レキ、せめて喋ろうぜ。俺は、そんなレキに苦笑いしながら花火を見上げていた。

二十八本目 氷の魔女

昨日の祭りも終わり、今日からアドシールドが始まった。アドシールドとは、前にも話したが、一種の祭りのようなものだ。このアドシールドには、良い点と悪い点が存在する。良い点は、アドシールドで代表に選ばれたりすると、武偵大学に推薦で合格、就職も安定と言った、後々の進路に繋がる良い結果になるからである。だが、悪い点と言えば、代表に選ばれていない武偵高の生徒全員が必ず、なんらかのアドシールドの手伝いをしなければならないということだ。俺は、代表に選ばれたが辞退し、一番楽な受付を担当することになった。

「ふあゝあ。結局、魔剣の奴、来なかったな」
デュランダル

欠伸をしながら、俺は一人呟く。白雪の護衛をしてもう二週間。ここまでして来ないというとは、本当にいなかったのか？……いや、それはないな。川嶋の情報にミスがあったことなんて一度もないし……だあー！！分かんねえ！！

「とにかく！今日で白雪の護衛も最後だ！！今日で何も起きなきゃそれでよし！！」

俺が、そんなことを言っていると「ピリリリ！！」俺のケータイがなり響いた。誰だ？俺は、ケータイをポケットから取り出し、出した。

「はい？」

『一真！！』

声の主は、アリアだった。

「なんだよ？そんな大声出して」

『白雪が失踪した！！』

な！！？嘘だろ！！？

『こんな時に嘘ついてどうすんのよ！！とにかく！！今から地価倉^{ジャンクシ}庫^{ヨシ}に向かいなさい！！あたしも直ぐに行くわ！！』

「分かった！！」

俺はケータイを切り、その場から飛び出した。

「クソツタレ！よりもよって武偵高三大危険地帯最大危険地帯じやねえか！！そんな所をパーティー会場にしやがって魔剣^{デュランダル}のヤロー！！」

白雪が失踪したと言うことは、キンジの奴も地価倉庫^{ジャンクシヨ}に向かつてるはずだ！！裏キンジ状態じゃないあいつに一人は危険すぎる！！間に合えよ！！

キンジ side
地価倉庫^{ジャンクシヨ}。そこは、武偵高三大危険地帯最大の危険地帯だ。地価倉庫^{ジャンクシ}には、様々な火薬が並んでいる。つまり、こんなところで銃を使えば火薬に導火し、一瞬であの世逝きだ。息を殺し、暗闇の地価倉庫^{ジャンクシ}の中を、兄さんの形見である、「バタフライナイフ」を持ち、物陰^{デユラ}に隠れる。物陰から見る視線の先には、白雪と、姿の见えない魔剣^{ンタル}がいた。

「私に続け（フォロミー）白雪。お前をこの世の天国、イ・ウーに連れて行ってやる」

イ・ウー！俺は、その単語を聞いたとき、手が震えた。兄さんを、兄さんを殺した組織！！

「だが、一つ誤算が生じた。お前は、奴を呼んでいる」
な！！？俺に魔剣^{ヤツ}から、明確な殺気が飛んできた。クッ！こうなりや！！

「白雪！！逃げろ！！」
物陰から叫びだしながら、俺は、バタフライナイフを構えた状態で、

デュランダル
魔剣に向かう。

「ダメ！！逃げてキンちゃん！！武偵は！！超偵には勝てない！！」
白雪の言葉に続くように、俺の足元に銀色の小剣が突き刺さった。
な！？俺は、思わず一步下がった。だが、これが命取りだった。

「ラ・ピュセルの枷」
デュランダル
魔剣の声と共に、さっき投げられた小剣から、氷が俺のいる地面を
覆いつくしていった。くそっ！体が動かねえ！！

「や、やめて！何する　　うつ！」
ガチャ、ガチャと、金属音が白雪の方から漏れる。白雪！！俺は、
体を動かそうとするが、びくともしない。

「他人の心配をしている場合か？」
は！！！？その声と共に、俺に一本の小剣が勢いよく迫ってきた。や
ばい！！俺は、死を覚悟し、目を瞑った。だが、

ガキン！！
突如、金属音が響いた。よく見ると、小剣が弾かれていた。それと
同時に、暗闇が光を取り戻した。な、なにが！！！？困惑している俺
の目の前に、良く知る人物の影があった。

「おいおい、そんなんで護衛が務まるのか？」
一人は、カラスのような黒い色の髪をして、その手には一本の漆黒
の刀が握られていた。

「まあ、バカキンジにしては上出来だわ」
一人は、緋色のツインテールをしたアニメ声の持ち主。手には、一
本の小太刀が握られていた。

「どうも」。僕たち武偵です」

デュランダル「魔剣！！未成年者略取未遂の容疑で逮捕するわ！！」

「アリア！！？一真！！？」

デュランダル小太刀を握った少女アリアと、漆黒の日本刀を握った少年一真は、魔剣に向かって、刀を向けていた。

オニキリ「その刀……「鬼切」か？」

鬼切？

「へえー。よく知ってるなあ。この刀のこと」

おい待てよ一真！？鬼切！？一体何のことだ！？

「そいつは後で教えてやるよ」

一真はそう言うのと、俺の回りに張っていた氷に漆黒の刀を突き刺し、氷を粉々に砕いた。

「やはり……その刀はかの第六天魔王「織田信長」の魂が宿
っているとされている、霊刀「鬼切」……」
「イ！やっかいな！」

何がなんだか分けが分からない！鬼切！？それに信長の魂が宿った刀！？このときの俺の頭は今まで以上に混乱を覚えたときだった。

デュランダル「さてと、そろそろ終幕にしようか。魔剣さん」

一真はそう言いながら、魔剣に漆黒の刀、鬼切を向ける。一真……
・・お前は何者なんだ？

二十九本目 救出

「さてと、そろそろ終幕にしようか。魔剣さん」
デユランダ
漆黒の刀、鬼切を魔剣に向け、俺は言い放つ。
オニキリ デユランダ

「ふん。それで勝ったつもりでいるのか？」

デユランダ
魔剣はそう言くと、性懲りもなくまた小剣を投げて来た。俺は、それを天照で軽く受け流す。視線を魔剣に戻すと、姿が消えていた。
デユランダ

「逃げたな」

「ええ。それより、早く白雪を見つけるわよ！」
ジャンクシオン
アリアの声に続くように、俺たちは地下倉庫の奥に向かった。

キンジ side

「白雪ー!!」

くそっ！一体どこにいるんだ！？早く見つけないと！！

「キンジー！あれ！！」

一真の指す方向には、鎖で柱に括りつけられた白雪がいた。

「白雪ー!!」

俺は、すぐさま白雪に駆け寄る。

「キンちゃん、カズ君、アリア」

まってるよ！！今解いてやるからな！！そう言っただけ俺は、鎖を解き始めるが、クッ！ビクともしねえ！！

「ん……な！！？おい！！海水が流れてきやがった！！」

な！！？海水だと！！？魔剣のヤロー！！ここで俺たちもろとも消すつもりか！

デュランダル

「こうなったら魔剣から鍵を奪う方が先決よ！キンジー！一真！あんな

デュランダル

たちは先に行って魔剣を「いや！！お前らが先に行ってくれ！！」

な！？」

アリアの言葉を押し潰して、俺は言う。

「俺が！！バカだったから！！今白雪が死に掛けてるんだ！！だから

ら！！それは俺が助けなくちゃいけない！！それが！！俺の！！俺
なりのケジメだ！！」

「了解。アリア、後はコイツに任せようや」
一真！！

「何言つてんのよ！！あんたたちが先に！！」武偵憲章2条。仲間
を信じ、仲間を助ける。だろ？」
一真・・・

「・・・分かったわ！でも！絶対助けなさいよ！」
ああ！！俺が、二人にそう返事を返すと、二人は魔剣デュランダルを追いに、上
へ向かった。やべえ！海水がもう胸の位置まで上昇してやがる！早
く解かねえと！俺は、海水の中に頭をつけ、白雪を解こうとピツキ
ングをするが、開かない。

「クソツ！どうすりやいいんだ！？」
もう時間がないってのに！！このままじゃ！！

「キンちゃん。もう行つて」
な！！？

「私、キンちゃんには死んでほしくない」
バカ言うな！

「星伽の巫女は守り巫女。誰かの為に、身も心も捧げる。私を置いて
キンちゃんが行けば、キンちゃんは助かる」
何言つてやがる！！！！お前を置いて行けるか！！

「いいの。私が死んでも。誰も、誰も悲しまない」

誰も悲しまないわけないだろ！！アリアや！！一真！！俺も悲しむ！！だから！！

「キンちゃん……その気持ちだけで、私は幸せだよ」

「あきらめるな！！絶対！！絶対に俺が」

俺が続けるはずの言葉は、海流によってかき消された。白雪がどんな遠くなっていく。クソッ！！俺は！！アリアも信じれず身勝手なことばったかして！！今白雪が死に掛けているところを見捨てるのか！！？ふざ、けんなアアアアアア！！！！俺は、流れに必死に逆らい、白雪の元までたどり着く。そして

「！？」

白雪の唇に、俺の唇を重ねた。ああ……血が熱く……なる……ヒステリアモードに。俺は、閉じた瞳をゆっくりと開き、鍵穴を見た。分かる！！分かるぞ！！どうすればいいのか！！手に取るように分かる！！まるで、最初から勝ちの決まっている試合をしているように。俺の手が動き、先ほどまで苦戦していた鍵穴が、意図も簡単に崩れた。

「「プハア！！」」

白雪を引き上げ、水面に出した。

「白雪。大丈夫か？」

「う、うん／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／
そうか。なら、次は魔剣だ。」

二十九本目 救出（後書き）

次回！！魔剣編決着の予定！！

三十本目 決着（前書き）

予定通りにいきませんでした（汗

三十本目 決着

キンジと分かれた俺は、アリアと二手に分かれ、使い古されたコンピューターの山の中を探し、今しがた、アリアと合流したところだ。

「アリア。いたか？」

隣で純白と漆黒のガバメントを構えるアリアに尋ねる。

「いないわ。そっちは？」

「ダメだ」

クソツ！奴はどこに！！？

「一真」

なんだよ？

「しっ！」

アリアが、人差し指を自分の口元に立てながら、言った。俺は、息を殺し、耳を済ませた。

バシャ！バシャ！バシャ！バシャ！

水を跳ねる音？デユランダル魔剣か！！？俺は、アリアとアイコンタクトをし、音の聞こえる方へ鬼切を向けた。

音は徐々に近づいてくる。そして、足音が止まり、目の前に現れた人物は

「「キンジ！」」

キンジだった。俺とアリアの声が重なり、キンジの名を叫ぶ。

「キンジ。よかった、無事だったのね」

「心配掛けて悪かったね。俺の愛しい子猫ちゃん」

このキザな喋り方……裏キンジか。キンジの言葉にアリ
アは、真っ赤に燃える太陽のように顔を赤くさせる。

「キンジ。お楽しみのところ悪いが、白雪は？」

キンジとアリアの仲に割って入りながら、キンジに尋ねた。

「あっちだ」

キンジが指した方向へ、俺たちは向かった。

キンジの指した場所に白雪が、体中を水で濡らした状態で、床に座り込んでいた。

「白雪。大丈夫？」

アリアは、即座に白雪の近寄る。

「うん、ありがとう。アリア」

なんだ？違和感があるような……

「白雪。唇大丈夫か？」

キンジが、白雪に疑いの眼で見ながら、白雪に尋ねる。

「え……あ……うん。大丈夫」

「アリア逃げるー！」

キンジはその言葉と同時に、ベレッタから一発発砲した。チィ！やっぱりか！！キンジに続くように鬼切を鞘から抜くが、白雪の刀が先にアリアの首筋に当てられる。クッ！遅かったか！

「しら……ゆき？……どうしたのよ！？」

アリアの言葉を見無視し、白雪はアリアの手に向かって「ハア」と、息を吹きかけた。すると、アリアの手が、見る見るうちに凍ってしまった。アリアは、思わずガバメントを離してしまう。

「アリア！！そいつは魔剣だ！！」
デューランド

俺の声に続くように白雪は、アリアのもう片方の手も凍らせてしまった。ついにアリアの手から、武器が落ちた。クソツタレ！いつから入れ替わってやがったんだ！！？

「あんたが、^{デュランダール}魔剣！！」

凍った手を押さえながらアリアは、^{デュランダール}魔剣を睨みつける。

「その名で呼ぶな。人に付けられた名前は好きではない」

「うるさい！！ママに着せた冤罪の107年分はあんたの罪よ！！
捕まえて絶対に償わせてやる！！」

「フツ。この状況で言えた口か？」

バカにしやがって！

「ホームズ・アリア。たかが150年の歴史で名前を誇るなど、我ら一族の歴史に比べれば滑稽な話だ。我ら600年の歴史を持つ、ジャンヌ・ダルクだな！！？」

「嘘よ！！ジャンヌ・ダルクは十代で死んだ！！子孫なんて！！」

「あれは影武者だ。我ら一族は、敵を欺き、歴史の闇に影を潜めてきた一族。私はその30代目ジャンヌ・ダルクだ」

「「アリア！！」」

俺は鬼切を、キンジはベレッタを構えるが、^{デュランダール}魔剣からアリアに発せられる殺気を感じ、動けなかった。おそらく「動けばアリアは死ぬ」と言う警告だろう。

「キンジ・・・あたしに構わず撃ちなさい！！」

アリア。今のキンジにそれは無理だ。いや、表の方でも無理だ。

「フッフ、まずはそのおしゃべりな口から凍らせるか」

デュランダル 魔剣の唇が、無抵抗のアリアへゆっくりと近づく。やべえ！！アリアの体内を直接凍らせるつもりか！！

「やめる！！」

キンジは叫び、ベレッタを構える。だが、その瞬間、どこからか鎖が放たれ、デュランダル 魔剣の所持していた刀が、手から離れる。今がチャンスだ！！俺は床を蹴り、デュランダル 魔剣目掛けて、鬼切を振るった。だが、デュランダル 魔剣はそれを後ろにかわした。

デュランダル 「魔剣！！私の仲間はこれ以上傷つけさせない！！」
いつもとは違う張りのある声で、白雪は、右手にデュランダル 魔剣から取った刀を握り、宣言する。へっ！ご本人の登場だな！！

「どう！これで四対一！！あたしたちの勝ちよ！！」
デュランダル アリアが、魔剣に向かって高らかに宣言する。だが、ジャンヌは顔色一つ変えず、むしろ笑っていた。

「どこまでもおめでたい奴らだ。しかし、お前が命を張ってまでアリアを助けるとはな、白雪」

ジャンヌはそう言うと、懷から何かを取り出し、床に叩き付けた。その瞬間、あたりは白い煙で包まれた。発煙缶か……。

「白雪。一つ聞いて良いか？」

白煙が包む中、キンジは、白雪に話しかける。

「アリアのロッカーにピアノ線を仕掛けたか？」

「え？そんなことしてないよ？」

なるほど。ジャンヌは白雪に化けて武偵高に進入してた。そして、

アリアをそのときに消そうと企んでいたわけか。

デュランダル
「魔剣！！出てきなさい！！」

アリアは、床に落ちたガバメントを拾いながら叫ぶが、手に痛みが走り、ガバメントを落としてしまう。

「アリア。手を貸して」

白雪はそう言いながら、アリアの手をとる。

「少ししみるけど、我慢して」

その言葉に続いて、白雪の手が光りだし、アリアの凍った手を治した。

「キンちゃん、カズ君。アリアを守ってあげて。アリアにしたのは応急処置みたいなもの。だから、完璧には治ってないの」

アリアの手を覗き込むと、少しばかり、氷が残っていた。ジャンヌの力も相当ってことか。俺はふと上を見上げると、辺り一面が、見るうちに凍っていき、神秘的な場所に移り変わった。いよいよ直接対決か。

「ジャンヌ。私は誰も傷つけたくない。たとえそれが、あなただとしても」

「笑わせるな。原石に過ぎぬお前が、イ・ウーで研磨された私を傷つけることなどできん」

その言葉と共に、ジャンヌは姿を現した。雪のような銀髪に、細い体に西洋の鎧を身につけたその姿は、まさしく「騎士」。その右手には、西洋の大剣「魔剣」デュランダルが握られていた。

「ジャンヌ。私のGは、グレード17なんだよ」

グレード
G。それは、超能力者の強さを表す数字だ。数字が高ければ高いほど、強い超能力者ということだ。しかし、その分危険も伴う。

「ブラフだ。G17など、世界に数人としていない」
世界最強の超偵「成瀬レインハート」。彼のGは、30を越すとされている。つまり、その約半分の力を持つ白雪は、相当の実力者ということになる。

「それに、お前は星伽を裏切れない。それがどういう意味が分かっているからな」

「それはいつもの私。でも、今の私は違う。今の私は、星伽のどんな固い掟だって破れる。そんな人の存在の側にいる」

白雪の声は、いつもの声とは違い、強い信念のこもった声だった。

「なに？」

「キンちゃん。ここからは私を見ないで」
白雪の声が、急に弱くなった。

「私、これから星伽に禁じられた技を使う。でも・・・それを見たら・・・キンちゃん私のこと・・・嫌いになっちゃう・・・」
先ほどの強く覇気のあつた声が、弱々しい声に成り下がった。その目には、涙が浮かんでいた。

「白雪。安心しろ。俺がお前を嫌いになる。それだけはない。絶対にな」

どうやら白雪。お前の想い人は、そんなちっぽけなこと微塵も思っていないみたいだぜ。キンジの言葉を聞き、白雪は吹っ切れたのか、顔に笑みが戻った。

「すぐ戻ってくるからね」

髪に掛けてあった純白のリボンを取ると、白雪の目つきが変わった。まるで、巢の中にいる子どもを守る、母親のように。

「ジャンヌ。もうあなたを逃がすことはできなくなった」

「？」

白雪の言葉に、ジャンヌは首をかしげる。

「私たち星伽の巫女は、この力をずっと継いで来た。2000年もの長い時を」

白雪は、刀を上へ上げ、刀に入れる力を強めた。すると、次の瞬間、刀の先端が燃え、一瞬にして刀を飲み込んだ。例えるなら、太陽。真っ赤に燃えるその姿は、太陽そのものだった。

「白雪と言う名は本当の名前を隠す伏せ名。私の本当の名前は、緋巫女！」

その言葉が終わると、ジャンヌに向かって飛び掛る。

ガキイイン！！

東洋の刀と西洋の剣がぶつかり、火花を散らす。これが、超能力者ステルス同士の戦い……

「無駄よ！！この「イロカネアヤメ」に斬れないものなんてない！！」

「それはこちらの台詞だ！！聖剣「デュランダル」に、斬れぬものなどない！！」

ジャンヌが、白雪を押し返す。二人は、互いの魂をぶつけあってい

る。そこに、付け入る隙など一部もない。お互いに斬れぬものな
い刀と剣で斬りあっている。まさしく矛盾の戦い。二人の気迫は、
遠くからでも伝わるほどの凄まじいものだった。

「キンジ、一真。加勢するわよ。この戦い、そう長くは持たない」
そう。超能力者^{ステルス}は、能力を使う変わりに、精神力を消耗する。二人
は恐らく、全力の力を使っている。つまり、戦闘はもう10分も持
たないというわけだ。

「「ああ」」

俺は鬼切を、キンジはベレッタを構え、そのときを待った。

「ジャンヌ。もうあなたの負けだよ」

ジャンクシオン
地価倉庫奥で白雪は、息を切らしながら、ジャンヌに話しかける。

「愚かな。私を狙わず、剣ばかりねらうとはな」

ジャンヌはそう言うが、息は切れていた。

「見せてやる白雪。「オルレアンの氷花」銀氷となり散れ!!」
ジャンヌの言葉に続き、デュランダルが、青白く光っていた。

「今よ!!」

アリアのアリアの言葉に続いて俺たちは、ジャンヌに向かった。

「!ただの武偵ごときがアア!!」

ジャンヌはそれに気づき、こちらにデュランダルを振るった。振られたデュランダルからは、青白い光線がアリアに走っていった。アリアは、それを持っている刀を横に振るった。

パキイイイン!!

ガラスの割れるような音が響き、青白い光線を打ち消した。

「な!!?どういうことだ!!?.....なるほど。
そういうことか!!」

ジャンヌは目を見らき驚くが、すぐさまその理由^{わけ}を理解した。そう、アリアの手には、本来一真の所持するはずの、鬼切が握られていた。ジャンヌの一瞬のひるみを見逃さずキンジは、ベレッタから三発をジャンヌに発砲する。ジャンヌは、それを魔剣^{デュランダル}で受け流し、迫ってくるアリアを避け、キンジに切りかかった。キンジはベレッタをアリアに投げ渡すと、降りおろされたデュランダルを、白羽取りで受

け止めた。

「……!?」

ジャンヌはそれに動揺する。そして

「武器を捨てなさい!!」

キンジのベレッタが、アリアによって突きつけられる。チェックメイトだ。

「もう終わりだぜ。お嬢さん」

皮肉な声でキンジは言う。だが

「お前たち武偵は人を殺めることは不可能。だが、私は違う!!」
ジャンヌの言葉に続き、デュランダルに、氷が張っていく。キンジは予想外の出来事に、驚愕し、顔を引きつらせる。ジャンヌは、勝ちを確信した。だが、それは一人の少女によって崩れ去る。

ほしぎそうてんりゅう ひひのほしぎがみ
「星伽候天流! 緋緋星伽神!!」

黒髪の少女、白雪だ。刀の炎は言葉に続き、さらに赤く燃え上がり、デュランダルに触れた。そして

ガキイイーン!!!

デュランダルは、折れた。折れたデュランダルを見てジャンヌは、啞然としていた。

「デュランダル!! 逮捕よ!!」
アリアが、ジャンヌの手首に、ステルス超能力者用の銀の手錠をはめる。これで、ジャンヌは能力を使えない。

「白雪。もう、俺の前からいなくなるんじゃないぞ」

相変わらずのキザな言葉で、キングは泣きじゃくる白雪を抱える。
ふうー。なんとか護衛は終了だな。

三十一本目 護衛終了

翌日。白雪の護衛は無事終わり、アドシアードも難なく終わった日の午後、俺、キンジ、白雪の三人は、アリアに呼び出され、学園島一高級といわれるレストランに来ていた。なんでも、かなえさんの刑期が短縮したことを祝ってここで打ち上げをするとか。そして、今日のアリアはご機嫌だった。まあ、そうだよな。というかご機嫌じゃなけりゃおかしいはな。

「今日は私の奢りよ！！なんでも頼みなさい！！！」

おーおー気前のいい事で。じゃあ俺は一番高いこの松坂牛のステーキでも頂こうかな？店員に各々の食べるものを伝え、料理を待っている間、アリアと白雪がそわそわしていた。どうしたんだ？

「あ、あのね！」

見事にハモった。おいおい、顔を見合わせれば即喧嘩の二人が意気投合してんな。

「あ、アリアからでいいよ！」

「そ、そっちこそ！」

譲り合いする仲までになるなんてな。

「あ、あのね。キンちゃんにどうしても聞いて欲しいことがあるの。なんだろう？」

「キンちゃんが風邪引いた時に買ってきて薬、あれは、私が買ってきたんじゃないの」
「つーことは・・・」

「あれ買ってきたの、アリアなんでしょ？」

白雪の言葉に、キンジが目を丸くする。やっぱそうか。思えば屋上の時のアリアの態度、おかしかったもんな。

「な、なーんだ。そんなことだったの？大事な話だと思って損しちゃったわ」

アリアが、少し照れくさそうに白雪に返す。

「私、最低な女だよね。でも、最低な女のままじゃ嫌だったから・・・本当にごめんなさい！」

アリアに頭を下げて謝る白雪。ハハッ、アリアの奴。思いもよらないことで少しテンパってるな。

「い、いいわよそのくらい！はい！この話はおしまい！次はあたしの番ね！」

照れくさくなったのか、アリアは無理矢理話を終わらせた。

「あたしね。今回の事件で分かったことがあるの。デュランダル魔剣を逮捕できたのは、私たちが力を一つに合わせて、協力し合ったからなんだって」

アリアもやっと一人じゃなくなってきたって分けか。

「今までのあたしは、自分と自分の力を引き出すパートナーがいればいいと思ってたわ。でも、あたしただけじゃどうしようにもならない敵だっている。だからね！あたしのパーティーに特技を持った仲間が入ることは素晴らしいと分かったの！例えば白雪みたいに、ステルス超能力者みたいなね！だから

アリアの奴。ずいぶん変わったな。やっぱり、みんなというからか？

「白雪！！あんたもあたしの奴隷になりなさい！！」
プツ！キングの奴、思わず口から水噴出しやがった。

「契約は終了したけど、あんたもこれからキングと一緒にいること！！はい、これキングの部屋の鍵」

「おい待てアリア！！」

キングが思わず席から立ち上がる。ハハハハ！！！！やっぱおもしれえわ、アリア。俺はそんな微笑ましい光景を見ながら思った。こんな光景が、ずっと続けばいいな・・・と。

三十一本目 護衛終了（後書き）

次回!! great先生とのコラボです!!

三十二本目 現代の一番隊長

デュランダル
魔剣事件が無事終了した翌日、俺は強襲科^{アサルト}で、日課の千素振りをしていた。

「997!!」

両手に持った鬼切を上下に振りながら、数を数える。

「998!!」

鬼切の振るう音だけが当たりに響く。

「999!!」

額の汗が辺りに飛び散る。

「1000!!」

その言葉に続くように、両手を止める。

「ハア、ハア、ハア、ハア・・・」

いままで十分に得られなかった酸素を、たっぷりと体に入れる。

「ふうー。一日の目標終了っ」と

滝のように流れ出る汗をタオルで拭きながら、俺は訓練室から出て行く。外へ出ると、普段吸っている空気が一段とうまいと感じた。

「さてと、これからどうすっかな」

鬼切を鞘にしまい、一人そう呟いた。そのとき、模擬戦用訓練場の周りに人だかりが出来ていることが俺の目に入った。なんだ？俺は気になり、その人だかりの方へ向かった。俺はそれを掻き分けながら中に入ろうとしたが、逆に押し出されてしまった。

「一体なんなんだ？」

うーん……すっごく気になる。

「あれ？一真先輩？」

突然後ろから声を掛けられた。後ろを振り向くとそこには、茶色い髪 of 両端には白いリボンを付けた少女がいた。ていうーか……

「誰？」

俺がそういつとその娘は怒り出した。

「ひどいですよ！！あたしですよ！！あかりですよ！！忘れたんですか！！？」

ハハハハ！！冗談冗談！！ついからかいたくなってしまったからな！！ちゃんと覚えてるって、あかりちゃん。

「もう……ところで、なんでこんなところに？」

ん？いやこの人だからが気になってさ。これなに？

「この人ばかりは多分大半が総夜君目当てだと思います」
総夜君？誰？

「知りません？沖田総夜。あたしたち一年の中では最強と言われている剣士ですよ」

沖田？まさか……

「はい。新撰組一番隊隊長、沖田総司の子孫です」
沖田総司の子孫か……

「この間やった模擬戦で二年生に勝っちゃったんですよ！！それか

ら総夜君に勝負する人が増えてきて、総夜君の戦いをみたい人たちでたくさんって分けます」

なるほど……しかし、沖田総司の子孫か……おもしろえ！！

「その総夜君と、今から勝負できる？」

「え？」

模擬戦用訓練場。そこで、蒼色の瞳をした黒髪の少年が、自分の刀を鞘にしまおうとしたときだった。

「次は俺と戦ってくれねえ？」

そんな声が後ろから聞こえた。少年は、後ろを振り返るとそこには、少年と同じ黒髪の人物が立っていた。

「あなたは？」

少年は、その人物に問いかける。

「俺は2年A組の東城一真って言うんだ。俺のことは一真で良いぜ！よろしく！」

俺は、「ニカツ！」と歯を見せながら総夜に笑みを見せた。

「1年A組沖田総夜です。総夜と呼んでください」

「じゃあ総夜。戦ったばかりでワリイんだけどさあ、今度は俺と戦おうや」

俺はそういいながら、腰に差してある鞘から鬼切抜き取り、総夜に向けた。

「分かりました。よろしくお願いします、先輩」

そう言いながら総夜も刀を鞘から抜き、向けてきた。

「なんや？次は沖田と東城が殺るんかいな？」

おい蘭豹！！字が違う！！！！

「ならさっさと始めるクソガキ共！！！」

蘭豹の乱暴な口調が合図となり、俺は床を蹴った。俺と総夜の出るタイミングはほぼ同時だった。だが、俺のほうが早い！！俺は鬼切

を総夜の肩目掛けて振った。だが、それを予想していたのか総夜が、刀を前に出し、それを防いだ。

キィインン！！

金属音が辺り全体に響き渡った。漆黒の刀と純白の刀が合わさりながら、火花を散らす。総夜は、刀を引き離すと同時に、刀を構え直した。

「秋月流 一の型 蝉時雨！！」

そう叫び、鬼切を突いてきた。気づくと、鬼切は俺の手から離れ、宙を舞っていた。

「悪いですけど、終わりです！！」

突いた刀を構えなおし、再び俺に向けてきた。

「秋月流 一の型 蝉時雨！！」

繰り出された刀は、俺の喉元目掛けて一直線に向かってきた。

「！！？」

だが、俺はそれを上体を後ろに反らし、かわした。宙を舞っていた鬼切を右手で掴み取り、それを総夜に振るうが、総夜はバックステップを取り、俺と距離をとった。

「なかなかやるじゃねえーか。まさか鬼切が弾かれるなんてなあ」

「俺も驚きましたよ。まさか秋月流が避けられるなんて・・・」

「へっ！そりゃどうも！」

俺は地面を蹴り、総夜に近づいた。そして、右手で鬼切を振るうが、バックステップで避けられる。それを追いかけて、天照を振るうが、

「またもバックステップで避けられる。なにがしてえんだ？」

「おいおい、逃げてばっかじゃ俺には勝てねーぞ」
挑発気味に総夜に言っていると、総夜は笑っていた。

「逃げてなんかありませんよ。ただ、準備をしていただけです」
準備だと？コイツ、まだなにかあんののか？

「これ使うとほぼ体力削られるんですよね。だから、これで仕留めますー！」

「！！？なんだ！！？総夜からとんでもない威圧感が！！？」

「秋月流 四の型 秋雨！！」

その言葉が発せられると同時に、俺は吹き飛ばされた。

ドッゴンー！！

壁に激突し、あたりを砂煙が覆う。

「そこまでやー！勝者ー！沖田総「おいおい、勝手に決めんなよ」
！！？」

その言葉に蘭豹は、総夜は、それを観戦している全員が目を見開いた。

「まだ楽しい試合は終わってないぜ」
砂煙を払いながら、一真が出てきたのだ。

「な！！？秋雨を受けて立ち上がれるなんて！！？」

「ああ。あれはマジで危なかった。本当やられるかと思ったぜ」
そう軽く言うが、実際本当に危機一髪だった。何とかギリギリ避け

られたが、まともに喰らってたらひとたまりもなかった。今年の一年生はおもしれえやつがいるじゃねえか！！

「さて、俺はまだ大丈夫なわけだ。続きと行こうぜ」
俺は漆黒の刀、鬼切の刀身を総夜に向ける。

「いいえ。僕の負けです」
な！！！？どういうことだ！！？

「先ほども言いましたが、秋雨は体力を削るんです。それを凌いだ時点で、僕の負けです」
総夜はそう言いながら、刀を鞘に収める。俺も刀身を総夜から外し、鬼切を鞘に収める。

「凄かったです。さすが先輩ですね」
総夜が近づきながら、そんなことを言ってくる。

「俺なんてまだまださ。お前こそ、将来有望な人材じゃねえーか。自身を持っていいぜ。俺が保障する」

「ありがとうございます。また、手合わせお願いしてもいいですか？」

「おう！いつでも歓迎してるぜ！！総夜！！」
その後俺と総夜はお互いに握手を交わし、模擬戦場から出て行った。

三十三本目 怪盗の帰還

デュランダル

魔剣事件が解決して一週間のたったある日、綺麗な夕焼けを見ながら俺は部屋のソファで一人、ケータイいじっていた。．．．．．
．．．虚しい．．．．．キンジはコンビに行くとか言っ
て出ちまうし、アリアにいたってはまだ帰ってこない。はあ．．．．
．．．虚しい．．．．．

「ただいま」

ん？アリアの奴、帰ってきたのか？

「一真。いる？」

リビングの扉を開けてアリアが入ってきた。あれ？

「アリア。お前ってそんなに胸あったっけ？」

そう。アリアのまな板みたいな胸が、なぜか異様に膨らんでいるのだ。まさか．．．．．

「私はこれくらいあるわよ」

．．．．．おかしい。

「アリア。お前、怒らないのか？」

アリアはこういうことを言つと顔を赤面させ、俺に発砲してくるはずだ。

「何を怒るって言つの？」

この反応．．．．．

「お前、誰だ？」

ソファから立ち上がり、声のトーンを少し落してアリア？に尋ねる。

「あたしはアリアよ？何言ってるのよ？」

「アリアには悪いが、あいつはそんなに胸デカくねえぞ。もう一度聞く。お前、誰だ？」

俺がそういうとアリア？は、顔に笑みを浮かべた。

「あーあ。やっぱりバレちゃった。さっすが一真」

顔に手を当て、勢い良く引つ張ると「ベリベリベリ！」と音を立てながら、アリアの顔と緋色のツインテールを外す。そこにいた人物は、金髪のゆるい天然パーマのかかったツーサイドアップの髪型をした幼顔の女性がいた。

「お前か、理子」

武偵殺しの真犯人である、峰理子がそこにいた。

「そうだよおー！！みんなのアイドル！！りっこりんであーす！」「なにがアイドルだよ。」

「で？何しに来たんだ？ことと次第によってはお前を捕まえるぞ。お前はイ・ウーの一員なんだから」

俺がそう言つと理子は、顔に笑みをまた浮かべてきた。

「残念でしたあー。理子はもうイ・ウーの一員じゃないよあー。クフフ」

イ・ウーの一員じゃないだと！！？

「理子一真たちのせいでイ・ウー退学になっちゃったんだよ？ブンガオガオー！！」

なんだイ・ウー退学になったって！！？あれか！！？イ・ウーは学校なのか！！？

「理子一真に助けてもらいに來たんだあゝ。理子を助けて、かゝずまゝ」

おい！抱きついてくるな！！バランスが！！おわっ！？俺はそのまま理子にソファに倒されてしまった。

「クフフ、ねえ一真。理子とえっちいことしょ？」

そういうことは大人になってからにしない！！だから離れる！！

「クフフ照れちゃって、カーワイイ。理子ね、飛行機の中で見た一真のあの目が忘れられなくなっちゃったんだあ。かゝずま！好き好き、だーい好き」

ばっ！！よせ！！む、胸が！！

「だーめでえーす。ここからはりこりんルートなのでゝす
キンジイイイイイ！！カムバツーク！！

ガシャアアアアン！！！！

おわ！！？窓が吹き飛びやがった！！？つーかあれ！！

「理子！！あたしの奴隷に手え出すき！！」

アリアが來たアアアアアアアアア！！？

「ちょっと、大事なイベントシーンに別ヒロインが飛び込んでくる
う？」

「うるさい！！一真！！あんなにやってんのよ！！」

まで！！これは理子がやってきたんだぞ！！？俺は無実だ！！

「ええ〜？理子の服脱がせようとしたのにい〜？」

「何言っただお前は！！！！ち、違うぞアリア！！！！」
両手を動かし、必死にアリアに訴えかける。だが

「か、風穴アアアアアアアアアアア！！！！」
アリアは、ガバメントを乱射してきやがった。ぎゃあああああああ
あああああ！！！！ちよっ！！！！マジやめて！！死ぬから！！冗
談ぬきで！！

「クフツ」
理子は一回笑うと、アリアに向かって何か投げた。その次の瞬間、
辺りが光に包まれた。閃光榴弾か！！俺はとっさに目を瞑った。
そして、俺の上から理子が離れる感触がした。光は段々と弱くなり、
俺はそつと目を開くと、そこに理子の姿はなかった。逃げたか。

「理子はどこよ！！」
扉の開く音は聞こえなかったぜ。

「なら！！」
破壊された窓に俺とアリアは向かった。辺りを見渡すと、ワイヤー
で屋上に上る理子の姿が見えた。

「屋上か！！」
俺とアリアは、玄関から風のように飛び出していった。

屋上の階段を上る中、ヒステリアモードのキンジと出会った。話によると、理子はキンジの所にも押しかけたらしい。それでヒスツたつてわけか。

「理子!!」

屋上の扉を勢い良く蹴飛ばしたアリア。そこで理子は、コンテナに腰を掛けていた。暗闇に一つだけ光る月の光によって、理子は照らされていた。

「ああ、今夜は良い夜。男もいて硝煙のニオイもする。理子どっちもだーいすきイ」

またその目か。獲物を狩る鷹のような目。

「峰・理子・リュパン4世！！今度こそ逮捕よ！！ママの冤罪を償わせてやる！！」

漆黒のガバメントと純白のガバメントを理子に向け、アリアは言い放つ。

「やってみる。ライミー」

「言ったわねフロツギー！！だいたいよくあんた戻ってきたわね！！ハイジャック犯のくせに！！」

理子は手を口に近づけ顔に笑みを浮かべた。

「そんなことも推理できないのぉ？一真でもできたのに。さっすがダメダメホームズ」

挑発だな。まあ、アリアはこんなしょうもない挑発には・・・

「なんですって！このブサイクリュパン！乗っちゃいました。しかも言い返したし。」

「ああ！！なんだとこのお子様武偵！！」

「何よ！！顔面凶器！！」

「黙れ！！チビ！！」

「うるさい！！ブス」

「チビチビチビ！！」

小学生の喧嘩かい！！？

「一真。そろそろ止める。お前は理子を頼む」

了解。俺は鞘から八咫烏を抜き、一瞬にして理子の付近まで近づき、首に八咫烏を向けた。キンジはアリアの手を止め、人差し指を口元に置いて止めやがった。おいおい、アリアがテンパってるぞ。

「悲しいよ」

いつもと違い、低い声で喋りだすキンジ。さてと、遠山のキンジさんの説得が始まるぜい。

「愛らしい子猫同士の喧嘩を鑑賞するのは俺の趣味じゃない」
俺は別に良いけど。

「一真」

冗談だつて。

「それより、アリア。理子と戦ったらダメだ」
お！さすが裏キンジ。気づいてたか。

「なんでよ！！」

それは俺が説明しよう。

「理子は多分、司法取引してるぜ。だろ？理子」
司法取引を知りたければwikiで調べてくれ。

「あつたりー！！さっすが一真！！理子のことなんでも分かってる
く！！」

どわっ！！？抱きつくなよ！！

「つまり、理子を逮捕したら不当逮捕になっちゃうわけのくす」
俺の影から顔を出しながら人差し指をチツチツと振る理子。

「嘘よ！そんなことに騙されるとでも！」
「やっぱ信じてねえし。」

「嘘じゃねえよ。それに理子は、イ・ウーを抜けてる」

「！！？」

アリア顔が驚愕の表情に染まっていく。どうやらキンジも知ってたみたいだな。

「でも！武偵殺しの冤罪を着せたのは別よ！！理子！！それは最高裁で証言「いいよ」しな…………え？」

「証言してあげる」

「ほ、ほんとに？」

アリアの目がまん丸と見開かれる。まあ、当然だな。

「アリアは、ママが大好きなんだもんね。理子もお母様が大好きだから分かるよ。理子は…………理子は…………ふええええええええええええん！！！！！！」
急に泣き出しやがった。

「ちよつ！！？な、何泣いてんのよ。ほ、ホラ、ちゃんと話さない」

理子の背中をさすりながら理子を慰めるアリア。おいおい、アリア。理子の顔よく見てみる。メッチャ悪い顔してんぞ。

「理子…………アリアたちに負けたからって、ブラドに理子の宝物取られちゃったんだよ」

ブラド？聞きなれない言葉に首をかしげる俺とキンジだが、アリア

だけは、殺気のこもった表情をしていた。

「ブラド？無限罪のブラド？イ・ウーの？2じゃない」
またイ・ウー絡みか。まったく、次から次へと。

「そーだよ。理子、ブラドからお母様に貰った大切な宝物を取り戻したいの。だから、アリア、キー君、一真。理子を助けて」
助けるって、具体的になににするんだよ？

「助けるって、何するんだ？」

あ、キンジと被った。理子はその言葉に涙を拭きながら、こちらを見てニヤリと笑ってきた。

「アリア、キー君、一真。一緒に、ドロボーやろうよ」
はい？

三十四本目 曇天

「たっだいまゝ！みんなゝ！リコリンが帰ってきたよゝ！！」

『オォー！！！！』

なんだこれ？ヒラヒラの魔改造制服を着こなした理子が、教室の扉の前で大きく手を振ると、教室の大半の男女が声を上げた。しかし、みんなのアイドルつてのもこの様子じゃまんざらじゃなさそうだな。不意に隣のアリアを見ると、他所才通りイライラしていた。

「あー腹立つ！風穴地獄にしてやりたいわ！」
どんな地獄だ。

「どんな地獄は分かんがやめとけ」
あ、キンジと被った。

「で？いいのか。理子は俺たちに盗みの片棒を背負わせる気だぞ」
キンジが、他の連中にはれないように耳打ちでアリアに問いかける。

「いいわけないでしょ。しかもリユパン家の任人間と組むなんて」
まあな。宿敵の敵と組むなんぞ、例えるなら悟空とフリーザ様が手を組むみたいな感じだもんな。

「でも、今は状況が状況よ。無限罪のブラドに接触できるチャンスはそうないわ」

「ーか無限罪のブラドの無限罪ってどういう意味よ？イマイチよく分かん。

「でも前科一般付くぜ。お前は良いのか？」

「そこは大丈夫よ。無限罪のブラドがイ・ウーの？2。イ・ウーに法律は効かないの。仮に窃盗罪で逮捕されても起訴まではいかないわ」
なるほどね。イ・ウーは「無法集団」ってわけだ。

「どういうことだ？そもそもイ・ウーってなんなんだ？いい加減教えてくれよ。」

確かに。俺も綾香からは超人的人材を集めた戦闘集団としか知らされてねえからな。

「ダメよ」

「パートナー俺と一真でもか？」

「パートナーだからよ。それに、知ったらあんたたち。消されるわよ」

消される？

「殺されるってのか？」

「それだけならどれだけ良いか。いい？イ・ウーのことを知ると、戸籍、住民登録、レンタルショップの会員登録までありとあらゆるあんたちの情報が消されるわ。そして、この国にいなかったことになる」

マジかよ。大国アメリカが頭を上げられないのも無理ないぜ。

「イ・ウーの情報はイギリスでは王国A級機密、日本でも特級国家機密よ。下手に知れて武装検事や公安0課に追われたい？」
いいや、全力で遠慮する。」

「最悪だ」

店の軒下で一人そう呟く。そうとしか言いようがない。帰り道を歩いていたら突然の雨だ。しかも本降り、このままじゃ帰れねえな。

「はあー」

下を向いてため息を吹いていると

「かゝずま！」

俺を呼ぶ声が聞こえた。誰だ？顔を上げるとそこには、幼顔の癖になぜか胸は膨らんでる金髪の少女、理子がいた。

「理子か」

「どうしたの？こんなところで？」

「見りゃ分かんذار。雨宿りだ」

「ふゝん……そうだ！理子の傘に入れてあげる！」

「マジでか!!?」

泥棒の操縦する助け船が来たか。まあ、今回ばかりはいいだろう。

「一真とあいあい傘なんて、理子うれしくな。もっと雨降ればいいのに」

これだけでも十分なくらい降ってるぞ。

「ねえ一真」

なんだよ？

「一真は、武偵高にいては楽しい？」
は？

「どういう意味だよ？」

「いいから。教えてよお」

わ、分かったから腕を持つな！！む、胸が！！

「ま、まあ、どっちかって言うて楽しい。アリアやキンジ、他の連中と毎日バカやって、笑って、時々叱られたりすけど、楽しいさ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・そっか」

理子？

「あ！雨止んじやった！あーあ、一真とのあいあい傘がもう終わっちゃった」

俺も空を見上げると、先ほどまでの曇天が、今じゃ晴天に移り変わっていた。

「一真。明日は泥棒大作戦の場所と時間、後でメールするね」

理子は一度俺にウイंकをすると、傘をたたみながら行ってしまっ

た。

「理子、なんでさっき、あんな悲しそうな表情になったんだ？」
白いフリフリを揺らしながら歩く理子を見ながら、俺は一人そう呟いた。

三十五本目 氷の魔女再び

秋葉原。オタクの聖地と呼ばれるここに、俺、アリア、キンジの三人は来ていた。理子の泥棒大作戦の打ち合わせのために。しかし、さすが秋葉、人が凄いな。300いつてんじゃねえか？

「なにキヨロキヨロしてんのよ。行くわよ」
アリアに言われ、階段を上っていく。

「ここか」

ケータイに記されているGPSを見ながら、キンジが呟く。それにしても、キンジの顔がなんか疲れてるような気がするんだが……
・まあ、白雪関係だな。

「行くぞ」

キンジがドアノブに手を手を掛けると、俺とアリアは、武器を構えて壁に張り付く。念には念をつてやつだ。

ガチャ

キンジがドアを開けると同時に俺たちは中に突入した。

『お帰りなさいませ。ご主人様、お嬢様』

俺の目に映ったのは、大勢のメイドが並んで、俺たちに頭を下げている光景だった。そう、ここはメイド喫茶。男なら誰しもが一度行ってみたと思う場所だ。俺も始めてきたがすげえーな。そしてその奥には、頭に白いカチューシャを付け、赤いワンピースを着た、理子が人5、6人は座れるほどの席に座っていた。

「ようこそ。アリア、キー君、一真。とりあえずこっちの席に来て」

手招きしてくる理子の場所まで行き、左からアリア、キンジ、俺という順で座った。

「キンジ。今のご感想は？」

隣で顔が引きつっているキンジに、嫌味っぽく聞いてみた。

「一秒でも早くここを出たい」

言うと思った。まあ、こんなとこにいたんじゃ、いつヒスるか分かんねえもんな。

「それでは！泥棒大作戦をはじめます！！」

理子はそういうと、胸の谷間から一枚の写真を取り出してきた。そこに写っていたのは、西洋にあるような屋敷だった。それより理子、なぜそんなところに入れる！？

「横浜郊外にある「紅鳴館」。ここの地下金庫に理子の宝物があるの」

「そこまで分かってるなら、なんで自分で行かないんだ？」

「よく考えてみるキンジ。自分で行って取り返せるなら理子とはとくに取り返しに行ってるだろ？それをわざわざ俺たちに頼むってことは、何かあるってことだ」

「さっすが一真。そう、実はこの館、こう見えて鉄壁の要塞なのになるほどね。」

「で？理子。ここにブラドは住んでるの？見つけたら逮捕しても良いわよね？あいつはあんたと同じ「イ・ウー」の一員で、あたしのママに冤罪を着せた一人なんだから」

おいおい、すぐその話にもってくなよ。焦りは禁物だぜい。

「あゝ．．それ無理。ブラドは何十年も屋敷に帰ってないの。だからそこには、管理人とハウスキーパーしかないの」

それなら楽勝じゃん。ボスが不在な分けだし、残りを何とかすれば楽に攻略できるってこった。チラリとアリアを見ると、やっぱり少し怒ってるな。理子も最初から教えとけよ。

「で？俺たちは何を盗むんだ？」

お、確かにそれは知つとかないとな。

「理子のお母様がくれた十字架」

「あんたどういう神経してるの！！」

うおっ！！テーブルに手を叩きつけて立ち上がったアリア。

「あたしのママに冤罪着せといて自分のママのくれた物取り返せつて．．．．あたしがどんな気持ちか考えたことあんの！！？」

アリアの言つこともごもつともだが、とりあえず落ち着けよ。

「落ち着いてられる分けないでしょ！！理子はママに会いたければいつでも会える！！でも、あたしはアクリル越しにしか合えないのよ！！！！？」

「．．．．うらやましいよ。アリアは」
？

「何が羨ましいってのよ！！」

「アリアのママは、生きてるから」

「!?!?」

アリアが目を見開く。さつきまで怒鳴っていたのが嘘のように静かになる。しかし、生きているからということとは・・・

「理子にはお父様もお母様ももういない。二人とも理子が小さかった時にはもういなかった」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「十字架は理子が5歳の時、お母様がくれた大切なものの・・・」
アリアは理子の話を聞きながら、ゆっくりと席に座った。

「命の次くらいに大切なものの・・・でも・・・ブラドの奴、それを知って、理子から取り上げたんだ。ちくしょう・・・」

理子のはのテーブルにはいつの間にか、涙で濡れていた。理子。確かに
お前は俺と似てるな・・・・・・・・

「ほ、ほら！もう泣かないの。化粧が崩れてブスがもっとブスになるわよ」

アリアはそう言いながら、理子にピンクのハンカチを渡す。アリア
なりの気遣いだな。

「とにかく。その十字架を盗めばいいんだな？理子」

「泣いちゃだめ、理子はいつでも明るい子。だから、さあ、笑顔になろう」

自己暗示のようなこと言いながら、こっちに笑みを向けてくる理子。
それは、本物の笑顔か、偽者の笑顔、どっちなんだ？

「さてよ。理子、鉄壁の要塞ならどうやって取り戻すんだよ？」

確かに。鉄壁の要塞なら、中から入らないと取れない……
……中から？おい、まさか……

「そこで！！アリアたちにはメイドと執事になってもらって、
内側から盗んできてもらいます！」

やっぱそうなるのね。予想はしてたけど。

「理子は幼いころに両親を亡くし、その後親戚を名乗るものに引き取られ、長い間、監禁されて育ったのだ」

「ああ、ブラドだ」
「！！？」

「何年間もの間、ロクな食べ物も与えられず、牢獄の中で、ボロ布を纏って暮らしていたそうだ」

マジかよ……理子にそんな過去が……いつも笑っていたのは、その辛さを誤魔化すためだったのか……

「そしてある日、理子はある条件と共に釈放された」
ある条件……まさか！！？

「お前も知っているだろ？」「初代リュパンを超える」。そのことを証明できたなら、もう追わないと」

……理子は……理子は望んでアリアと戦うなんて一つも思っただけだったのか……

「何で俺にそこまで教える」

「我が一族にとって、ブラドは仇なのだ。三代目の双子のジャンヌダルクが初代リュパンと手を組み、ブラドと引き分けている」
なるほどね。

「ブラドの祖先とか？」

「いや、奴は人間ではない」
は？

「あの化物を口で説明するのは難しい」
ジャンヌはそう言いながら、懐から眼鏡を取り出し、掛けた後、机においてあった鞆からノートとペンを取り出し、ノートに書き始める。

「一つ言っておくぞ。ブラドは死なない」
どうということだ？いくら人間じゃなくても、死は必ずくる。

「奴は昔、ヴァチカンの^{エクソシスト}の祓魔師に全身の四箇所^{エクソシスト}に文様を刻まれた。そこが奴の弱点だ。だが、面倒なことに、その四箇所を同時に破壊しなければ奴は倒れない」
つまり、完全なる不死ではなく、それに近い存在^{エクソシスト}でことになるな。ジャンヌは手を止め、ノートを見せてきた。・・・・・・んだこれ？

「四箇所と言ったが、残り一箇所が不明だ。三箇所は、ここここ、後ここだ」

ジャンヌはノートに書いたブラド？の体の一部につけた黒丸を指しながら教えてくるが・・・・・・これどうみても小学生レベルの絵だろ。

「どうした？遠慮せずに持って行け」
俺はジャンヌが書いたどうみても小学生の落書きにしか見えない絵を渋々受け取った。それにしても、ジャンヌの意外な一面が見られたな。俺はそんなことを思いながら、音楽室を後にした。

三十六本目 泥棒大作戦スタート！

みんな、今日は何の日だと思う？誕生日？祝日？いいや、今日はま
ちにまった泥棒大作戦の日なのだぁー！！イエーイ！！

「イエーイじゃねえよ。後なんでそんなにテンションが高いんだ？
一真」

隣にいるキンジにつつまれる。俺たちは今、紅鳴館に向かうバス
停で、理子を待っている。今回のこの作戦、俺たちがまず紅鳴館に
執事&メイドとして潜入し、理子の十字架の在り処が分かり次第、
取り戻すことになっているのだが・・・肝心の理子がまだ来ていな
い。

「理子の奴、なにしてんだ？」

「まさか、こないなんてことないよな？」

「それはありえないわ。今回の作戦は、理子のための作戦だもの」
俺の腰のあたりからアリアのアニメ声が聞こえた。まあ、そりゃそ
うなんだが・・・・・・・・・・・・・・・・

「キーく〜ん！ア〜リア〜！！か〜ずま〜！！」

噂をすれば難とやらだ。理子の声が聞こへ、俺たちはその方へ顔を
向け・・・・・・・・・・・・・・・・おいおい・・・

「カナ！！？」

理子よ。これはどういう意味だ？

「理子！！なんでカナの姿なんだよ！！？」

「クフツ。理子ブラドに顔割れちゃってるからさあ。そ・れ・に。キー君の一番大切な人で応援しようと思って」

「だからってその人はいんじゃないか？理子」

「！？一真お前！！カナのこと知ってるのか！？」

「ああ、正体も一応な」

「！！！！？」

「なぐんだ、一真も知ってたんだ。カナちゃんのこと
ああ。」

「な、なに！！！！？り、理子！！キンジ！一真！！だ、誰のなよ！！
カナって！！！！？」

一人話についていけないアリアが、子どもが駄々をこねるように叫び出した。

「まあまあアリア。他人の恋人のことを聞くななんて野暮だぜ」
アリアの耳元で小さくさういうと

「こ、恋！！！！？」

予想通り、顔を真っ赤に染めやがった。ハハハハ！！！！アリアはそういう話になると直ぐ赤くなるなあ！！

「ちげえーよ。カナとは、昔の知り合いみたいなモンだ」
知り合いより深い関係だけどな。特にお前の場合は…………

「い、いやあ……これは……意外なことになりましたね」

「俺だつて驚きましたよ。まさか小夜鳴先生がここの管理人だなんて」

目の前で苦笑いを続ける、銀髪に眼鏡を掛け、茶色いスーツに身を包んだ小夜鳴。

「ハウスキーパーさんが休暇を取る二週間だけですから、誰でもよかったです、まさか武偵高の生徒がくるとは」

「私も驚きました。まさか武偵高の先生と生徒さんだなんて」

カナさんに成りすました理子だが、想定外のことに動揺してるな。

「自己紹介が省けて助かります。武偵が三人というのは良いかも知れませんが」

清々しい笑顔を向けながら、話してくる小夜鳴先生。不知火のイケメンスマイル並だなこりゃ。どうりで女子に人気があるわけだ。

「ご主人様が帰られたら、ちょっとした話の種になりますね」
さりげなくブラドの帰りを探ってやがるな、理子の奴。

「いえ、彼はとても遠い所に出ていて、当分帰ってはこれないかと」
ブラドとの戦闘はなさそうだな。

「お忙しいんですか？」

「さあ？どうでしょう。お恥ずかしいことに、彼とは一度も会話を交わしたことがないんです」
一度も無いだと？

「それでは私は失礼します。三人とも、しっかりとお勤め願いますね」
そのウインクは『作戦うまくやれよ』って意味か？理子はそう言う
と、扉から出て行った。さてと、泥棒大作戦の一日目
を始めますか！！

三十七本目 潜入紅鳴館

理子が去った後俺たちは、小夜鳴先生に連れられ、広い廊下を歩いていた。なんでも、俺たちが住む部屋に案内してくれるそうだ。

「小夜鳴先生、こんな大きな家に住んでたんですね。ビックリしました」

「他人の家ですがね、ここの研究施設をちよくちよく借りていくうちに、いつのまにか管理人のような立場になっただけです」

「研究施設ってことは、何か研究してるんですか？」

「はい。まあ、詳しくは教えませんがね」

小夜鳴先生はそういうと、その場に立ち止まった。

「こちらが神崎さん、こちらが遠山君、そしてこちらが東城君の部屋になります。部屋は自由に使ってくれて構いません。後、部屋のクローゼットにある制服を着てください。いろいろなサイズがあるので、自分に合ったものを着てください。仕事の内容は、ハウスキーパーさんが部屋にメモを残してくれていますから、それを参考にしてください。仕事が無い時は、その遊戯室でビリヤードでもしてください。私は、四六時中研究室に閉じこもり気味なので、すみませんがあまり皆さんの相手はできません。夕食の時間になったら教えてください。では、がんばってください」

そういうと小夜鳴先生は、直ぐそこの研究室に入ってしまった。さてと、俺らも始めるか。

部屋に入ると、そこは高級ホテルの一室のような豪華さだった。その中にあるクローゼットを開くと、黒い執事用の服が何着かあった。えーと、M、M、M、M・・・お、あったあった。俺はそれをクローゼットから取り出し、着替えた。

「よし、サイズもピッタリだな。アリアとキンジはもう着替えたのか？」

自分の部屋から出ると、俺より先に、黒い執事用の服に着替えたキンジがいた。

「よっ、キンジ。なかなか似合ってるじゃねえか」

「お前もな、一真」

「そりやどうも。アリアは？」

「まだだな。しょうがねえ、呼んでみるか」

キンジがドアをコンコンとノックし、部屋に入るとそこではアリアが、黒いメイド服の状態で、クルクルと回っていた。と、とてもシユールな光景だな。そんなことを考えていると、顔を真つ赤に赤面させ、アリアがズン！ズン！と地鳴りを響かせながら、俺とキンジに向かって飛び蹴りをやってきた。グバツ！！アリアの足が横腹にヒットし、俺とキンジはその場に倒れこむ。

「ご用件は何ですか？ご主人様」

ちよっ！！？なんでそんなに負のオーラが出てるの！！？

「ま、まてアリア！！俺たちはただ！！お前が呼んでも出てこない

から中に入っただけでだな!!」

「次覗いたら、脳天風穴地獄だから」

につこりと笑いながらそういうアリアの後ろには、なんか般若が浮かんでいた。俺が今学んだこと、女を怒らせると寿命が縮む。

現時刻は午後8時。仕事が無くなった俺たちは、暇なので遊戯室にビリヤードをしにきた。まあ、実際やってんのはキンジとアリア。俺はルールが分からないので、椅子に座ってあらかじめ持ってきておいたラノベを読んでいるところだ。しかし、ビリヤードとは何が楽しいんだか俺にはさっぱり分からん。ん？キンジが向こう側の台からこつちび来たぞ？何でだ？俺の隣に座ったキンジは、何故か顔が赤かった。一体何をみ……。ブホッ！キンジの向いている方を向いた時、俺の目に飛び込んできたのは、届かない弾を弾くために、体を台に伸ばしているアリアの姿が映った。だが、俺が驚いた理由はそこではなく、スカートだ。そこには、スカートの中からピンクのパンツが顔を出していた。や、やべっ！んなもん見てたら殺される！！俺はキンジとアイコンタクトし、一斉に立ち上がった。立ち上がった時に

立てた音がアリアにも聞こえたのか、アリアは、こちらを振り向いてきた。ん？床になんかくしゃくしゃに丸められ紙が落ちてる……

……。誰のだ？

「？キンジ、何か落ちたわよ？」

アリアが、落ちていた紙を拾い上げ、中を開くと笑い出した。なんだ？

「あんた絵下手」

そういつて俺たちに見せてくるって、それは！！ジャンヌの書いたブラド（幼児レベル）の絵じゃねえーか！！キンジから落ちたってことは、キンジもジャンヌから貰ってたってことか……

「俺が書いたんじゃないけど、そいつはブラドの弱点を現した絵だ」

「ブラドの？」

「ああ。この黒く塗りつぶしてある部分を同時に潰さないと、奴は倒れないんだ」

「さらに補足すると、それには後一つ弱点があるらしいぜ」

キンジの説明に割って入ると、キンジが目を大きく見開いた。その後、俺の知っている理由を理解したのか、キンジは目を元の大きさに戻した。

「ま、最後の弱点は別にいいだろう。そいつは、ブラドと戦う（…）ことを前提ににした物だからな」

ま、アリアの場合、一応用心するんだろうけどな。

ゴゴーン！！！！

おわっ！！？停電！！？俺はすぐさま外を見ると、暗雲の中、紫色の光が怪しく光っていた。原因は雷か。さて、これにアリアは大丈夫なのかというと……

「ひゃあー！！」

大丈夫じゃなさそうだ。体中を震わせながら、キンジに抱きつくアリア。

「お、おい」

急に抱きつかれて驚くキンジだが、すぐに納得したのか、震えるアリアを、俺がいるのも忘れ、そっと抱きしめた。うーん…………ここに俺がいたらじゃまだな。俺は二人のムードを壊す恐れがあると考え、遊戯室から出て行った。

三十八本目 囚われた怪盗

ハウスキーパーもとい、理子の宝物を奪還するために潜入して一週間たったその日の深夜、俺のケータイの着信音が、部屋に響いた。

『アリアとキー君と一真にていきれんらくー！！イエイー！！』

ケータイの向こう側で、ハッスル状態の理子が喋りだしてきた。つかうるせえーよ！！耳元でそんな大きな声出すな！！

『テンションたけえーな、お前』

キンジのつつこむ声も聞こえるな。

『あつという間の一週間だったけどどお？理子の宝物は見つかった？』

『あんたの宝物って、棚の上に置いてあった青いピアスみたいなのがついてるロザリオよね？』

代表してアリアが理子に尋ねる。

『そう、それだよ！！』

「けどよお、そこにはいつも小夜鳴先生がいるぞ？そこはどうすんだ？」

いくら探し物が見つかったと言っても、それを邪魔するものがいたんじゃない話にならない。

『そこは武偵らしく、ローアウトでいくんだよ。超古典的な方法だけれどお、アリアと一真が小夜鳴先生を誘い出すの』

俺とアリアが？なんで俺もなんだ？

『一真はアリアと小夜鳴先生との状況をキー君に連絡する係りになつてもらうからです!!』
なるほどね。

『それでは!! 検討を祈ります!!』

その言葉を最後に、理子は通話を切った。ふぁゝあ、
．．．．．
・寝よ。

作戦実行の翌日。生憎天気は曇天だ。そんな曇天な空の下、先頭をアリアと小夜鳴先生が並んで歩き、その後ろを俺が付いていく状態で、作戦は始まった。

「こちら一真。アリアが小夜鳴先生を外に連れ出した。行くなら今だ」

襟に付けた小型マイクを通して、キンジに小声で話しかける。

『こちらキンジ。了解した、これから地下倉庫に潜入する』

キンジ、頼んだぜ。俺は襟を元に戻し、平然と歩く。

「突然ですがお二人とも、遺伝子は花にも存在するご存知でしたか？」

「いいえ、まったく知りませんでした」

「俺もまったく、人にだけあるものだとばかり」

「人だけではなく、遺伝子はちゃんと花にもあるんですよ？例えばこのバラは、優良種だけを残し、別のものを排除する。それを繰り返すことにより、こうして美しい花が咲くんです」

ふん。俺は別のものを排除するってのはあまり好きになれないな。

「なるほど、すごいですね」

「人間も同じです。優秀な人は、優秀な家系からしか生まれない。そうおもいませんか？神崎さん、東城君」

小夜鳴先生って、こんなだったっけ？

「大変貴重な時間でした。すみませんが、そろそろ私は戻らなければ・・・」

『アリア、一真。キー君はまだ時間がかかる。少しだけ時間を稼いで』
了解！

「あの、小夜鳴先生」
研究室に戻ろうとする小夜鳴先生を、アリアが引き止める。よし！そのまま稼いでくれよ！

「今日は、いい天気ですね」

「え？曇ってるんですが・・・？」

「え？あつ、えーっと、あの、その、あ、あたし、曇りが大好きなんです！」
天パリすぎだろ！！？いつもの調子はどうしたんだよ！！？まったくしょうがねえ！！

「小夜鳴先生！！遺伝子についてもっと詳しく教えてくれませんか！！？」

「え？あ、でも、私には研究が・・・」

「ほんの少しでいいんです！！お願いします！！」

「わ、分かりました。ではまず、遺伝子と言うものはですね」
「

俺はこの後、遺伝子と言つものを30分も聞かされる羽目になった。

ランドマータワー屋上。ここで理子に宝物を渡すことになっている。

「きーくうーん!!アリアー!!かゝずまゝ!!」
金色の髪を靡かせながら、理子が駆け寄ってくる。

「ほら、これだろ？」

キンジが、ポケットから青いロザリオを取り出し、理子の前に出す。
へえー、綺麗じゃん。

「それだよ！！それ！！イヤッホー！！」

ロザリオを受け取り飛び跳ねる理子。けど、コイツはそれよりって顔してるな。

「理子。喜ぶの良いけど、ちゃんと約束守りなさいよ」

腰に手を当てた状態で理子に釘を刺すアリア。まあ、まあアリア。
今くらいは喜ばせてやれよ。

「アリアはぜんっぜん分かってない。ねえ、キー君」

「なんだよ」

「お礼がしたいからあゝ、ここの赤いリボンを解いてくださゝい」
理子がキンジにリボンの付いた頭を向け、それをキンジが解くと同時に、理子がキンジに自分の唇を重ねた。おいおい、んだこりや？

「まったく、悪い子だな、理子」

このキザな喋り方、キンジのヤローなりやがった。

「りりりりりり理子お！！？な、なななななにやってんのよ！！？」

「クフツ。ごめんねえー、キー君、一真。理子キー君の言うとおり、悪い子なのおゝ。理子的にわあゝ十字架これさえ手に入れば後はどうでもいいんだよねえゝ」

「じゃあなにか？俺たちはお前の手の上で踊らされてたって分けか？」

「そういうことお」

けつ、泥棒は腐っても泥棒って分けだ。俺たちのお前を信じる心までも奪っていきやつた。

「もう一度言おう。悪い子だ、理子。けど、許すよ。女性の嘘は罪にならないからね」

キンジよ、神や仏やお前が許したとしても、俺たちのご主人様は許さねえーみたいだぜ。

「こうなることも予測済みよ！！キンジ！！一真！！闘るわよ！！」
へいへい。懐から鎌鼬を取りだしながら、アリアに答える。

「そう、そうだよアリア。それでいい。理子のシナリオに狂いは無いの。アリアたち利用してロザリオを取り戻した後、三人を倒す。クフツ、一真たちもがんばってねえ、せっかく理子が、初めてのキスまでしてお膳立てしてあげたんだから！！」
俺は鎌鼬を構える。そのとき

バチチチチチ！！！！

突然、電流の流れる音が理子の背後から響いた。なんだ！！？

「なんで・・・・・・・・・・・・・・・・おま・・・・・・・・え・・が」

理子は顔を半分ほど後ろに振り返ると、そのままその場に膝をついてしまった。誰だ！！？鎌鼬構えるが、その人物を見て、俺たちは驚愕した。理子を倒した人物は、銀髪に、眼鏡を掛けた、紅鳴館の管理人

『小夜鳴先生！！？』

小夜鳴先生が、大型のスタンガンを持って立っていたのだった。

三十九本目 現れた吸血鬼

どういうことだ！！？なんで小夜鳴先生が理子を倒すんだ！！？意味が分からねえ！！！！

「動かないでくださいね？神埼さん、遠山君、東城君。誤ってリユパン4世を殺したくありませんから」

鎌鼬を振ろうとしたが、鎌鼬を下ろす。

「なんであんたがリユパンのことを知ってるのよ！！は！！まさか・・・あんたがブラド」

「いや、それはない」

裏キンジが、アリアの発言を冷静に否定する。確か奴は人間じゃないってジャンヌの奴が言ってたな。

「遠山君の言うとおりです。ですが、彼はまもなくここに現れる」
「な！！？ブラドがここに来るだ！！！！？」

「ええ。それにしても・・・」

小夜鳴は目線を理子に向けると、右足で理子を蹴った。な！！？

「君は相変わらずですねえ、リユパン4世。その様子だと、私と会ったことを憶えてないようだ」

理子は小夜鳴と過去に会ってたのか。！！理子！！

「お前・・・だったのか・・・あの時・・・ブラドに・・・余計なことを・・・吹き込んだのは」

小夜鳴の足元でもがきながら口を開く理子。そのときの声からは、

強い怒りが感じられた。

「ええ。そうだ、君達にこのリュパン4世のことを教えてあげましよう」

なに？

「10年前、私はブラドに依頼され、リュパン4世の遺伝子を調べたことがあります。そして調べた結果、リュパン4世には」

「ヤメ・・・口！！・・・オルメスたちには！！・・・関係・・・無い！！」

「優秀な能力がまったく遺伝していなかったのです。つまり、この娘はまったくの無能。『欠陥品』と呼ぶに相応しい存在なのです」
理子の瞳から、涙が零れ落ちていくのが見えた。

「ふざけるなよ、お前」

「はい？」

「何が遺伝子だ。遺伝子なんかで人のこと勝手に決めてんじゃねえぞこのクソヤロー。人の基準は遺伝子？はっ、笑わせるな。遺伝子なんかで人は決まらねえ、ましてやそれを決める権利は誰にもねえ。俺にも、テメーにもな」

「頭の悪い君には理解が難しいようだ。ならば、それを今から教えてあげましよう」

そついうと小夜鳴は懷から、キンジが摩り替えた口ザリオを取り出した。

「先生の特別授業です」

小夜鳴は理子の前にしゃがむと、胸に掛けた本物口ザリオを引きちぎり、自分の手に合つた偽者の口ザリオを理子の口に押し込んだ。言葉に出来ない叫びを上げ、足をじたばたと動かす理子。だが、それも次第に弱くなつていき、ついには止まつた。

「やはりあなたにはガラクタの方がお似合いだ。おっと、あなたもガラクタでした、ね！」

その言葉に続き、理子の腹目掛けて足を下ろしてきた。痛みを受け、理子は叫ぶ。涙をこぼしながら泣き叫ぶ。体中から湧き上がる奴への怒りが、殺意へと変わってきていた。目の前の奴を殺せ。原型の無いようにして殺せ。徹底的に殺せ。

「いいかげんにしなさいよ！！なんでそんなに理子をいじめるのよ！！」

小夜鳴の態度に激怒したアリアが、小夜鳴に二丁のガバメントを向ける。

「絶望が必要なんですよ、ブラドにはねえ。彼は絶望の唄を聴いてやってくる。玩具は高いところから壊す方がより絶望も深いことですからねえ！アツハハハハハハハハハハ！！！！！」

このクズヤローが！！！！どこまで腐ってやがる！！！！

「君達は運が良い。神埼さん、遠山君、東城君。特別に見せてあげましよう」

ゴゴーン！！！暗い夜空に、紫電が怪しく光ったと思うと、小夜鳴の体が数十倍に膨れ上がった。なんだ！！？

「アッハハハハハハハハハハ……！……！さあ……！その目に刻みなさい……！彼の姿を……！そして……！絶望なさい……！」

ゴゴーン！……再び紫電が暗雲に怪しく光った。

「さあ、かれが、くるぞ」

その言葉を最後に、小夜鳴という人間は消えた。その場に立っていたのは、瞳が赤く光り、体のいたるところには目玉のような模様が付いており、全身が赤黒い毛で覆われた化物。ブラドが立っていた。

四十本目 螺旋丸

目の前に立つブラドを見て俺は感じた。コイツはそんじょそこらの犯罪者なんかじゃない。いや、外見もいまにも押しつぶされそうな威圧感も、人間ではないと。

「へ、変身した!!?」

アリアが驚愕の声を上げる。俺も声には出していないが絶句している。なにせ目の前にいたはずの人間が、いきなりこんな化物に変わったんだからな。

「アリア!!一真!!驚くの後だ!!行くぞ!!」

「ああ!!」

キンジの掛け声を合図に、俺たちはブラドに総攻撃を仕掛けた。

「強風・風斬!!」

鎌鼬をブラドに向かって振った。鎌鼬から出た鋭利な風が、一直線にブラドに向かい、手首ごと切り落とした。だが、その数秒後、切り口から赤い煙が出てきたと思うと、見る見るうちに傷口が塞がり、そこから先ほど俺が切り落とした手首が生えてきたのだ。な!!!? どういうことだ!!?」

「な、なんだ!!!? 傷が!! 傷が治った!!!?」

さすがの裏キンジもこのことは想定外だったか。しかし、再生が早すぎるな。傷をつけても、数秒後には完治してやがる。

「ブラド!! ママの冤罪の99年分はあんたの罪よ!! 絶対逮捕して証言台に引きずり出してやる!!」

倒せば・・・開放するって、約束・・・したのに・・・！」
理子！！

「お前は犬とした約束を守るのか？ゲバババババババ！！！！」
ブラドオオ！！

「いいか4世。お前は俺様から逃げられねえ、世界中に逃げ回ろう
がお前の居場所は今どこにもねえんだ。ん？いや、一つ在ったな、
ルーマニアの檻の中がなあ、ゲババババババババババ！！！！」
「！！！！」

「いや・・・だ。アリ・・・ア、キン・・・ジ、かず・・・ま」
目に涙を浮かべながら、理子は三人の名前を呼ぶ。そして・・・

「助けて……………」

「待ちわびたぜ！！その言葉！！」

理子の言葉を合図に、俺は鎌鼬をブラドの腕目掛けて振るう。

「強風・風斬！！」

殺傷能力の高いこの技で、ブラドの腕を根元から切り離す。鎌鼬を

その場に放り捨て、落ちてくる理子を抱きかかえると、再びブラドとの距離を取る。俺が戻ったのを合図に、アリアとキンジが攻撃を仕掛ける。俺は抱きかかえた理子をブラドから離れた所にそっと寝かせる。

「大丈夫か？理子」

近くでみると酷い。体中が傷を負い、精神的にも、肉体的にも限界がきているのが感じられた。

「一真……今すぐアリアたちを引かせて。ブラドには勝てない……私はそれを何度も感じた」

「理子。最初^{ハナ}っから諦めるんなぞ、俺の性に合わない」

「無理……なんだよ。あいつは、一真が思ってるほどに強い！今すぐここから逃げないと、殺される……！」

……理子。

「確かに俺一人じゃあ勝てないかもしれない。でも、アリアやキンジ、そして、お前が一緒なら倒せるかもしれない。いや、必ず倒す……だから……」

ポケットからあるものを取り出し、そつと理子の手に握らせる。

「！これ……！」

そう、理子に渡したものは、理子の宝物である、青いロザリオだ。さっきの攻撃の時にパチツてきたのだ。

「これを持って、ここで待ってる。必ずお前を、吸血鬼の檻から救い出してやる」

そう言うと、俺は立ち上がり、キンジたちの方を歩こうと足をす

める。

「一真……」

進める足を止め、理子の方へ振り向く。

「奴の……ブラドの四つ目の弱点は……奴の胸の中央……」

「なんでそれを……いや、そうか。理子は長い間監禁されていた、そして、奴を良く見ているのは理子だけだ。」

「ありがとう、理子。すぐ戻ってくる」

理子に一言そう言っていると、キンジたちの方へ向かった。

交戦中だったアリアとキンジに合流した。

「ハア、ハア、ハア、ハア」

長くの間交戦していたアリア。さすがに息が切れてやがる。

「キンジ、戦況は？」

「さっきから奴の目玉模様を狙ってはいるが、回復が恐ろしく早い。やはり四つ同時に潰さないと……」

「その四つ目を見つけた」

俺の言葉に、キンジとアリアが目丸くする。

「本当か！？どこにある！？」

あそこだ。と、ブラドの胸の中央を指す。

「理子から教えてもらった。キンジ、アリア、俺が合図したら撃つてくれ。俺は中央を狙う。アリアは左肩と腹を、キンジは右肩を頼む」

そう言う俺は、鎌鼬を構え、精神を刀に集中させる。

「分かったわ」

「ああ」

ありがとな。

「螺旋丸！！！」

鎌鼬を胸の中央目掛けて振り払った。振り払われた鎌鼬から、螺旋状に回転した玉が出現し、ブラドの胸元目掛けて一直線に突き進んだ。

そして

「グチャ！」と、玉が体に減り込むような音だけが、辺り一面に響きわたった。

四十一本目 自由の翼

「グウ……ウウウウウウウウウウ……！」

目玉模様に弾が減り込んだと思うと、突然ブラドが、体を抑えてうずくまりだした。やったのか!!?

「グウウウウウ・・・・ゲバ、ゲバババババババババババ！！！！！！！！！！！！！！メス犬如きが俺様の急所を知ってるわけねーだろオ！！！！」

な！！？最後の弱点は胸じゃなかったのか！！？なら一体どこに！！？

「真！」

！！？アリアの声で気づいたときには遅かった。すぐさまブラドに目をやると、ブラドの体が数十倍に膨れ上がっていた。

「ワラキアの魔笛に酔え」

L

俺は気づいた時には地面に膝を突いて、鎌鼬を手から離していた。何だ！！？吼えた！！？突然の行動に、俺は意味が分からなかった。だが、一つ言えることがあった。コイツはやばい！！辺りの地面は固いコンクリートで覆われているにもかかわらず抉れ、タワーが揺れるのを感じた。

「ど、ドラキュラが吼えるなんて聞いてないわよ!!」

俺から少し離れたところでアリアが、耳を塞ぎながら叫ぶ。は！！キンジは！！？咄嗟にキンジの方へ目をやると、キンジの样子が少し変だ。どうしたんだ！！？

誰だ？俺を呼ぶ声？上から？俺はそつと目を開いた。そして、俺の目に映ったのは、俺に手を差し伸べてくる理子だった。

「な！！？理子！！？」

驚愕した。理子は必死に手を差し伸べてくれた。それを見て、昔聞いたある言葉を思い出した。

『あきらめたら、そこで何もかもおしまいですよ？』

唯一今もなお、俺の心に残っている言葉だ。そうだ、あきらめるな。あきらめなければなんとでもなる。あきらめなければ、希望はある！！俺は目をもう一度瞑り、再度開いた。手を全力で伸ばし、理子の手を握り締めた。理子は俺の手を握ると、能力を使い、髪で俺の体を巻きつけ、ロリータ改造制服を引っ張る。すると、理子は下着姿となり、制服がパラグライダーに成り代わった。ふう、間一髪つてやつだな。

「助かった。サンキュー、理子」

なんか、さすがリュパンの子孫だな。アニメでやってたりリュパンと同じようなことするんだからな。

「一真！このまま逃げよう！！やっぱりブラドは強すぎるんだよ」
逃げようか……………

「それも立派な策の一つだ。無理して死んだら元も子もない」

「じゃあ！」「ただ、アリアとキンジはどうすんだ？」

「アリアとキー君も、あたしたちが逃げたことを知ったら逃げるよ」
いや、そんな珠じゃないぜ、あいつら。

「そうよ……あたしは4世なんかじゃない……!!あたしは!!峰・理子!!!!」

理子の目の色が変わった。絶望の闇に染まっていた瞳が、希望の光に染まった瞳に変わっていた。パラグライダーを上昇させ、理子は、ランドマークタワーの方向の風に乗っていった。

「理子、まずは俺を下ろしてくれ。んでもって、アリアとキンジを回収してくれ」

「どうすんの?」

「決まってるだろ。キンジをヒスらせるんだよ。アリアでな」

「クフツ、そういうことなら、このりこりんにお任せあれ!」

ああ、行くぞ!!俺の言葉を合図に、理子をはブラドと交戦中のアリアとキンジに離れた。懷から漆黒の刀「鬼切」取り出す。そして

「はあああああああ!!!!!!!!!!」

ブラド目掛けて、懇親の一撃で振るう。

「なに!!!?グウアアアアアアア!!!!!!!!!!」

絶叫にも近い叫び声を上げながら、ブラドの上半身が転がっていく。うえっ!!気持ちわる!!いくら再生するって言っても、痛みは直に感じるんだ。そつと後ろを振り向くと、そこにアリアとキンジの姿は無かった。理子、なるべく早くしてくれよ。

「このクソガキがア!!」

は!!!?嘘だろ!!!?上半身再生するのに1分も掛かからないのかよ!!!?

「雑種の分際で図に乗るな!!」

「はん! その雑種に負けてるのは誰だ? 優秀な吸血鬼さんよお」

「お前は必ず殺す!!」

赤い瞳を光らせながら、ブラドは俺に鉄棒を振り下ろす。俺はそれを左にかわし、鬼切でブラドを斬り付ける。切り口からは鮮血が飛び散るが、その切り口はみるみるうちに塞がっていく。

「ゲバババババババ!!!! よほど無駄なことが好きなようだなあ!!」

降り下ろされる鉄骨を、俺は鬼切で受け止める。その瞬間、地面が少し沈んだ。グウウ!! のヤロー!! なんて力してやがる!!

「ウラッ!!」

体中の力を腕に集め、俺はブラドに鉄棒を弾き返した後、俺はすぐさまブラドとの距離をとった。

「ハア、ハア、ハア、ハア」

ヤベーな。体中の骨が悲鳴を上げてやがる。早々に決着^{ケリ}つけねえとな。

「ゲババババババ!! 欠陥品の4世と違ってしぶといな小僧。オルメスの血を摂るついでにお前の血も採っておくか? ゲババババババババ!!!!!!」

「テメエー、いい加減にしやがれ!! あいつをそんな風に呼ぶんじやねえ!!」

「欠陥品を欠陥品と言って何が悪い？」

「悪いに決まってるだろうが！！優秀な家系に生まれなかったから落ちこぼれだあ？優秀な遺伝子を受け継がなかったから欠陥品だあ？ふざけてんじゃねえぞこのクソヤロー！！受け継がなかったのならそれ以上の努力をすればいい！！今の自分より強くなればいい！！優秀な家系に生まれようが生まれまいがなんてものは関係ねえ！！いいかよく聞け！！あいつは欠陥品なんかじゃない！！あいつは、あいつは峰理子だ！！」

「クズはクズ同士仲が良いのか？ゲバババババババババ！！！！」
言ってる！！！！雑種！！

「雑魚の分際で図に乗るなあああああ！！！！」

巨大な鉄棒を振り回しながら、ブラドが向かってくる。だが、それは俺にとって都合だった。俺は天照を鞘にしまい、懐から閃光玉を取り出し、ブラドに向けて投げつけた。ブラドの目の前でそれは眩い光となって爆発した。

「グアアアアアアアアア！！！！！！」

もろに光を受けたブラドは、両手で目を抑える。へっ、最後に一泡吹かせてやったけど、俺も限界だな。俺は全身の力が抜け、思わず後ろに倒れる

ことはなかった。

「待たせたな、一真」

その声に後ろを向くと、キンジが俺を支えてくれていた。いや、裏キンジか。

「へっ、おせえーぞ」

「後は、任せろ」

ああ。

「やつてくれたな。下等生物の分際で――！」

な――!? あのヤロー、もう回復してやがる。

「アリア、理子。作戦通りに行くぞ」

裏キンジ状態でベレッタを構えるキンジ。おい！最後の弱点は分か
ったのか！！？

「ああ」

「へっ、あっさりと返してくれちゃって、さすが裏キンジ。頭の回転速度も速いみたいだな。」

「ゲババババババババババ！！！！なんだア？まだ懲りてねえのかよ？無能はいくらやつても無能だな！！ゲバババババババババ！！！！！！！！」いいやブラド。そう笑っていられるのもそこま
でみただぜ。

「**今だ！！**」

キンジの叫びを合図に、理子が超小型銃の引き金を引いた。弾はブラドの左肩に向かい、「グチャ！」と音を立て、減り込んだ。それに続き、アリアが二丁のガバメントの引き金を、キンジがベレッタの引き金を引いた。^{トリガー}だが、アリアの放った弾が、一つの魔臓を捕らえ損ねた。だが、それもキンジの計算通りだった。キンジの銃弾はそれを、ビリヤードのように弾き、的確に魔臓へ運んだ。アリアの弾が右肩と腹に、キンジの弾が、最後の弱点であるブラドの舌に減り込んだ。その名も「銃弾撃ち」^{ビリヤード}

[illegible]

！」

ブラドは体を抑えながら、もがき苦しむ。そして、今度こそ動きが完全に止まった。

「え？勝った……の？あたしたち」

目を丸くした状態で、アリアが呟く。

「ああ、勝ったんだ」

ハハハハハ……. なんと清々しい勝利だ。

「どうだあ？理子。これでお前も自由だな」

「自由……. ほん……. とうに？」

おいおい、啞然としてやがる。

「そうだ。お前を縛り付けるものはもう何も無い。自由だ」

俺がそう言つと、理子は顔に笑みを浮かべていた。

「さてと、後はブラドを引き渡せば」

「

俺はその台詞を最後まで言うことはなかった。突然、体が重く感じたのだ。やっべ、体が言うことを利かねえ……. 力を使いすぎたか……. ワリイ、俺寝るは。

朦朧とする意識の中、キンジたちにそういい、俺は目を瞑った。

四十二本目 小悪魔の口づけ（前書き）

一週間ぶりでございますね、皆様。更新が遅れた言い訳としては
なんですが、フェイトステイナイト見てました。

四十二本目 小悪魔の口づけ

「・・・・・・・・ここは・・・・・・・・」

目の前に映る白い天井を見つめ眩き、俺は目を覚ました。体は・・・・・・問題ないな。体に異常が無いことを確認すると、体をゆつくりと起こした。ん？この独特な臭い・・・・・・・・そうか・・・・ここは病院か。自分のいる場所が病院だと分かると、俺は安心したように、深くため息をついた。なにせ、あんな化物と戦った後だからな。

ガラッ！

「一真」

病室の扉を勢い良く開けたかと思うとそこには、緋色の髪の少女アリアと、てにコンビニの袋を持った黒髪の少年、キンジが立っていた。

「アリア、キンジ」

開かれたドアの方を向いて、俺は話しかける。

「お前、もう平気なのか？」

俺のところにコンビニの袋を置きながら、キンジが聞いてきた。

「ああ。8割ぐらいだな」

コンビニの袋の中身を探りながら、俺は答える。ちなみに、中身はジャンプだった。

「で？奴はどうなったんだ？」

奴とはもちろん、吸血鬼ブラドのことだ。

「ブラドは警察に引き渡したわ。そして、理子も証言台に立つてくれたの。おかげで、ママの冤罪がさらに減少したわ」
ま、あれで理子が証言台に立ってなかったら、俺は思わずぶん殴ってたかもしれないな。

「あ、そうそう」
ん？

「これ、あんだのでしょ？」
そういつてアリアが俺に見せてきたものは、ランドマークタワーに忘れたと思っていた鎌鼬だった。

「拾ってくれたのか！！？」

「まあね。帰り際に、刀が転がってるのが目に入ったの。もしかしたらあんだのじゃないかと思って」

俺は今日ほどアリアが女神に見えたことは無いぞ！！普段はツルペ「なんか言った？」イッテマセンヨ？ホホホホホホ

「とにかく、元気そうなら何よりだわ。この調子で明日には退院しなさい！！いいわね！！でなけりゃ風穴！！」

アリアはそういうと、病室から出て行った。

「いや無理だろ」

そんなアリアにキンジはつつこむと、アリアを追うように病室から出て行った。病室に残った俺は、ね転んだ状態でキンジが買ってきてくれたジャンプを読んでいると、強烈な睡魔に襲われ、まぶたを閉じた。

ガラッ！

「・・・・・・・・ん？」

扉の開く音で、俺は目を覚ました。口を開いて大きく欠伸をしながら、体を起こした。誰だろう？

「一真。入るよ」

そういつて入ってきたのは、金髪にゆるいテンパのかかったツーサイドアップの髪をした、理子だった。

「理子か」

理子を見て、俺は呟く。理子はゆっくりと歩きながら、俺のベッドに座る。

「一真」

ん？

「助けてくれて、ありがとう」

なんだよ改まって。

「一真は、あたしを吸血鬼の忌々しい檻から救い出してくれた。あたしに自由の翼をくれた。今こうして一真と話せるのも、全部一真のおかげ」

俺だけじゃない。アリアにキンジ、そしてお前自身が、忌々しい檻を壊したんだ。

「クフツ、一真は理子の英雄^{ヒーロー}みたい」
英雄^{ヒーロー}か・・・・・・・・・・

「そんな偉大な英雄^{ヒーロー}様に！！りこりんからプレゼントなので〜す！！」

「クフツ、英雄^{ヒーロー}様に理子の唇をプレゼントだよ。二番目だけどね」
理子はそういうと、スキップをしながら、病室から出て行った。突然キスされた俺は

「これなんてエロゲー？」

真っ白な天井を眺めたまま、そう呟くしかなかった。

四十三本目 再会と驚愕と

病院から退院して早一週間がたったある日、それは訪れた。

プルルル、プルルル。

メール？俺は、自分のポケットからケータイを取り出し、メールを確認した。

『今日の午後6時、空き地島に来なさい』

それは、差出人不明の奇妙なメールだった。

「なんだ？これ」

メールを見て眉を潜めながら、俺は呟く。空き地島。そこには、以前理子がハイジャックした飛行機の残骸が未だに残っている。そんな場所をわざわざ指定する相手とは、一体誰なのだろう。不意に時計に目をやると、時刻は午後5時30分。約束の時間まで残り30分という時間は、行くか行くまいかを決めるには短すぎる時間だ。

だが、俺は少しも悩むことなく、行く方を選んだ。俺の本能が感じていた。その場所に行け、と。俺は念には念をとということで、鬼切を手に持ち、空き地島に向かった。

夜の空き地島。俺あての差出人不明のメールを出した張本人を、俺は探していた。だが、それは残骸の飛行機の羽の部分に腰をかけている人物を見て、終わることになった。宝石を目に埋め込んだような美しい緑の瞳、どこかサソリの尾を思わせるような三津編みの茶髪、満開の桜のような美しい唇、誰もが目を奪われるその姿は、美の女神である「ヴィーナス」にも匹敵する程であった。俺はその人物を見た瞬間、見惚れると同時に、驚愕の表情にもなった。

「久しぶりね。一真」

飛行機の羽に腰掛けたまま、彼女は話しかけてきた。

「生きてたん・・・・・・・・・・ですね・・・・・・・・カナさん」

彼女、カナさんに向かって、俺は問いかけた。

「あら？意外に驚かないのね？」

「いろんなことがありましたからね。もうちょっとしたことじゃ驚きませんよ」

「そう……それにしても、あなたと最後に話したのは施設のことだったわね」

はい。でも、どうして急に、しかもこんなところで……

「それは、あなたに伝えるべきことがあったからよ」
俺に？

「ええ。一真、イ・ウーは知ってる？」
！！？

「知ってるのね。なら話が早いわ。実は、私はイ・ウーを内部から崩壊するためにここ何年か潜伏していたのよ」

飛行機の羽から飛び降りながら、カナさんは呟いた。

「イ・ウーにですか！！？」

「ええ。そして、イ・ウーを崩壊させるための、唯一の方法を思いついたの」

「本当ですか！！？」

「ええ」

俺はカナさんの言葉を聞いたとき、これほどまでに嬉しいことはなかった。イ・ウーを崩壊させることができる！！そうすればかなえさんの無実を証明できる！！カナさんはやっぱり凄い！！

「それで！！その方法は！！？俺にできることがあるならいくらでも手伝います！！」

これはアリアたちにも教えないと！！このチャンスに、イ・ウーを叩き潰すんだ！！それにカナさんが見方なのは心強い！！

「そう。なら、一真」

「はい！」

俺はまだ知らなかった。このときから、俺は最悪の展開に巻き込まれることを。まだ知らなかった。カナさんの桜色の唇がゆっくりと動き、告げた言葉は

「一緒に、アリアを殺しましょう」
え？

四十四本目 不可視の銃弾（前書き）

PV10万突破！！ありがとうございます！！

四十四本目 不可視の銃弾

なんだ？意味が分からない。今カナさんは何て言ったんだ？アリアを殺す！？

「な、なにいつてんですか！？カナさん！！冗談でしょ！！？」

「こんな時に冗談を言うつても？」

絶句した。今まで信じてきた相手に裏切られた気分だ。嘘だろ・・・
・・嘘だと言ってくれよ！！カナさん！！

「ねえ、一真」

！！俺は何故かそのときのカナさんの声に身震いを起こした。

「あなたは、手伝ってくれるわよね？」

その声は先ほどとは違い、とても冷たかった。まるで返答次第によつては殺すとも言っておるような雰囲気だった。だが

「すみませんカナさん。俺は、あなたの考えには賛同できません」
そう言つて俺は、鞘から鬼切を抜き、カナさんに向ける。

「そう・・・あなたも、キンジと同じことを言うのね」

キンジと同じこと？まさか！！？俺は、カナさんの足元を凝視した。そこには、まるでボロ雑巾のように横たわった、キンジがいたのだ。

「キンジ！！」

横たわっている友の名前を叫ぶが、返事は帰つてこなかった。

「大丈夫よ。少し気絶してもらっているだけだから」

足元にいるキンジ視線を落としながら、カナさんは言う。

「一真、もう一度だけ聞いわ。一緒に、アリアを殺しましょう」

いつだってカナさんは正しかった。ましてや、カナさんが誤った行動をしたことなど一つも無かった。俺を強くしてくれた。本当の意味での強さを教えてくれた。家族のいない俺にしてみれば、頼れる姉さんだった。困ったときはいつも助けてくれて、辛いときはその悲しみを受け止めてくれた。

「カナさん」

「なに？」

でも

「俺は、あなたに教わった。本当の意味での強さを。本当の意味での正義を」

今のカナさんは、違う。

「あなたは間違っている。以前のあなたは、そんなのじゃなかった」だから

「考え直してください。師匠^{カナ}さん！！」

俺が目覚ましてやる！！

「……………残念ね。あなたは、私について来てくれると思ったけど。結局は、アリアにつくのね」

カナさんが俺に言った刹那、カナさんの手が光ったと思うと、俺は天照をその場に落としていた。な、何が起こったんだ……………一カナさんの手が光ったかと思ったら、鬼切を手放した！？

「不可視の銃弾インヴィジブルをあなたに見せるのは、初めてだったわね」
不可視の銃弾インヴィジブル。文字通り、目に捉えられない速さで放つことだ。

「クッ！」

まさか、カナさんがこんな隠し玉を持ってるなんて。

「どうする？一真。今から私についてくれるなら、これ以上の痛みは感じないわよ」

銃口を向けたまま、カナさんが歩み寄ってくる。懐にある鎌鼬インヴィジブルをだそうと手を動かすが、またもや不可視の銃弾で防がれる。クソツタレ！！

「どうしても私に逆らうのね。一真」

銃口を向けたまま、カナさんが言う。そのときの声は、少し寂しそうに感じた。

「悲しいけど、キンジと同じように眠ってもらわ」
その瞬間、背中に痛みを感じ、俺は意識を手放した。

四十五本目 ヒステリアモード一真？

カナさんは、どうしてそんなに強いのか？

自分の信念を貫いてるから・・・・・・・・かな？

どういこと？

いずれあなたにも分かる時が来るわ

「カナさん!!」
「」

ガバツ！！と、俺は勢い良く体を起こした。当たりを見てみると、キンジの部屋だったことから、どうやら俺はベッドに寝かされていたらしい。

「！！そうだ！！キンジとアリアは！！？」

二段ベッドの上にいた俺は、すぐさま下に下りて、キンジのベッドを覗き込んだ。そこには、傷だらけではあるが、安らかに眠っているキンジの姿があった。キンジは無事か。俺は安堵の表情を浮かべ、ため息をついた。

「！！アリア！！」

ため息をついた後、カナさんが言ったことを思い出し、アリアの名を叫んだ。

「な、なによ一真！いきなり呼ぶからビックリしちゃったじゃない！」

ドアを開きながら、緋色のツインテール娘、アリアが返してきた。

「お前大丈夫か！！？怪我とかしてないか！！？」
俺は一目散に、アリアの元へ向かった。

「はぁ？何？どうしたのよ。私がどうかしたの？」

この口振り、どうやらまだカナさんとは合っていないみたいだ。俺は安堵の表情を浮かべた後、体中の力が抜けて、その場に座り込んだ。

「ちょ、ちょっと大丈夫？ホラ」

そう言つてアリアは、手をさし伸ばしてきた。俺はその手をつかみ、立ち上がった。

「ありがとう、アリア」

「いいわよ……ところで、どうしたのよ？いきなりあんなこと
言ってきて」

うーん……………どう答えるべきか。「お前を殺すつ
て言つてた奴と戦つてました」なんて口が裂けても言えない。仮に
言つたとしたら、目の前にいる横暴女王様はソイツを探しに行くだ
ろう。そしてそれをカナさんが仕留めれば、カナさんの思うつばだ。
こつなつたら……………

「いや、アリアみたいなカワイイ娘が傷ついていたらどうしようか
と思つたんだよ」

裏キンジみたいな口調でアリアに向かつていつてみると、顔を真っ
赤に赤面させていた。ははっ、どうやら俺には、女を口説き落とす
テクニクは無いようだな。って、ちよつとアリアさん？ガバメン
トヲナゼヌイテイルノデスカ？コレハチヨツトシタシャレデスヨ？

「な、なにキンジみたいなこと言つてんのよ！！風穴！！」

「ぎゃあああああああ！！！！！！！！！！」

断末魔の絶叫が、キンジの部屋に響いたのであった。

四十五本目 ヒステリアモード一真？（後書き）

はい、言ってませんでした。テスト中なので今回はここで開きにさせていただきます。誠に申し訳ありません。

あきらかに、タイトル詐欺ですね。内容とタイトルが合っ
てねえー
じゃねーか！！というクレームは覚悟してます（ー；；）

四十六本目 緊急任務

聞。そこには何も無い。唯一あるものと言えば、孤独、憎しみ、殺意、妬み、怨み、恐怖、絶望と、言った感情のみ。そんな負の感情が渦巻いている所に、俺は立っていた。

「ここは・・・」

とても息苦しい。まるで、ここだけ酸素が少ないみたいだ。それに・

「悲しい・・・」

先程から無数に聞こえてくる声。それは、とても気持ちの良いものじゃない。泣き叫びながら助けを求める者の声、絶望の淵に叩きつけられた者の声、殺意に満ちた者の声、断末魔の叫びを上げる者の声、復讐に染まった者の声。そんな声が、俺の頭に直接響いてくる。

「ヤメロ・・・やめてくれ・・・そんな声を俺に聞かせないでくれ・・・!!」

俺は頭を抱えてその場にしゃがみこんだ。嫌だ、聞きたくない!! ヤメロ!! やめてくれ!!!

お前のせいだ

「!!!?」

俺は咄嗟に頭を上げた。そして驚愕した。目の前には、ゆっくりとこちらに向かってくる人たちが広がっていた。顔中火傷で覆われた夥しい顔の人、眼球が抉られている人、手足がちぎれている人、首がもがれている人、体の半分が消し飛んでいる人が、俺の方にゆっくりと向かってきていた。いや、それだけならばまだ良かったかも

しれない。だが、俺の目の前に写っているのは、俺が守ると決めた大切な人たちだった。

お前があたしたちを見捨てたから

「お、俺はお前たちを、み、見捨てたりなんかしない!!」
後ずさりしながら、俺は緋色の髪をした女性と黒髪の男性に叫ぶ。
その声は、絶望に染まった者の叫び。

あたしたちが死んで、お前だけがのうのうと生きていることが
憎い

黒髪の女性と銀髪の女性が言ってくる。
ヤメロ・・・ヤメロ・・・ヤメロ・・・!
ヒタ、ヒタと、ゆっくりと俺に近づいてくる。

お前も一緒に連れていく
金髪の女性と緑色の髪の女性が言ってくる。
嫌だ・・・嫌だ・・・嫌だ・・・!
徐々に徐々にと、俺に近づいてくる。

結局お前は、何も守れやしない
ツ!!!?俺はその声に驚愕した。その声は、俺が生まれた瞬間から
共に歩んできた声だったからだ。目を見開いて見ると、ソイツはい
た。全てを覆い尽くすような黒い髪に、鮮血で真っ赤に染まったよ
うな目をした男。

お前は弱い
ヤメロ・・・ヤメロ・・・!

力が足りない

「はあ！！！？」

俺は、勢い良くベッドから起きた。

「ハア、ハア、ハア、ハア・・・」

呼吸を整えながら、俺はゆっくりと息を吸う。顔を触つてみると、汗だくだった。

「さっきのは・・・・・・夢・・・？」

夢がよかった。いや、夢であつてほしい。

「さっきのは一体・・・・・・」

手で汗をふき取りながら呟いていると、ケータイの着信音が響いた。見てみると、キンジからだった。

「なんだ？」

俺はケータイを開いて、メールの受信ボックスを開いてまたもや驚愕した。その内容とは『アリアとカナが戦ってアリアが負けた！！
アンビュラス救護科で今治療中だ！！』だった。俺はすぐさま制服に着替えて救護科に（アンビュラス）に飛んで行った。

（クソッ！！アリア！！無事でいてくれよ！！）

救護科。^{アンビュラス}事件などで負傷した人たちを救うための医療知識を積んでいる学科。早い話、医者を育成する学科だ。そんな救護科^{アンビュラス}の生徒たちがいる部屋のドアを、俺は蹴飛ばして中に入った。

「大丈夫か！？アリア！」

中に入った俺は、アリアの名を力いっぱい叫んだ。

「大丈夫だ。今は眠っているだけだ」

俺の叫びに答えたのは、このことを教えてくれたキンジだった。

「そうか・・・」

よかった。あんな悪夢を見た後だったから、アリアが無事で本当に

よかった。

「…………どうした一真？なんかお前……顔色悪いぞ」
キンジに指摘され、俺は不意に近くにあった鏡を見る。確かに、少し青くなってるな。

「ああ…………物凄くタチの悪い夢を見たからな…………」
俺がそう言うとキンジは「そうか」と、言っただけは終わった。

「ちょっと来い遠山」
突然、外からキンジを呼ぶ声が聞こえた。この声…………

「ジャンヌか」
俺が言うよりも前にキンジがボソリと呟き、外に向かった。ついだから、俺も付いていくことにした。外に出ると、何故かジャンヌは右足を包帯で巻いており、杖について立っていた。

「なんだ…………一真も一緒だったか…………」

「なんだよ…………俺が一緒じゃまずいのか？というか、その足はどうした？」

ジャンヌの言い方にカチンと来た俺は、ケンカ腰でジャンヌに問いかける。

「いや…………遠山一人だと思ったのでな。それとこの足は足にコガネムシみたいなものが張り付いていてな。私は驚いて道の側溝に足をはめてしまった。そこをちょうど通りかかったバスにひかれたのだ」

「おいおい…………」

「マジでか」

俺もキンジもどいう顔をしていいか分からなかった。だって、コガナムシ的なものに驚いてバスに惹かれましたただぜ？どんな事故だってツツコミたくなる。

「まあ、それより、これを見る」

そう言つてジャンヌは、一枚の紙を出してきた。

「ん？なんだ？『遠山キンジ 1・9単位不足』だとよ。よかったなキンジ、留年だつてよ。あかりちゃんたちと頑張れ」

「よくねえーよ！俺は武偵をやめるんだ。留年なんてしてたまるか」
そうはいつてもなあ……単位が不足してんじやどうしようもならないしなあ。

「そんなお前にホラ、クエストブースト緊急任務を持つてきてやつたぞ」
そう言つてジャンヌは、また新たな紙を出してきた。

「なにになに？『カジノピラミディオン台場の私服警備。単位は1・9』おつ！これがいんじゃないか？キンジ」

「そうだな。じゃあそれにするか」

「決まつたみたいだな。なら私は行かせてもらつ」

「あ、ジャンヌ。手、かそうか？」

「いや、大丈夫だ」

ジャンヌはそう言つと、杖を付きながらあるいていった。しかし、なんだ？この胸騒ぎは……

四十七本目 仲間割れ（前書き）

久しぶりの投稿です。はい。いいわけですが、ガンダムEXVSや
ってました。

超おもしろかったです！

四十七本目 仲間割れ

あの後、ジャンヌと別れた俺は一人ネットカフェに来ていた。理由？まあ、落ち着けて。それは今から分かることだからさ。

「つと、来た来た」

そう言っただけ俺はノートパソコンの画面に目をやる。そこには、真っ黒な画面に「K」とついた映像が映し出されていた。

「どうだった？あつたか？」

俺は画面に向かって、まるで友人と話すように親しく話しかける。

『むこうのデータベースにあったわ。ついでだから奪ってきたわ』
さいですか。

「教えてくれ」

『ええ。カナは遠山金一がヒステリアモードになるための姿よ』
やっぱり……

『彼はカナになることで自由にヒステリアモードになることができ、長時間に渡ってヒステリアモードを持続することができるわ』
簡単に言っと、キンジのヒステリアモードより上のヒステリアモードか……

『ただし、それ相応のリスクはあるみたいだけど』
それが多分……長期睡眠……

「分かった。サンキューな、あ……川嶋」

『いい加減本名で呼ばうとするクセ直しなさい』
すいません。

『ああ、それと』
ん？

『イ・ウーの元No.2「砂礫の魔女」の異名を持つ「パトラ」には気を付けなさい』

「……………どういうことだ？」「元」って意味も踏まえて詳しく教えろ。

『パトラは、自称「クレオパトラ」の子孫。砂を操る超能力者で、世界最強の超偵である「紫電の雷神」には劣るけど、そのGは25。並みの超偵を遥かに凌駕してるわ』

紫電の雷神には劣るが、そのGは25、か。またやっかいな……………
・

『パトラはピラミッド状の建物が近くに存在するだけで、無尽蔵に魔力を使えるようになるわ』
なんだよそれ！？チートじゃねえか！！？

『要するに、あんたがスタミナ切れしたら負けってこと。まあ、でも安心しなさい。パトラは今もイ・ウーにはいないから』
イ・ウーにはいない？

『さっきも言ったけど、パトラは「元」No.2。パトラは、組織から追放されたのよ』
追放って……………どんだけ手に負えなかったんだよ……………

『じゃあ、そろそろお開きでいいかしら？生憎私はあんたと違って忙しいの』

ケツ、嫌味な奴。

「ああ」

俺がそう言つと、画面から「K」の文字は消え、残つたのは黒い画面だけとなった。不意に時計に目をやると、5時を軽く過ぎていた。

「さてと……俺もそろそろ帰りますかな」

そう言つと俺はノートパソコンを閉じ、それをカバンに入れながら立ち上がって通路へ歩いた。

（紫電の雷神並みに強い相手、ねえ……………出会わないことを祈るぜ……………）

俺はそんなことを思いながら、ネットカフェから出ていった。

ネットカフェから出た俺は、キンジの部屋へと繋がる階段を登っていた。

「遺伝子好きの吸血鬼の次は、魔力が尽きないチート魔女、か……
……本当に化け物揃いだな、イ・ウーは」
階段を一段一段と登りながら、一人で愚痴を零していた。

「ま、チート魔女は必ずしも出会うということはないだろう……
……」
いや、そうであって欲しい。ピラミッド状の建物があるだけで魔力が尽きることもない最強モードになれる相手を倒せるほど、俺は強く無いからな。と、そんなことを考えているうちに、キンジの部屋の階についたそのとき

「うおっ！！？」

ビュン！と、俺の横を何かが通り過ぎていくを感じた。俺は直ぐ様後ろを振り返ってみると、長い緋色のツインテールを揺らしながら、階段を駆けていくアリアの姿が目に入った。

「なんだ？アリアの奴、どうしたんだ？」

そんなことを考えながら、俺はキンジの部屋に向かった。そこにつくと、キンジの部屋の扉が開いていた。さっきアリアが飛び出したんだろう。そう心で呟き、キンジの部屋をのぞき込んだ。そして、俺は恐らく驚愕の表情になったであろう。いや、なったのだ。ある人物の顔を見て。

「あら？帰ってきたのね、一真」

エメラルドのように輝く緑の瞳をこちらに向けて、その人は満開の桜を思わせる唇で話しかける。

「カナさん！！？」

そう、目の前にいたのは、以前アリアと一緒に殺そうと、俺とキンジに持ちかけてきた張本人である、カナさんだった。

「一真！！？アリア見かけなかったか！？」

俺が驚愕していることを、知ってか知らずか、キンジが俺にもの凄い勢いで話しかけてきた。

「あ、ああ、さっきそこですれ違ったばっか………まさかカナさん！！あなたアリアに……！！」

アリアを脅した可能性のあるカナさんをきつく睨んだ。

「私より、最後のはキンジに非があるんじゃないかしら？」
「！！？」

カナさんの一言に、今度はキンジをきつく睨んだ。

「どういうことなんだ？キンジ・・・」

「・・・アリアがカナに迫ってきたんだ。それで・・・」
咄嗟にその銃で威嚇射撃をした「・・・ああ」

キンジの手に弱々しく握られていたベレッタを見て、俺はキンジに言った。無理もないか。キンジにとってみれば、カナさんが生きること事態異常なんだ。それをアリアに詮索されてみれば、思わずカナさんからヒステリアモードのことが暴露されるかも知れないと考えた結果、威嚇射撃しなかったのか。

「まあ、アリアは任せろ。俺がなんとか説得しといてやる。だからお前は、とりあえずあの人をカナさんどうにかしろ」

「・・・悪い」

俺はキンジにそう言っていると、キンジの部屋から出ていった。今日は大変だな・・・色々と・・・

キンジ side

「随分とアリアに好かれていたわね」

「何呑気なこと言ってたよ。あんたのせいだぞ、何もかも」

自分のせいで俺がそれだけ苦しい思いをしたのか、まるで他人事のように振舞うカナに、俺は怒りを覚えた。

「それに、久しぶりに一真をよくみたけど、相変わらずだったわ」
「そうだ、カナには聞くことがあった。」

「カナ、いつから一真と知り合ってたんだ？」

「7、8年前頃かな？一真がいきなり私に「強くなりたいです！
！弟子にしてください！！」って言うてきたのをまだ覚えてるわ」
「そんなこと、俺は教えてもらってないぞ。」

「あら？ヤキモチかしら？」
「ちげーよ。」

「ふふふ、本当に似てるわね。一真とあなた」
「あんなおもしろい物を毎日探しているような奴と一緒にしないでく

れ。

「・・・・・・・・キンジ」

ブリッ！と、さっきまでの優しい表情が嘘だったかのように、カナの顔が険しくなった。

「気を付けなさい。あなたたちには、今まで以上に強大な敵が・・・・
・迫ってきている・・・・」

ゴクリ、と、息を飲む音だけが、部屋に響いた。

「それと、一真もよろしくね」
「どういうことだよ？」

「あの子、他人のために、平気で無茶しちゃう危ない子だから、キンジ。あなたが止めてあげて」
・・・・・・・・ああ。

「それじゃあね」

カナはそれだけ言っと、部屋から出ていった。

四十八本目 関係

キンジの部屋から颯爽と飛び出した俺は今……

「やべエ……俺アイツの部屋知らなかった」

公園のベンチで頂垂れていた。迂闊だった、アイツの部屋一度も行ったことないんだっけ。というか、そういうことは早めに気づいかけよ……俺……

「はあ……」

周りから見れば、完全に「近づかないでください」的なオーラを出した状態で下を向いていた。そのとき

「あれっ？一真先輩じゃないですか？」

聞き覚えのある声が、俺の耳に響いた。俺は咄嗟に頭を上げて、その声の主を確認した。その声の主は、茶髪に白いリボンを両サイドに付けた、元気だけが取り柄のバカなあかりちゃんみたいな娘だった。というか、あかりちゃんだった。

「今失礼なこと考えてませんでした!？」

とまあ、そんな彼女のツツコミは置いといて。

「置かないでくださいよ!？」
はいはい。

「まったく……ところで、どうしたんですか？そんな「会社をクビになった人」みたいなオーラ出して」
例えがつまらん。

「ほつといてください!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ、そうだ!

「あかりちゃん!」

俺はベンチから勢い良く立って、あかりちゃんを凝視した。

「な、なんですか?」

「あかりちゃんって、アリアと戦姉妹アミカだよな!」

「ええ、まあ、そうですね」

「アリアの部屋知ってる?」

「知ってるも何も、同室ですよ。それがどうかしたんですか?」

「いやね、アリアとキンジが喧嘩しちゃってさあ。アリアの奴カンで、キンジの顔なんか見たくないってオーラ出してんのよ。でも、その状態じゃ俺も居づらいわけ。そこで、二人を仲直りさせようとアリアの部屋に行こうとしたんだけど・・・・・・・・」

「その部屋が分からず、こうして頂垂れてるってことですか?」
その通り。

「いいですよ」
マジですか?

「一真先輩には戦姉妹契約アミカの時のお返し、まだしてませんし、それくらいお安い御ようですよ」
なんということだ。ここに来てまさかの助け舟が来るとは。あかり

ちゃん、君は稀に凄いね。

「また変なこと考えてませんでした!?!」

いやいや。それより、さっさとアリアの部屋に向かおう!!

「そっち逆方面ですよ……」

15分後。

なんやかんやでアリアの部屋の前まで来た俺とあかりちゃん。

「さて、来たのはいいが……」

「どうやったら、あの横暴女王様アリアと話ができるか……だな。

「ま、なるようになるだろ」

「そう言っただけ俺は玄関の扉を開いた。」

ザクッ！！

気持ちいいほどいい音を立てて、俺の額に一本のクナイが刺さった。

「……………」

しばらく機能停止状態に陥り、そして……

バタン！

前方に俺は倒れた。

「プクッ……か、一真先輩！？」

俺の名を呼びながら、駆け寄って来るあかりちゃん。というか、ちよっと笑ったろ、コラ？

「だ、大丈夫だよ。あかりちゃん」

「そう言っただけ俺は体を起こしながら、額のクナイをゆっくりと引き抜く。痛ったたた……」

「一真？」

俺の声とあかりちゃんの俺を呼ぶ声が聞こえたのか、部屋の奥からアリアが顔をだしてきた。

「あんた……何しにきたのよ？」

警戒心全開の眼差しで俺を見てくるアリア。まあ、多分気づいてると思うが……

「アリアよお。キンジと喧嘩したんだってな？」

俺がそう言うのアリアの目は、見る見る内につり上がっていった。

「あれはあたしは悪くない！！全部キンジとカナって奴だ！！」

「まあまあ、落ち着けって」

「あんたもカナの知り合いなんですよ！！？なによ！！みんなしてカナカナカナカナって！！！あんな女のどこがいいのよ！！？」

おい、それも漫画のサブヒロイン的なセリフじゃねえーか。

「カナって誰なんですか？」

うーん……あかりちゃんにはどう答えよう……

「あー……その……なんだ？キンジの姉さん？」

「なんで疑問形なんですか？」

いやだって「正体は男です！！」なんて口が避けても言えないし。というか、言ったらカナさんにスタボロにされる……

「あかり。悪いけど、部屋で待っていてくれないかしら？」

おっ！ナイスだアリア！

「分かりました」

愛しのアリア様にそう言われたからなのかどうかは知らないが、あ

かりちゃんは部屋の奥へと向かっていった。

「さてと、一応言っておく。キンジはカナさんに好きとかそう言った恋愛感情は持っていない。むしろ・・・・・・・・・・親近感。つまり、兄弟みたいな感じ、かな？」

「親近感？」

「そう。キンジにとってカナさんは、頼れる姉さん、って感じだろうな。俺もだけど」

「でも・・・・・・・・・・理子がカナに変装しているときのキンジ・・・・・・・・・・デレデレしてた。

あの理子^{バカ}。

「あー・・・・・・・・それは、あれだ。キンジは、カナさんがもうとっくに死んでる思ってたんだ。それで踊りただけだろう」

「じゃあ！キンジがあたしに向けて銃を撃った理由はなんなのよ！？」

「・・・・・・・・・・アリア」

「何よ？」

「アリアがさあ、例えば誰に知られたくない秘密を持っていたとしてよ」

「あたしに秘密なんかないわ」
「例えだっつってんだろ。」

「例えばの話だ。それで、それを他人に詮索されたいか？」

「されたいわけじゃないじゃない。なんで他人に知られなくちゃならないのよ」

「それと同じで、キンジもアリアに知られたくない秘密があったんだ。だから、咄嗟に手が動いてしまっただけ。悪気があるわけじゃないんだよ」

そう言くとアリアは、バツの悪い顔を始めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・分かった」
ほっ。

「そうか、なら俺は帰らせてもらうな」
俺はそう言い、玄関の扉をゆっくりと開いた。

「アリア」

「何？」

「これだけは覚えておけよ？キンジは絶対に、お前は裏切らない。無論、俺もな」

その一言だけ告げ、俺はアリアの部屋から出ていった。空を見上げてみると、あたりは星空で埋まっていた。

「そうか、もうすぐ七夕か」

無数に広がる星空を眺め、俺は一言そう呟いた。

四十九本目 七夕と氷の騎士

七夕。年に一度だけ、織姫と彦星が天の川を渡って出会えると言われている日だ。まあ、分かりやすく言うと、恋人たちの日だ。そんな七夕の日の夜。祭囃子で賑わう夜店の中、星で埋まった空を見上げながら、俺と銀色の髪をした氷の騎士、ジャンヌ・ダルクは歩いていた。

「・・・はあ」

ジャンヌにバレないようにため息を吐いたつもりだったが・・・

「どうした？一真」

どうやらバレてしまったようだ。

「いや・・・なんでも・・・」

咄嗟に言い訳を考えるが、俺はこういうことにすぐ頭が回らない。下手に言うのはやめ、ここは口ごもることにした。

「そうか、ならばいい。今宵は七夕とやらを堪能しよう」

少し違うんだけどね。心の奥でツツコミを入れる俺であった。さて、まだジャンヌとここにいる経緯を話していなかったな。時間は遡るほど1時間前、彼女、ジャンヌが俺の部屋にお仕掛け「七夕祭り」やらに行くぞ！付いてこい！」と、それだけ言うと、俺を氷漬けにし、ここまで連れてきたのだ。これは拉致とよんでも過言ではないというか、拉致以外ありえん。逃げようとしたのだが、足を氷漬けにされ「逃げたら殺す」的なオーラを出され、逃げずに付いていくほうが寿命を延ばすことができる考えた結果、今に至る。しかし・・・

「?どうした?そんなにジロジロと見て」

いやいや、これを見られずにいる方がどうかしていると思うぞジャンヌ。今のジャンヌの格好は、雪の結晶のような薄い青色をした柄のない浴衣だ。彼女は名前の通り、日本人ではない。だが、ジャンヌの整った外国風の顔立ちに、日本ではなかない銀髪により、上手く和と洋のギャップが取れている。古来より日本の服として使われていた着物をこும்上手に着こなす外国人は、俺の知る限り彼女しかないだろう。

「いや、その格好、カワイイと思ってさ」

やべっ!不意に口走っちまった!ありのままを素直に伝えるのはいと思うけど、今のはダイレクト過ぎたか!!

「か、かかわわわ!!!!!!!!!!」

咄嗟に謝罪しようとジャンヌの顔をみると、何故か顔が真っ赤に赤面していた。な、なんだ・・・?

「お、おい、大丈夫か?」

「あ、ああ」

まだ若干赤面させたままではあるが、元に戻ったみたいだ。

「大丈夫か?熱でもあるんじゃないか?」

「だ、大丈夫だ!問題ない!」

そ、そうか。やけにテンションの高いジャンヌに、俺は何も言えなかった。

「さて、まずは何する?」

強引につれてこられ、帰りたかった俺の気持ちも、祭りの賑わいのおかげですっかりその気は無くなったみたいだった。

「う、うむ。では、これなんかどうだろうか？」

そう言っただけで、ジャンヌが指したのは、祭りの定番金魚すくいだった。

「おっちゃん。金魚すくい二人ね」

「はいよ。兄ちゃん、彼女とデートか？うらやましいなちくしょう！」

「おい、そんなこと言わないでくれよ。お世辞でもそんなこと言ったらジャンヌの奴が赤面する……って、もうしちゃってるよ……」

「おいジャンヌ」

渡されたポイとお椀を持って、ジャンヌを呼ぶが……戻るかねえ？

「は……！」

「は……！」　って……お前は何を想像してたんだ……

「ホレ、ポイとお椀」

そう言っただけで、ジャンヌにポイとお椀を渡す。

「あ、ああ。ありがとう」

ジャンヌはそれを受け取ると、金魚のいる水槽に顔を近づけた。まさか……

「おいジャンヌ。一応言っておくが、凍らせるのは無しだぞ？」

「な！？そうなのか？」

「つておい！本当に凍らせる気だったのかよ！？何考えてんだよコイツは！？前代未聞すぎだろ……！？」

「そうだ。氷なんか使ったら、金魚が御陀仏しちまう。自力で取れ」

「わ、分かった」

「つく。」

「さてと、俺もしょうかな？」

俺はそう呟くと、その場にしゃがみこんだ。そして、水に浸からないうちにポイで金魚をすくおうとするのだが……

ポチャン

ポイの上に乗った金魚が以外にも暴れん坊だったためか、ポイはすぐに破けてしまった。この間、僅か3秒。まさしく秒殺。相変わらず苦手だな……コレ……

破れたポイとお椀をおっちゃんに返すと、おっちゃんが同情するかのような眼差しを俺に当ててきた。その目マジでやめて、俺結構、メンタル精神弱いから……

「さて、ジャンヌはどうな……」

不意にジャンヌの方を見ると、俺は啞然とした。無論、屋台のおっちゃんもだ。なぜなら、ジャンヌのお椀には、溢れんばかりの金魚の山ができていたのだ。

「む？どうした一真。もう終わったのか？」

ジャンヌがそう言った後、おっちゃんが肩に手を当て、俺に先ほどと同じような眼差しを向けてきた。あれっ？なんだろう……

目が霞んで前が良く見えないや・
・
・
・
・
・
・

その後の俺たちは、射的に、輪投げ、焼きそばを買って食ったりと、祭りを堪能した。ただ、屋台に行くたびに、デートだのお似合いだの、カワイイだのと言われ、言うまでもなく、ジャンヌはショートしまくった。まあ、それもそれで面白かったんだが……

「どうだったよジャンヌ。七夕祭りの気分は？」

「悪くない。日本はとても愉快的な国だな」

そうかい。そんな会話をしながら歩いていると、俺はふと思った。

「そうだ、短冊でも書くか」

短冊。それは、宇宙^{ソラ}にいる織姫と彦星に願いを聞いてもらうために書く手紙のようなものだ。

「短冊？なんだそれは？」

「まあ、ようするに、願い事を書く紙みたいなモンだ」

「？」

おいおい、ここまで言えば分かるんじゃないのか？

「付いてくれば分かるさ」

そう言い俺とジャンヌは、沢山の短冊が吊るされている笹の葉に向かった。

「さてと……何を書こうかな……？」

短冊を書こうと提案したのはいいが、何を書くといいか考えておけばよかった。不意にジャンヌの方を見ると、何やら楽しそうだった。

「ジャンヌ、なんて書いたんだ？」

「な！？な、なにを書こうが私の自由であらう！？」
そりゃそうだが・・・どうしたよ？

「い、いや、なんでもない。それより！女である私の願いを聞こう
とは無粋だと思わないか？」

むっ、確かにそうだったな。悪い。ジャンヌに軽く謝罪をすると、
俺は自分の短冊に戻った。うーん・・・

・・・そうだ！
頭をフル回転させ、書く事を考え出した俺は、それを素早く書き、
笹の葉に付けた。

「一真、何を書いたんだ？」
さっきのお返しか、ジャンヌが意地悪そうな顔で聞いてきた。

「別に」

「教えられないほどのものなのか？」
こついう時って、女はせこいよなあ。

「・・・知ってるか？願い事を他人に教えると、叶わなくな
るんだぜ？」

「なに？・・・そうだったのか」
こんな見え見えの嘘に引っかけられてありがとさん。

「さて、そろそろ帰るか」
そう言つと俺は、ジャンヌと共に、星空の下を歩いていった。

五十本目 風の便り

七夕祭りの後日、部屋に戻ってきた俺が見たものは地獄絵図と呼ばれるでも過言ではないものだ。部屋の所々には銃弾で開けられたであろう穴が無数に広がっており、玄関付近に飾ってあった骨董品等は全て破壊され、拳銃の果てには俺の所有物であるP〇3や、P〇P等の残骸が転がっていた。そして、そこには鬼がいた。長いツヤのある黒髪と白い巫女装束の格好をし、手には銃刀法違反を軽く犯している「M60マシンガン」を手にした鬼が立っていた。それと対峙するかのようには、緋色の髪をした少女が立っていた。というか、白雪とアリアが喧嘩と呼んでも良いのか？というレベルの争いをしていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

絶句。それしかしようのないほどの状況だった。脳をフル回転させ俺が導き出した結論は

ボタン

何も見なかったことにするだった。

[illegible]

太陽の沈むなか、公園のベンチに座り、俺はため息をつきながら考えていた。そういえば、キンジが今日カジノ警備のための荷物が届くと言ってたな。ここからは俺の想像だが、恐らくこうなったのではないだろうか？

荷物が届く〓 >キンジとアリアが何かやらかす〓 >そこに白雪乱入
〓 >誤解してM60乱射〓 >地獄絵図

「・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・」

ため息をつくしかないぞこれは。太陽の沈むなか、先程の地獄絵図を思い返しながら、俺はため息をついていた。そのとき

「ワァン！」

と、叫ぶ声が聞こえたかと思うと、俺の背中に白銀の毛並みをした狼が飛びついてきた。って狼イイイイイイ！！？

「ちよっ！！？な！！？離れろっ！！？」

狼を振り払おうと必死にもがくが、中々離れない。なんなんだ！！？
？新手的敵か！！？警戒心MAX状態で狼を振り払いながら周囲を見渡すと、見慣れた少女が目に見えた。

「ハイマキ、落ち着きなさい」

少女がそういうと、俺の背中に付いていた狼は、渋々といったような顔で俺から離れていった。た、助かった。俺は思わずその場に座り込んでしまった。

「大丈夫ですか？一真さん」

その少女は、座り込んだ俺に手を貸してくれた。俺はその手を取ると、ゆっくりと立ち上がった。

「助かったよ、レキ」

少女、レキに俺は一言そう言った。

「この狼はレキの？」

俺はその場で大人しそうに座っている白銀の狼を指して聞いた。

「はい。名はハイマキと言い、種類は絶滅危惧種のコーカサス白銀狼です」

それ確か前にキンジに聞いたことがあるぞ。確か襲ってきたところをレキと一緒に捕まえて、レキが武偵犬として飼うとか言ってたな。無理がるんじゃないか？とキンジに聞いてみると、レキが言うには「あまり変わりません」と答えたんだったな。

「ふん」

レキに言われ改めてハイマキを見ると、それ程怖くなかった。さっきまでは警戒心MAXだったのに、今じゃ少しも感じない。その場にしゃがみこんで、そつ、とハイマキに手を出してみると、舌でペロペロと舐め出してきた。へえ、中々カワイイ奴じゃないか。

「一真さん」

「ん？」

「あなたもカジノ警備の仕事に参加されるようですが……」
「……十分に気を付けてください」

レキがそう言い放った瞬間、猛烈な風が「ビュウ！」と、音を立てて吹いた。

「………どういう意味だ？」

「良くない風が吹いています。熱く、そして何よりも邪悪な風が・・」

周りの空気が先ほどと一変するように感じた。それほどレキの言葉は重く、そして威圧感のある言葉だった。

「邪悪な・・・風・・・」

「ええ。ですから、十分にお気を付けてください」

「・・・女に心配されるようじゃ、俺もまだまだだな。」

「ああ。分かった」

「では私はこれで」

レキはそう言いつと、ハイマキと共に歩いていった。残された俺に残ったのは、なんとも言えない胸騒ぎだけだった。

五十一本目 滅びへの序唱

太陽がギンギンと照らす中、俺たちはカジノに来ていた。勘違いするなよ？俺たちは遊びに来たんじゃないぞ！依頼クエストで来んだからな！
ク・エ・ス・トで！！

「誰に言っただよ？」

隣で流れ出る汗を拭き取りながら、この依頼クエストを受けた張本人、キンジのツツコミが俺に炸裂した。

「誰にも言っただえーよ。というか、元々はお前の為にやってんだぞ？青年IT社長殿？」

そう言いながら、俺はキンジの肩を軽く叩く。

「それは感謝してるさ。青年IT部長様？」

皮肉には皮肉で返すか……。まあ、一度こういう役やってみたかったからいいけどよ。今俺たちは「武偵」ではなく「青年IT社長&部長」としてカジノ側からGメンを貰っている。つまり、俺たちはこの格好で警備をすることになる。

「さてと、では参りましょうか？社長殿？」

「そうだな。部長」

キンジと奇妙な会話をしながら、俺たちはカジノピラミディオン台場に入っていた。

カジノピラミディオン台場。東京のお台場に建造されたもので、その名のと通りピラミッド状の形をしている。余談だが、俺はこの形が最近苦手になってきたりしていた。というのも、川嶋に「パトラはピラミッド状の建造物があるだけで、魔力を無尽蔵に生み出せることができる」と、言われた事を思い出し、パトラが出るんじゃない

いかと思ってしまう。まあ、川嶋^{アイツ}は多分現れないだろうと言っ
てはいたが、やはりあんな事を聞かされては、出てしまふと思わなくて
も思ってしまう。俺とキンジは、入口を抜け、巨大なカジノホール
へと足を運んだ。

「両側を頼みたい。今日は青いカナリヤが窓から入ってきたんだ。
きつとツイてる」

と、キンジはカウンターで、まるでプロのカジノプレイヤーのよう
な口調で、このカジノから支給された偽札1千万円を、赤、青、黒
といった、色とりどりのチップと交換^{トレード}してもらふ。ちなみに、先程
の言葉は俺たちが今回の依頼^{クエスト}を引き受けた武偵だということを知ら
せるための合言葉だ。

さて、俺も合言葉言っ^{トレード}てチップと交換してもらおうと。

「赤と青はどちらが好きかって？もちろん白さ」

と、何故か俺だけ意味不明な合言葉だった。というか、この合言葉
考えた奴誰だよ？完全に悪ふざけだろ？まあ、俺も大量のチップと
交換^{トレード}してもらったからいいけど。

「さて・・・キンジ。一緒にポーカーでもしないか？」

「いや、俺はアリアと白雪を見てくる」

あ、そう。じゃあまた後でな。キンジに一言そう言い、俺はポーカー
へと向かった。

数分後。

俺の手持ちの１千万分のチップが、あっという間に８千万分のチップに早代わりしてしまった。俺は普通にポーカーをしていたつもりなのだが、なぜかフォー・オブ・ア・カインや、ストレートフラッシュ、はたまたロイヤルストレートフラッシュが出まくり、数分もしないうちに俺は周りの人から「ポーカーキング」と二つ名を付けられてしまった。それはまだいいのだが・・・俺の周りにはいつのまにか「ポーカーキング護衛隊」とでも言わんばかりの人が集まっていた。さ、さすがにこれはきつい・・・

そう思った俺は、席を立って、賭け金最低１００万円が絶対であるルーレットフロアの二階に向かった。余談だが、俺の後ろで「また実力をみせてくれよぉー！」等の声が聞こえていたが、もう多分ここにはこないだろう。というか、来たくない。

二階は一階と違い、大勢の客が集まっていた。恐らくこの全ての客が、世界中の大手企業の社長やその御曹司であろう。例外なのは、俺たちだけだな。

そんなことを思いながら辺りを見渡すと、なにやら大勢の人ばかりが出来ていた。そこには、黒いスーツに身を包んだ男と、緑色の髪をし、茶色いチョッキを羽織った少女、レキがいた。ちなみに、レキはこのルーレットのディーラーだ。

「では、次のプレイヤーは賭け金をどうぞ」
いつもと変わらぬポーカーフェイスで、レキは相手の男性へ話しかける。

「は、ははっ……この僕が1時間もしないうちに3500万も負けるなんて。なんて強くて可憐なディーラーなんだ」

それはそうだ。というか、レキと心理戦で勝負したら負ける確率が圧倒的だ。あのポーカーフェイスに耐えられる奴はまずいないだろう。

「僕の残りの手持ちは3500万ある。僕はこれを全て黒に賭けよう！」

男性は1枚100万のチップ全て、つまり35枚を黒のマスに置いた。これがあの男性に当たれば、3500万の二倍の、7000万円分のチップを手に行うことができる。

「黒ですね？ではこの鉄球が黒に落ちれば配当は二倍です」

「いや、配当はいらない。が、代わりに、君を貰う」

っておいおい。いつの時代の口説き方だそりゃ？というか、裏キンジでもそんな口説き方はしないぞ？先ほどの男性の発言により、周りがいつきにざわめいていく。こりゃめんどろだが………しかたねえ。

「おい兄ちゃん」

俺は男性の肩を軽く叩いて振り向かせる。

「なんだ貴様は？」

なにコイツのこの態度。思わず殴っちまうところだったぜ。

「ギャンブルで女賭けようなんて恥ずかしいと思わねえのか？ 女は自力で手にしてこそ価値があるモンだろ？ それとも、あんたには男としてのプライドってモンがねえのか？ 兄ちゃんみたいな奴がいると不愉快だ。今すぐ出て行ってくれ」

「何を突然言い出すかと思えば………大体貴様は何だ？ 僕は今彼女とゲームをしているところなんだ、邪魔をしないでくれな
いか？」

腹立つわコイツ………

「そう言われて引き下がるほど俺も柔じゃないんだよ。これが最後だ。今すぐ荷物まとめて出て行け」

「この僕にそんな生意気な口を聞くとは、いい度胸じゃないか？ いや、こういう場合は無謀と呼ぶに相応しいかな？ はははははは！ ！」
ブチッ！ このクソ野郎、ぶっ殺す！ 頭に血が上ってしまい、右手を振り上げようとしたそのとき

バツ！

と、勢い良くレキの後ろからハイマキが飛び出し、フロアの隅からこちらに向かってきた奴に体当たりを食らわせた。奴が勢い良く倒れた瞬間、会場に不穏な空気が漂ったかと思うと、客の悲鳴によりそれはすぐさま消えていった。パニック状態になった客たちを押し
のけながら、俺とレキは奴の居場所に向かった。そして、俺は繭を細めた。ソイツは、体は黒塗りされた人間なのだが、頭だけが人で
はない。その姿は、古代エジプトに代々伝わる「リコポリスの守護
神」「聖地の主人」と、謳われ続けてきた「アヌビス」にそっくり
だった。

「何だコイツ！ ！？」

ソイツ、アヌビスは「ムクツ」と、倒れた体を起こし、俺たちに向かってきた。その手には、使い古された斧が握られていた。俺は懷から咄嗟に鎌鼬カマイタチを取り出し、柄から抜いた。アヌビスがこちらに向かって斧を振り上げてくるが、俺の方が早い！！

「風斬！！」

鎌鼬を素早く振るい、刀身から出現した風の刃がアヌビスを真つ二つにする。アヌビスが崩れ落ちるが、アヌビスから砂鉄がサラサラと落ちだした。コイツまさか……超能力で作られた人形か何かか……？だとしたら……

「一真！！レキ！！どうした！！？」

アヌビスを1体仕留めたと同時に、後ろから聞きなれた声が聞こえてきた。俺は咄嗟に後ろを振り返ると、彼らはいた。

「キンジ！！アリア！！白雪！！」

後ろから全速力で走って来てくれている彼らを見て、俺は彼らの名前を叫んだ。だが、そのままの体制でいることは無く、俺は直ぐに天井を見上げた。そこには、先ほど倒したアヌビスが10体ほど張り付いていた。

「チィ！キンジとレキは援護を頼む！！アリアと白雪は前線してアイツらを！！それと白雪はこれ使え！！」

俺は白雪がイロカネアヤメを盗まれたと話したことを思い出し、白雪に向かって、懷から鬼切を投げ渡した。白雪が受け取ったのを確認すると、俺はアヌビスたち目掛けて鎌鼬を振るった。

「風斬！！」

天井に向かって風の刃を出現させるが、それに当たったのは僅か2体だけだった。クソッ！学習能力はあるってか！？

そんなことを呟きながら、残りのアヌビスに近づいていく。目の前のアヌビスが斧を振り上げようとするが、それはレキの狙撃によって中断される。その隙にアヌビスの胴体を真つ二つにする。不意にキンジたちの方を見てみるが、言うまでも無く圧倒していた。キンジがベレッタでアヌビスの動きを封じ、その隙にアリアや白雪がアヌビスを倒す。こちらはレキが援護射撃。おいおい、最高のチームワークなんじゃねえーかと、不意に前に目をやると、2体のアヌビスが俺に飛び掛ってきていた。

「おっと」

俺はそれを軽く後ろにバックステップで避け、その隙に鎌鼬を横に一閃。アヌビスたちは真つ二つになった

「さて・・・あいつらは・・・ってあれっ!?アリアとキンジの奴は!!?」

後ろを振り返ってみると、アリアとキンジの姿だけが無くなっていた。

「白雪!!キンジとアリアは!!?」

「キンちゃんとアリアは、さっきの轟人形ゴレムが逃亡したのを追いかけていったわ!」

な!!!?ただの人形如きに深追いする奴がいるかよ!!?」

「仕方ねえ!!白雪!!レキ!!追うぞ!!」

「うん!」

「はい」

白雪とレキと共に、アヌビスを深追いしていったアリアとキンジを

追いかけていった。

五十二本目 決断

カジノから逃げ出したアヌビスを深追いしたアリアとキンジを追うが、一向にアリアとキンジの姿が見当たらなかった。

「クソッ！アリアとキンジはどこに・・・!?」

「かず君！」

軽く舌打ちを鳴らしたそのとき、白雪が俺を呼んできた。

「なんだ!？」

「あそこ！」

そう言つて白雪が指す所には、海水に逃げ込んだアヌビスを水上ボートで追いかけるアリアとキンジの姿が目に入った。

「!!!キンジ!!!アリア!!!」

二人の名前を叫びながらも一つの水上海上ボートまで走るが、それを拒むかのように、俺の前にはアヌビスが並んでいた。

「邪魔だアアアア!!!」

怒声と共に鎌鼬を振るうが、カジノで倒したアヌビスたちを見て学習したのか、いとも簡単によけられてしまった。

「クソッ！」

こんな奴らに構つて暇なんてねえのに!!

口には出さず心の中で愚痴をまき散らしていたそのとき

「かず君行つて!!!」

白雪の声と共に、目の前のアヌビスたちが砂鉄に成っていった。おいおい、鬼切を上手く使いすぎだろ……

「ああ！」

白雪に一言そう言い、俺は水上ボートに乗り込んだ。幸いなことに、水上ボートのエンジンがかかっていた。直ぐ様ハンドルを握り、キングジたちの所へ向かった。

「早く……！最悪な事態に陥る前に……！早く……！」

焦る気持ちを口に出しながら、次第にハンドルを握る力が強くなっていくのが分かった。

あの二人にもしものことがあったら……俺はみんなに顔向けできねえ！！

心の奥で呟き、水上ボートの速度を上げていった。

キンジ side

「『緋弾のアリア』・・・か。まったく、夢い夢だったな」
黄金の船のデッキで、兄さん、いや、遠山金一が喋り出す。

「兄さん・・・俺を・・・俺を騙したのか！！？アリアを殺すのはやめたって言ってたじゃないか！！」

自分の兄の先程からの態度に、俺は怒りを覚えていた。

「やめる？何を言っているキンジ。俺はただ、看過かんかしただけだ」

「詭弁だろそんなの！！あんたが・・・！あんたが助けてくれれば！アリアは・・・！！」

俺はこの言葉を言っている時、ふと思った。情けねえ。なんなんだよ・・・結局俺は・・・兄さんに頼ってばっかじゃねえか・・・

俺の言った言葉に、兄さんはさっき砂礫の魔女から渡された物を取り出した。それは、小さな砂時計だった。

「あれは砂礫の魔女、パトラによる呪弾だ。アリアは今から24時間生きてる」

「ってことは、24時間以内にパトラを倒さないとアリアが・・・
死ぬ。」

「パトラはその間に教授と交渉を行っただろう………自分
にイ・ウーを渡さなければ、アリアを殺す、と」

「な、なんでそんなことする必要があるんだよ!!?」

さつきも思ったが、なんでアリアの名前が出てくるんだよ!? 訳わ
かんねえ!

「イ・ウーを束ねる存在が「教授」と呼ばれる男だ。が、近々その
教授が寿命で死ぬ」

イ・ウーを束ねる教授って奴が寿命で死ぬ!? でも、それがアリア
と何の関係があるんだよ!?

「教授の死後、イ・ウーの一「主戦派」の連中はその力をもつてし
て、恐らく………世界に攻撃を仕掛けるだろう」

世界に攻撃を仕掛ける!? なんだよそれ!? それって世界征服をす
るって言うてるようなモンじゃねえか!?

「そんな漫画みたいな話があるわけが………!」ある。それす
らも可能とする場所なのだ。イ・ウーは」

兄さんの言葉に、思わず絶句した。そんなことが出来るレベルの奴
等と敵対していたのか………俺は………

「だが、それを良しとしない奴らもいる。「研磨派」。こいつらは
教授の死後、組織が分裂するのを恐れて、次のリーダーを探してい
た。それに当てはまるのが、アリアというわけだ」

なんだよ………それ………全然意味が分かんねえよ!!

「アリアがイ・ウーの言いなりになる訳がない!! アイツは……
! 母親に濡れ衣を着せたイ・ウーを憎んでるんだぞ!? 寧ろその教

授とやらを捕まえたい筈だ!!」

「それが言いなりになるんだ。あの男「教授」の前ではな」
なんなんだよその教授って奴は・・・!? 一体何者なんだ!?

「俺はイ・ウーを内部から崩壊させるために、表舞台から姿を消し、闇に潜み、奴らを倒す方法を探った」
兄さんは淡々と続ける。

「そして見つけた。だが、それにはリーダー不在の状況を作り上げることが必要だった。可能性は二つ

一つは、教授の死後とともにアリアを殺す。これによりイ・ウーは一時的ではあるが、リーダー不在の状況を作り出せる
そして二つ目。今のリーダーである、教授を抹殺することだ」

教授の抹殺。理子やジャンヌにブラド。それ以上の化け物の頂点に君臨する教授を倒すことなど不可能だ。

ちくしょう!! 結局は・・・・・・・・弱いから・・・・・・・・

俺が弱いからこういうことになるんじゃないか!!

自分の弱さに悔やんだ。出血するくらいの強さで握りこぶしを作った。

「そこで俺はお前たちに賭けてみた。が、パトラごときに不覚を取るようでは「第二の可能性」は無い

ならば俺は、確実に成功する「第一の可能性」に戻るまでだ」

それは即ち・・・・・・・・アリアを殺す、と言う意味になる。

「・・・・・・・・帰れキンジ。イ・ウーは、お前の手に負えるよう
なちっぴけな組織ではない」

背中を向けたま言う兄さんの言葉に、俺は口ごもってしまった。

・・・・・・・・どうすりゃいいんだ・・・・・・・・兄さんの言っ

ていることはある意味正しい……………けど……………ア
アを犠牲にするなんて……………俺には……………

「……………これが最後だキンジ。帰れ。犠牲はアリアだ
けで十分だ」

！！！！

俺の頭の中で、何かが弾けたと思うと、俺はまるで引っ張られるか
のように、兄さんのいる黄金の船に飛び乗った。

その途端、俺の体に戦慄が走った。兄さんの顔を見てみると、怒っ
ていた。それは、最早人の出せる殺気ではなかった。俺の父さん「
遠山金叉」は「静かなる鬼」と、呼ばれていた。兄さんは何も口に
してはいないが、とてつもない殺気を出していた。正直怖い。今す
ぐここから逃げ出したいくらいに、体が震えている。だが、俺はそ
れを無理やり抑え、兄さんと目を合わせた。

「兄さん！！あんたは間違っている！！正義を謳うなら誰も殺して
はダメだ！！それが本当の正義ってものだ！！」

「キンジ。それは俺も考えたさ。考え、考え、考えた結果、こうす
ること以外ほかならない。力無き民、世界を護には多少の犠牲もや
むを得ん」

「だからって、諦めたらそこで終わりだ！！」

分かってる。俺が選んだこの道は、茨の道だっただけくらい。でも、
それでも！！俺は兄さんに逆らってまで、アリアを護る道を選んだ
んだ！！その道に……………後悔はしない！！だ
から……………

俺は意を決し、無言で兄さんにベレッタを構えた

「兄さん……いや、元武偵庁特命武偵、遠山金一！！あんたを殺人未遂の容疑で逮捕する！！」
「今ここで、兄さんを超える！！！」

五十三本目 超える弟

「……………いいだろう。お前のHSS……ヒステリアサヴァンシンδροームを見せて貰おう」
そう言った兄さんの手には、いつの間にか銃が握られていた。

「この船が沈むまで残り10分と言ったところか……………その間、キンジ。お前にもう一度だけ「緋弾」と絆があるのか……………見定めさせてもらうぞ」

刹那、当たりをマズルフラッシュが襲った。そして

ダアン！

銃声が響き、左胸を痛みが襲った。

グッ……………！！

「……………何故だ、何故避けなかった」
へっ……………

「わざと……………食らったんだよ……………！それくらい……………分かれ……………！」

視えたぞ……………！不可視の銃弾……インヴィジブル……………！！

「あんたのその銃は、コルト・ピースメーカー。そして、拳銃史上……………早撃ちに特化した銃だ……………！」

その時、僅かに兄さんの目が見開いたのが見えた。

「あんたはそれを……………ヒステリアモードの人間離れた反射神経で……………目にも留まらない速さで発泡した。それが……………」
「不可視の銃弾」のトリックだ……………！！
インヴィジブル

「……さすがだな、キンジ。やはり俺の弟のことだけはある」
兄さんは悔しそうに、でもどこか嬉しそうな表情で言ってきた。

「だがな、キンジ。お前の戦闘技術の全ては、俺が教えたものだ。
その中に、不可視の銃弾を防ぐ術などはない……！」

確かに。俺の今までの戦闘技術の全ては、目の前にいる兄さんから教えてもらったものだ。そして、その中に不可視の銃弾あれを防ぐ技術はない。仮にあったとしても、それは兄さんが発案したものであり、その対処法も知っているハズだ。なら………

「キンジ。お前は不可視の銃弾これを避けることはできない。いかにお前のHSSであろうとも……放たれるまでに36/1秒しかないこの銃弾を避けることとなつてできない………無論、俺にもな………」
作ればいい！避けることができない、対処する方法が無いならば………今ここで新たに作ればいいだけだ………！

「浅はかな」

兄さんがため息をついた。それも無理は無い。なにせ俺がとった行動は………

「見よう見まねで「不可視の銃弾」インヴィジブルを使うつもりか」
不可視の銃弾を放つ構え。「無形の構え」
いける………

「だが、お前の銃は「自動拳銃」オートマチック。不可視の銃弾を放つには不適切だ」

余計なことは考えるな………今は………兄さんを超えることだけを考える………！

「眠れキンジ……兄より優れた弟など……いない……！」

その瞬間、俺の目には、世界が止まっているかのように思えた。見える……！見えるぞ……！兄さんが砂を払う跡軌跡が！

兄さんの動きを俺は、そっくりそのまま真似し、ベレッタを構える。それは、鏡の奥に潜んでいるもう一人の自分に向けるかのように思えた。刹那

ダァン！

パァン！

俺の銃が少し遅れて、発泡された。兄さんの放たれた銃弾は、迷わず俺の胸に向かってきている。だが、俺の銃弾がそれを許さない。

ギイイーン！！

俺の放たれた銃弾が兄さんの銃弾を真正面から跳ね返した。跳ね返された銃弾は、真っ直ぐ兄さんの銃口に向かっていく。

あの時、ブラドの魔臓を狙った時の技「銃弾撃ち」の改良版であり、今しがた俺が編み出した不可視の銃弾に唯一対抗できる技。その名も「鏡撃ち」。

放たれた銃弾を、相手の銃口に跳ね返す技だ。だが、兄さんの銃弾を跳ね返すということは、当然俺にも先程放った自分の銃弾が返ってくる。だが、それは帰ってこないと自信をもって言える。

装備科の天才「平賀文」。彼女が改造したこの不具合な三点バースト。一度引き金^{トリガー}を引けば、二発弾が発射される。日本では違法ものだ。だが、そんな違法ものが、今この瞬間、役に立つ。

パァン！

二つ目の銃弾が発射され、返ってくる銃弾を明後日の方向へと弾いた。不意に兄さんの銃を見ると、それはキレイに破壊されていた。

破壊されたピース・メーカーをその場に落とした兄さんの顔は、歪んでいた。

へ．．．．へへっ．．．．．ざまあ．．．．．みる．．．．．
ってん．．．．．だ．．．．．

その時、俺と兄さんのいた砂で出来た黄金の船が崩れだした。このまま行けば海に真っ逆さまだが．．．．．今はそんなことを考えている余裕すら無かった。

勝った．．．．．兄さんを．．．．．超えた．．．．．
意識が朦朧としている中、俺は声を聞いた。

「キンジ。お前凄えよ．．．」

それは、いつも一緒にいた騒がしい奴の声だった。

五十四本目 一真の刀紹介

靈刀・鬼切

刀身は闇のごとく黒に染まっており、かの大六天魔王「織田信長」の靈魂が宿ると言われている刀。巨大な建造物をも一太刀で切り捨てるその力は、まさしく鬼神。その刃で切られたが最後、その傷は永久に治ることはない。

靈刀・鎌鼬

刀身は森林のごとく緑に染まっており、刀の正体は風の妖怪「鎌鼬」カマイタチではないかと言われている。刀身からは風が吹きあれており、刀一本で風を自由自在に操ることが可能。大気中の風を利用し、竜巻や台風を引き起こすことも可能である。

は行稼ぎ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8195w/>

緋弾のアリーナ―霊刀の侍

2011年12月21日23時49分発行